
用意周到な美少女生徒会長と平凡な俺

一期 つかさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

用意周到な美少女生徒会長と平凡な俺

【NZコード】

N4913W

【作者名】

一期つかわ

【あらすじ】

この学校の生徒会はどうにもイカれてやがる。超クレイジーだ。

美少女だけど性悪の用意周到で悪賢いお嬢様風生徒会長・今田美園に無理やり生徒会に入れられた俺は、いつたいどうなつてしまふんだ！

偽無口にスパイ少女に暴走幼女に格闘少女、寝過ぎ少女に生糸の早熱横浜つ子に異星人にマヌケの幼馴染、巨乳に殺人兵器、さまざまな女の子が織り成す、青春おバカコメディー！

メンバー集めから始まり反生徒会組織との対決。生徒会の壮絶な日

常が始まる！

頭をからっぽにして読んでほしい偶作です。それと、読みやすいようにかなりソフトな文章でやっています。

インディペンデンス・デイ（前書き）

主人公はホントに凡人です。

インディペンデンス・デイ

どうしてこうなったのか。教えてほしい。新一年生の俺には縁遠いはずの三年生の教室に、昼休み、俺と栗山さんと会長と三人。

机に足を乗つけそうな勢いで堂々と椅子に座る生徒会長、今田美園先輩は「私が何か悪いことしましたか?」と言い張る。

会長の席の前で仁王立ちをする先生は、この世のものとは思えないほどの厳つい剣幕で会長を睨む。

会長の後ろで見守る俺たちに飛び火しないことを祈る。というか、早くこつから立ち去りたい。先輩ってのは、ホントに厄介な人種だ。俺の隣で会長と先生の「らめっ」を申し訳なさそうな表情で見守る同級生の栗山さんも恐らく、いや絶対、俺と同じ心境だらう。

「みんなに迷惑をかけていることが分からないのか!？」

先生が突然怒鳴った。びくんと反射的に体が反応する。耳を塞ぎたかったがそんな余裕は無い。二人はクラス中の注目の的となつた。

驚くべきというか、仕方ないのか、会長はちつとも動搖していない。それどころか、先生にも負けないくらい辛辣な表情で先生を睨む。そして、なぜか目を閉じた。そしてそのままインチキ賭博師のごとく微笑んだ。その表情は、実に不気味で、俺にとつては吐き氣を催すほど不愉快なものだつた。

「……来年の今日は、きっと休日ね」

何を思ったのか、会長は突然そんな事を言い出した。そして、椅子から立ち上がった。

「カレンダーに目立つように明るい字でよーく記しておきなさい…
…今日という日を！」

会長はそう言いつと、勝ち誇つたように微笑んで先生を指差した。先生は呆れた表情で今までにない大きな溜め息をつく。先生、俺も同じ気持ちだ。

「我々、東董高校生徒会の独立記念日をね！」

この会長のことだから、アホらしい決めポーズでもするのかと思えば、会長はスカートが翻り、その中が見えるほどに大きく足を上げ、思いつきりその薄汚い足の裏で先生を蹴り飛ばしやがった！

「どわ！」と脱力したマヌケな声を上げて倒れた先生の姿に俺の身体は思わず前のめる。周囲にいた先輩たちもみんな、この壮絶、といつよりはサスペンスな光景に注目する。

「さあっ！ 行くわよ！」

会長は爽やかに俺たちの方へ振り返ると、こんなトコ早く立ち去るわよ、と催促する。従いたくない、だが、逆らうわけにはいかない。死にたくない！

俺の青春は、こんな傍若無人な脳タリン女と出会わなかつた時間軸

を妄想するのかと思つて、吹っ切れそつて怖い。

先生が立ち上がる前に、逃げるように教室を後にすると、俺たちは廊下を我が物顔で歩く会長の後を鴨の子のように黙々と追つた。

人気があるのか避けられてるのか、会長が通ると廊下は一気にざわめくする。そんな会長の手下だと思われるのが、嫌で仕方ない。

不意に「和也！」と会長は廊下の真ん中で立ち止まり、薔薇が舞う幻覚が見えるほど華麗に振り返つた。夢中で歩いてた俺は危うく会長にぶつかりそうになり、身体に急ブレーキをかける。

「なんすか？」

みんなが見てんだよ！ 恥ずかしいから早く済ませて！

「あなたの教室、どっち？」

「どっち？ だつて。なんかバカっぽい。

「どつちつていうか、一年B組、です」

「B組？ 夏子ちゃんは？」

その言葉に、俺の隣にいた栗山さんがびくんと反応する。この様子、相當怯えてるな。

「……桐生くんと同じです」

肩まで伸びた緑色の髪。その頭頂部に聳えるチャーミングなアホ毛。

四角くて黒いフレームの眼鏡。反射するレンズの奥に見え隠れする
大きくて澄んだ瞳。

朴訥、それの付け合わせメニコーのように謙遜な栗山夏子さんは、
さつきも言つたけど同級生だ。まだ知り合つて一ヶ月にも満たない。
全然話したこと無いし、話そつとも思わない。なんかこう不気味
つていうか……。

「じゃあ、行くわよ！」

栗山さんのことを考へてると、二つの間にか会長が結論を現出だし
ていた。会長の後ろ姿が俺と栗山さんを置き去りに遠退く。

「え？ ちゅうとー 行くつて、ビリーハですか？」

俺の反射神経は先輩を逃がさなかつた。

「アンタ自分で言つてたじやない。そのアホ面はなに？」

会長はまた振り返ると、俺をバカにしたよつて言つ。

困る。こんな怪物が教室にいるだけで迷惑だ！ それにもうすぐ昼
休みが終わるし。

俺の気持ちを知つてか知らずか、先輩は前に向き直りまた歩きだし
た。

俺は呆れて思わず隣の栗山さんの顔を見た。

栗山さんも俺と同じことを思つてたのか、苦笑いで俺の顔をみた。

これから、いつか栗山さんと顔を見合わせることが何度もあるのかと思うと、なんか気が遠くなる……。

インティペンションス・テイ（後書き）

「ファインド A ウェイ」と並行して書いています。
「ファインド A ウェイ」を真剣に書くあまり、これはすさんだ
作品になるかもしませんw

第1話 3日後 . . .

俺が無理矢理ブチ込まれた、あの悪質な生徒会は、校内でも有名つちゃ有名らしいが、大して生徒達の関心の的にはなつていよいよだつた。みんな、俺たちには関係ない、とばかりに嘲笑うだけだ。

しかし！ あれは三日前、水曜日だつた。週の真ん中に教室の真ん中で担任の教師を蹴り飛ばし、めっちゃさりげなく独立宣言した今田会長率いるたつた三人の生徒会を新聞部は大々的に取り上げた。

写真も載つてた。恐らく偶然あの場に居合わせたのだろう。慌ててシャッターを押したらしく写真がブレていた。

その影響は、一応生徒会に所属してる俺にも飛び火した。まあ、これは仕方ないことなんだろうな。

あの日から俺が友達と話すときの話題といえば、軽いレジスタンスと化した生徒会のことや傍若無人な会長のことばかりだ。大体が批判や馬鹿にする声だ。「なんなのあれ」とか「馬鹿っぽい」とかそんな感じ。正直俺もそう思つてる。

それに会長はエイリアンみたいに神出鬼没だから、校内で迂闊なことを言えない俺は、鎖でギチギチに縛られた鶏みたいだ。笑える。

もう一人、無理矢理生徒会に入れられた「同志」である栗山さんはどうなのか？ こんなことを言つては元も子もないけど、知らん。

まあ、俺と同じように苦労してるのは確かだよね……。

馬鹿馬鹿しいが、一部では俺と栗山さんが付き合つてゐるといふ噂が流れている。友達から聞いた。

恐らく全世界の高校の中で一番たちが悪く、パパラッチ集団とも呼ばれている新聞部によつて掲示板や新聞の記事にならなければ、すぐ消え去る噂だから心配ない、と会長が言つてた。それと、單にあんたに興味ないだけかもね、とも。

そんな台風のような楽しいよつでさうでもない日常。でも台風には目がある。会長は俺のプライベートを齎かすことはないってことだ。それだけはホントに助かる。

明日、土曜日、俺は隣町にある孤児院へ行く予定がある。もちろん一人で。行く理由は子供たちとの交流。勉強を教えたり一緒に遊んだりね。それにそこに行けば大親友だつている。楽しみで仕方ない！まあ、毎週のよつに行つてるんだけどね。

只今、午後十時、もうすぐ寝よつ。風呂も入つて、パジャマにも着替え、歯磨きも終えた俺は、寝る気に取りつかれた口ボットだ。

部屋の電気を消し、ベッドに身を投げ出し、布団に潜り込む。

今日は良い夢見れそつ……。

第1話 3日後 . . . (後書き)

短めかな?

第2話 眠たいパジャマと休日の朝

それは、ブレーキとアクセルを踏み間違えた、なんて言い訳が通じないほど突然の悪夢だった。

部屋の外から、俺の快眠を一刀両断する騒々しいノックの嵐、そして、地獄に落とされた俺には悪魔の呻き声にしか聞こえない高くてハキハキした呼び声。

寝ぼけた頭で考へても、明らかに意味無しのノックが終わると、今俺には爆発音にしか聞こえないドアを勢いよく開ける音。

「お兄ちゃん！」

妹といつも悪魔め！俺の名を叫ぶと、俺の肌の一部と言つても過言じゃない体温で暖まつた掛け布団を思いつき剥がそうと布団を掴んだ！

「お兄ちゃん！ 起きてよー！」

この悪戯好きの小悪魔め！俺から布団を奪おうなんて、それはテメエにとつて罰ゲームなんだよーく解らせてやるー！

妹が布団を引っ張ろうとしたタイミングを狙い、俺も布団を離すまいと中から布団を引っ張る。

案の定、引っ張り合いとなつた。

「ちよっとー お兄ちゃん！ 起きてよー！」

「いつを蹴り飛ばす準備はとっくに出来てる。後はタイミング」。

それは、あまりにも突然だつた。妹が布団を引っ張るのを諦めたのか、引く力を感じなくなつた瞬間、腹部に鉄球を落とされたようなそんな重圧が襲つた。

どうやら、妹がのし掛かってきた、らしい。なんとも悪戯悪魔らしい仕打ちだ。

俺は思わず目を開けてしまう。

「おい！ ちょっと！ オリテ！」

「堪忍した？」

妹が無邪気に微笑む。

「何なの！？ 朝っぱらから！ 今日は休日なのに！」

悪魔にしては、意外にも物分かりの良い妹は、俺の身体もといベッドから降りると、開いたままのドアを指差した。

「電話だつて。今田つて人から。和也を出せ！ つだつてさ！」

俺は耳を疑つた！ まさか、会長……？ ありえない俺の家の電話番号なんてアイツが知る筈もない！

そうは言つても、確認しないことには真相はわからん。仕方ない。俺は渋々、ベッドから起き上がり、妹にたたき起された分の眠気

が残る皿を擦りながら、一階のリビングへ向かう。

低い棚の上にある電話の横に死んだ人みたいに横たえてある受話器を取る。そして決まり文句である「もしもし」を囁える。

「和也ー。」

受話器の向こうから聞こえてきたのは、聞き覚えのある囁貴な雰囲気を無理矢理絞り出した高い声だった。

「会長？ ですか？」

「私の声をもう忘れたってことの？ 早くその寝惚けたままの一口トロ脳みそを冷凍庫で固めなさいー。」

恐らく、頭を冷やせつて意味、なのか？ 謎の文句を決め込んだ会長に返す言葉も見当たらぬ。

「ねえ！ 私の声聞こえてるの？」

「……は、はい一応」

「……寝ぼけてるとひい悪いんだけど、今日、暇？」

悪こと思ひとなら掛けでぐんなよー 脳タリン女！

「ねえ！ ホントに聞こえてるの？ 暇？ つて聞こてるのー。」

「暇じないですー。」

生憎、とこりよつは辛うじて。

「どうして？」

「用事があるんです」

「じゃあ、今回は許してあげる。じゃあなー。」

そつと会長だ電話を切った。

言つてゐる意味はさっぱりだが、傍若無人な会長にしては潔がよい。
まあでも、第一の壁は乗り越えたってわけだね。

受話器を置き、俺は洗面所へ行き、顔を洗い、歯を磨く。

朝食の準備が出来ていた。

平日、特に月曜日の朝は、ビターみたいに憂鬱だけど、休日の朝つ
てのは、ミントみたいな爽やかさだ。

第2話 眠たいパジャマと休日の朝（後書き）

細かい描写も無く簡単に書き上げる小説も悪くないわ
(ふと思つた)

第3話 チャーミー・ハウジングルズ

普通で良いのに、俺は何故か逃げるよつにして自転車を漕いでいた。

俺が逃げるモノといえばただ一つ、そつ、会長だ。電話番号を知られたんだから、あの人のことだ、住所まで調べて追つてきただ。

あの人のはじこには、俺におバカな被害妄想を抱かせるとこりだ。脳を洗脳されそうで怖い。

向かうのは勿論、隣町の孤児院。大きな川沿いの道路の片隅をやや急ぎ気味に安全運転する。

幾つ角を曲がったか、それは俺の頭の中の本能だけが記憶していることだらう。

上に高速道路が走る、都会っぽい大きな幹線道路から脇に逸れた小さな住宅街の路地、その一角に、通り過ぎてしまいそうなほど然り氣無く、ひつそりと佇む所々、塗装が剥がれて錆び付いてる緑色の門。それがここ「離菊育成園」の目印だ。

自転車は、脇の自転車置き場に止め、手ぶらの俺は、我ながら慣れ手付きで門を開け、中に侵入する。

本園入り口だつてのに、なんて地味なんだ。

遊歩道のような、植え込みに囲まれた縁豊かな細い道を抜けば、大きな長方形の家屋が俺を待ち受ける。ここが三つある棟の内の一
つ、「レモンの家」だ。

玄関に辿り着く前に、一人の華奢な少女が俺を見据える。そいつは俺もよく知ってる子だ。島崎明里だ。俺より五つ下の小五だ。

地毛なのかどうかは知れないけど清潔な茶色の髪。そして、もうちよつと伸ばしてからやればよかつたと思わせる、無理矢理結んだような短めのツインテール。

「和にいだあ！」

おつとりとした優しい声。明里は嬉しそうに満面の笑みを浮かべ、叫ぶと、猛ダッシュで俺に近寄ってくる。

夕日みたいな赤い健康的で柔らかそうなほっぺた、ゆさゆさと体を揺らす子供っぽい仕草。垢抜けた笑顔。

可愛い、ってのはこのことか。

「元気だった？ 明里」

「うん元気だよ！ とっても元氣い。アイム ファイン センキュー
－ アンジュー？」

「ピーク ア ブー！」

「いえーい！」

笑顔でハイタッチをする俺と明里。我ながら意味不明だ。

「和也くん。なにしてんのー？」

流麗なストレートの黒髪を靡かせて、仔犬を頭に乗つけて現れたそ
いつは、明里の同級生、九重理沙」と「くるりん」だ。

何を気取つたのか分からぬが、近づき難いオーラを滲ませて、微笑みながら俺らに近寄つてくる。

「くるりんもいたんだ」

「……それ何回目?」

「うーん、五回目? かな?」

「七回目ー。」

くるりんの頭の上の仔犬が「きゃん!」と可愛く吠える。生憎、犬語は教わっていない。

「早く中入るうよーー!」

明里が俺の服の裾を引っ張る。だが、明里が指差したのはレモンの家では無く、小さな道を挟んだ反対側のパツと見、倉庫のような木造の建物だった。

そこは、よく明里とくるりんと遊ぶ、多目的ホールだ。いつも鍵が開いていて、子供たちの遊び場となつていてる。

いつものように、俺らはそこでお邪魔する。

靴を脱いでフローリングに上ると、学校の体育館より一回りも一

回つも小さいが広々とした空間が広がる。

「今日は理緒はいないの？」

窓際の壁に腰を掛けながら、不意に思ったことを俺は素直に囁く。

「くるよお」

明里が返事をする。

「でも呼ばない。私あの子嫌い」

くるりんが眉を潜めながら、広々としたホール内の真ん中で小さなボールと遊ぶ仔犬を見据える。

そうだったな。くるりんと理緒には確執があるんだっけ。なんでそうなったか詳しいことは何も知らないけど。俺はいつも仲直りを促すが、どちらも譲らなくて困ってる。

「明里は好きだよお？」

明里が相変わらずのスロー加減で呟く。

ふと、ドアの開く音がホール内に響いた。くるりんの嫌いな理緒が入ってきた。ベストタイミングなのかバッドタイミングなのか……。

「来てたんなら言つてよねー！」

入つてくるなり叫ぶ理緒。

目立つ赤色のショートヘア。明里、くるりんと同級生だが、二人に比べて背が高い。スマートさとクールさを滲ませて慌ただしく近寄ってきた。

理緒、いい名前だ。

第3話 チャーミー・エンジニアーズ（後書き）

シリアルな展開には絶対しない。

第4話 チャーミー・ハングルズ フルスロットル

「理緒ちやあ～ん」

明里が嬉しそうに微笑む。それとは正反対にくるりんは険しい顔をした。

「くるりんも居たんだ」

ただでさえ機嫌が悪いくるりんに、理緒は嘲笑うように声を掛ける。ホントにやめてほしい。

「地獄へ落ちる」

理緒に対抗するように、「こ、くるりんは中指を立てて見せ付けた。

この一人が仲良くなつた日には地球が滅びるな。まあ、それにしても、いつものメンバーが揃つたわけだが……。

「駅前に新しいスイーツショップがオープンしたんだけど、和ちゃん、奢つてよ。くるりんは白腹ね」

「今日は金欠でね。また今度つてことだ」

「じゃあ、映画観にいかない?」

理緒がけろりと立つ。俺が言いたいことはただ一つ。

「バカかよ!」

「『奴答一』」

くぬつんがにやけむ。

ふと、明里がいないと思えば、隅っこの方で仔犬と戯れていた。隅っこにとどまらず、広いホール内を満面の笑みで仔犬と駆け回る。実際に平和的で微笑ましい。

「逃げる奴はベトコンだ〜逃げない奴はよく訓練されたベトコンだ〜」

俺は耳を疑つた。明里はなんと叫んだ?

「クラスの男子に言われたんだって」

ぽかーんとしていた俺を察したのか理緒が説明してくれた。

「あれって、言つてる意味わかってるのか?」

「まさか」

一発ギャグをやるような感覚で、あの台詞を言つたのか。おバカなのか愛嬌なのか。呆れる。

「明里ちゃん!」

「女子供をよく殺せますね!」

理緒が走り回る明里を呼び止めた。

理緒、何を言ひ出すのかと思えぱ……。

「簡単やー。動きがのんこからなー。」

おつとりとした穏やかな声で明里は言ひへ。どひやひら明里は正真正銘のおバカさんのようなだ。

「これも、男子に言われたの?」

「ううん。言われたつていうか、言つてたんだつてある男子が。なんか流行つてるみたい」

「……今度その男子に会つたら言ひといてくれ、『パパの精液がシーツのシミになり、ママの割れ目に残つたカスがおまえだ!』って

「つよーかい

俺も思いきつたことを言つたなあ。理緒のことだ。絶対、言ひだらう。それにしても「フルメタルジャケット」が流行るなんて。

「あ、そうだ!」

理緒が何か閃いたのか、手を叩いた。

「どひしたの?」

俺だけでなく、ぐるりんと明里も理緒に注目する。

「淳史お兄ちやん達が、裏のグラウンドに秘密基地を作つたんだつ

け！」

理緒の言つ『淳史お兄ちゃん』とは、この施設の理緒と同じレモンの家に居る野郎で、俺より一年下の中三だ。淳史とは俺も仲良しだ。

ちなみにだが、この施設の棟は、せっかくも言つた「レモンの家」、それから「ライチの家」、そして「イチジクの家」の三つだ。

明里とくるりん、淳史はレモンの家で、理緒はイチジクの家で生活してゐる。

「……あこつひひじいな

「行こうつよー」

理緒がホールの出入り口を指差す。

「勝手に入つたら怒られるよー。私いかない

くるりんが冷静に反論する。

「くるりんは臆病なんだね。大丈夫だよ！ 和ちゃんがいるもん！」

「明里も行きたい！」

「俺も行ってみたい。あいつらがどんなガラクタを作ったのか見てみたいし

俺も悪い奴だ。くるりんを仲間はずれにするなんて。許してくれ、

くるりん。

「よし決定！ 行こう！ 三人だけでね！」

理緒が握り拳を低い天井に向かつて掲げる。

「……っ」

怪訝そうに眉を潜めるくるりん。見てて可哀想で仕方ない。俺も悪いんだけどね。

元々くるりん側についていた仔犬も連れて三人でホールの出入口へ向かう。

靴を履き、ドアを開ける。

「……私も行く！」

意を決したように突然、くるりんが叫んだ。淋しがりやなんだな、くるりんも。

こうなることを願つていたよ。

くるりんも出入り口まで駆け足でくると、俺ら三人を差し置いて、先に外に出る。そしてこう言つのだつた。

「何してんの？ 早く行こうよー！」

くるりんらしいや。

三人は苦笑いでぐるりんに続く。

レモンの家の脇にある大きな樹が目印の短い道を抜けると、森の一角みたいな木々に囲まれた広々としたグラウンドが広がる。

ここはよく、施設の近くにある私立幼稚園の運動会だとか、施設のイベントに使われている。イベントには、俺も何度か参加したことある。

グラウンドの縁は小高い丘のようになつていて、その一角に、俺の慎重よりもやや低い、小さな四角い粗末な建物が見えた。恐らくあれが秘密基地とやらなんだろうな。

「あれだよ

案の定、理緒が指差したのは、まさにその四角い建物だった。

「やっぱガラクタじゃん」

思わず口からこぼれたのは、俺の素直な気持ちだ。

「そう? そんなことないよー 狹いけど楽しそうー」

「入ったことあんの?」

「だつて、私も一緒に作つたんだもん! 淳史お兄ちゃんたちは入るな! って言つてるけど、みんながいない時は、こつそり入つてるんだ」

酷い連中だ。

「言い付けてやるー。」

くるりんが謎の強気と理緒に対する対抗心を剥き出しにする。

「くるりんの『言ひ』となんて、誰も信用しないから大丈夫！ ね！
ホラ吹きくるりん」

「……ナイフで犯す……」

明里と理緒には聞こえてなかつたようだが、俺にははつきり聞こえた。

Hロコロコと腰こすかよくなつてきたんだな。 ここつりむ。

Hロコロコといふか、狂氣だね。

第4話 チャーミー・エンジニアズ フルスロットル（後書き）

あの子たちに、例の汚い台詞を言わす気なんてなかつたんだが。。。。

第5話 アリエン

ガラクタ屋敷もとい秘密基地の中を覗き込んだ俺は、恐らく、今までにないほど、心がフェス帰りの若者のように騒がしくざわめいた。

何でだ！ ありえない！

「相変わらずのアホ面ね。何なのそのパンツ履き忘れたーって顔は」

目を擦つても、その幻覚は消えない。つてことは本物なんだな……。

そう、淳史たちが作ったガラクタ屋敷の中に入っていたのは、今田美園クソ会長だった！

気に入ってるのか、プライベートだといつのに学校の制服を着ている。

性格悪そつに見せる少しつつた大きな目とお嬢様ぶつた佇まい、一言で言えば滝のような綺麗な水色の長い髪は、クソ会長の印のようなものだ。

呑気にアイスを舐めながら、アホみたいに俺を見上げていた。

「あー 美園お姉ちゃん！ 来てたんだ！」

俺が、なぜここにいる！ って聞く前に理緒が食い付く。明里も興味津々だ。くるりんは俺と同じような心境なのか、なんか機嫌悪そう。

「おはよー、理緒ちゃん、明里ちゃん」

愛想良く挨拶をする会長。

「久しぶりー！」

「明里いー！ 元気してた？」

愛想しそうに明里に抱きついて会長。

第三者ははずの俺は反射的に体がびくんと反応した。襲いかかってぐるかと思つた……。

会長と明里、理緒がじやれているのを横目に、くるりんが俺の服の裾を引っ張つてきた。

「なに？」

「こんなビッチ放つといて、私ら一人だけで遊ぼ」

くるりんは良くなつてる。

つていうか、こいつら会長と知り合つたのが驚きだ。一体、どんな経緯で知り合つたのか……。

「やうだな。行こうか

俺とくるりんは、こいつと逃げ出せりと、忍び足でグラウンドの出口へ向かおうとする。

「和也！ 一人してどこ行くの？」

生憎、会長に呼び止められた。なんて言い訳する？

「失せろ！ 汚い腐れア ルビッチ！」

可愛らし高い声で堂々と酷いことを叫ぶ喧嘩腰のくるりんだが、俺はくるりんの味方だ！ もつと言つてやれ！

「デタラメと人の悪口しか言えない能無しのホラ吹きチキン娘。よく覚えておきなさい。あなたみたいな性格の悪い腹黒おチビちゃんのことを『ビッチ』って言つたよ？ わかった？」

穏やかな口調でくるりんに反撃し嘲笑う会長は、会つてまだ数分だが、今日イチで怖い。

俺は関係無い、という想いを秘めた苦笑いでくるりんの方に目を向ければ、怒りからなのか小刻みに震えている。

「なあ、ちょっと一人とも仲良くなしてつて！」

見ていたれなくなつた俺はすかさず仲裁に入る

「そりだよー一人とも！ 見苦しいよー！」

理緒も俺に協力してくれる。

「……あいつだけは絶対に許せない！」

くるりんは仲直りする気など更々無こよつだ。全く、どうしたもの

か……。

「私は許すわよ？」

会長は案外、潔い。

「やうすれば、へるりんだけが悪者になるからね」

前言撤回！ イカれてる！

「和也くん！ もつ行こう！」

くるりんが俺の手を強引に引っ張り叫ぶ。引きずり戻されたように俺はくるりんとその場を後にする。

会長も理緒も明里も、誰も止めたりはしなかった。

「どこ行く気？」

一応訊いてみる。

しかし、くるりんは答える気などないようだ。

無言のまま連れてこられたのは、レモンの家の正面に広がる殺風景な広場の脇の木々に囲まれた涼しげな小さなスペースだった。

俺らは、そこにあるベンチに並んで座った。

「……なあ」

俺の言葉にぐるりんは「ん？」と反応して、俺の顔を見る。俺には、さわさわからずつと聞きたかつた重要なことがあった……。

「何で会長がここにいるの？」

仲の悪いこいつに聞くのは野暮だつたかもしけないが、すごい気になつていたことだ。

「会長って？」

「今田先輩のこと」

「あの人……。この出身からしてみよ」

初耳だ！ それに、どうこうことだ？ 俺もこの施設出身だが、あんな奴見たことない！

「こいつ出たの？ どこの部屋だった？！」

聞きたことがありやしない！

「えっと……」

人差し指を唇に添えて、首を傾げるぐるりん。

「あー やっぱりこ这儿だ！」

明里と理緒は、俺たちを見つけるなり叫び、駆け寄ってきた。まさにバッドタイミングだ。

「……ジッチは？」

俺の質問をすっかり忘れたのか、くるりんは一人に訪ねる。

「わざと帰った。くるりんによりじへだつてせ」

理緒のその言葉に、くるりんは安心したのか溜め息をつく。

「くるりんがやんば、なんで美園お姉ちゃんが嫌いなの？」

明里は穏やかな口調で率直な質問をする。

「気が合わないの一、会つたときからねー！」

「俺も同じ意見だ。会長とは気が合わない。会つたときから」

「わざとやら俺たち四人は、一チームに別れてしまつたよつだ。

第5話 アリエン（後書き）

なんか、「苺ましまる」を連想してしまった。。。。

第6話 ミソ・ミツチ・プロジェクト（前書き）

エリに向かって行くかなんて知らない。

第6話 ミン・ペッチャ・プロジェクト

月曜日、俺はいつものように学校に登校した。

昇降口で上履きに履き替えて、一階にある一年B組の教室を団指していた。

だが、気取らず普通に廊下を歩いているのに、なぜかみんなの視線が痛い。これも生徒会、とか会長の影響か……。

掲示板の前をなに食わぬ顔で通り過ぎた途端、俺は何かを感じた、というよりは控え目な横目で見た掲示板に何か見覚えのある写真を見つけた。

俺は引き返し、その正体を確かめる。

「なんじゃこりゃ！」

思わず大きな声が漏れた。だが、掲示板にはそれ相応の記事が一枚の写真付きで大々的に貼つてあった。

一枚目の写真は、俺と理緒、明里、くるりんが仲良くしてた写真で、場所は恐らく、とか絶対あの離のホールだ。一枚目は、俺とくるりんがベンチに座つて話している写真だ。

まさか、何で！？ 誰がこんな撮ったんだ！？

とこづか記事が気になる！

『一年B組 桐生和也 重慶のロココンか！』

見出しからふやかいやがる！

『一年B組在籍の桐生和也は、毎日のよつて、隣町の児童養護施設「雛菊育成園」へ行き、そこで暮らす幼女たちと戯れることが日課で』

新聞部のマスクノミ氣取りのゲス野郎共が！ 何だこれは！ あることない」と書きやがつて！

つていつか何で俺が周一で施設行つて知つてるんだ！？

俺が怒りに狂つていると、頭に軽い衝撃を感じた。ふと振り返つて見ると、そこには会長が勝ち誇つたような微笑みを浮かべ立つっていた。

「おはよー。ロリシユへん！」

「お、おはよー！ こます会長……『ロリシユ』って何ですか？」

「ロリコンシユチユーテント、略して『ロリシユ』。私が作った言葉よ？」

この瞬間、俺は会長に対し奇妙な怪しさ、それに対する説得力を感じた。

「何なんですか？」の記事

「ああ？ 何なんでしょうね」

怪しい！ すりへきして。

「会長ですか？」 としたのを

「私が？ まさか！ 私はこんな無益なことしないわよ？」 新聞部
が勝手にやつたんじゃない？」

会長も怪しいが、聞いてた通り新聞部つてのは相当イカれた連中の
ようだ！

ホントに無益だ！ とにかく俺は記事に書かれたようにロリコンな
んかじやないし、今すぐこれを訂正、というか排除してもうわないと、俺はこの学校であつとロリコンとして生きていかなければならな
くなる！

「新聞部は？」 ですか？

「乗り込む気？」

「ええ」

「部屋は隣の部屋棟にあるわよ」

「何階ですか？」

「三階よ」

よし。会長のわつには良こ仕事をした。今から乗り込んでやる！

俺は、駆け足で来た道をそのまま戻り、部室棟へ向かう。

階段を駿馬の「」と駆け上がり、二階につくと息つく暇なく新聞部の部室を探す！

廊下の一一番端の部屋、そのドアに確かに「新聞部」とバカみたいに色とりどりのマーカーを使って書かれた画用紙が貼つてあった。

俺はノックも無しにそのドアを勢いよく開ける！

大きな長方形のテーブル。その周囲に三人の生徒、恐らく全員上級生だろう。

「何なの？ ノックも無しに」

部室の奥の方で足を組んでパイプ椅子に座り異彩を放つ一人の制服姿の女子生徒。

長い黒髪を結ったポニーtail、愚民を弾圧するような鋭い眼光、粗末なパイプ椅子を磨きあげられた玉座に見せてしまつ堂々とした佇まい。

それに、恐らくどうだらうこの人……。

「薄汚い蟻が迷い込んだみたい。あんたの巣はここじゃないって教えてやつて」

部員にそつと言つた女子生徒。

「彼女は、新聞部部長の小泉今日歌よ。みんなは『キヨンキヨン』

つて呼んでる。あんな態度だけば、ホントはすりへ向けてこなよ。
私の同級生なの」

ふと、背後から声がすると思い振り返ると、セレブなんとかわせ
まで別の棟にいた会長がいた。ホントにエイリアンみたいだ！

「おはよつ美園、今日はなんの用？ 仲間を引き連れて」

「おはよつキヨンキヨン。ほひ、見覚えない？ いのナ」

「だからあなたのイカれた生徒会のメンバーでしょ……」

そつ言つて小泉先輩は俺の顔をまじまじと見つめる。

そして何か思つ出したよつ、「ああ」と手を呂く。

「ロコシユねー！」

小泉先輩が高々と笑顔で叫ぶ。

俺は納得がいかない！ 頭の中が混線して漏電しそうだ。

「何なんですか！ こつたーー！」

「何がよ」

小泉先輩が呆れたよつに高飛車な態度で俺を下田で、あじりつよつ
に見下す。

「全部ですよー！ 記事とこーい、写真とこーい！」

「[写]真を提供してくれたのは美園、記事を書いたのも美園。言いたいことはそれだけ？ ならとっと帰つて」

「ちよつ・ キョンキョンつじばー それは言わない約束でしょー！」

会長は唇に人差し指を当つて、喋るなー とアピールする。

俺はクソ脳タリン会長を睨む。

「会長は、いつたい俺をどうしたいんですかー？ といふか、何で周一で施設行つてるの知つてるんですかー？」

「それは……あんたの妹から教えてもらつたのよ」

あーいつめー！

「つひいうか早く撤回してくださこよー あんたの言つた通りこれは無益だー！」

「残念だけど、和也はまだ生徒会の一員として良い仕事をしていないよね。まあ自分でも分かつてるとは思うけど。良い活躍をしたら、私が直々に全校生徒の前で謝罪するわ。それまではお・あ・ず・けー会長本人は可憐うしく書つたつもりなのだろうが、ちつとも可憐くない！」

「小悪魔なんでもんじやない、これこそ正真正銘の魔王だ！」

「可哀想な和也くん。最近では反生徒会もできたそだしね……」

小泉先輩が同情する。他の新聞部員も俺に哀れみの視線を向ける。
やめてほしい。

それについても気になる言葉が出てきた「反生徒会」？

名前的に生徒会に反抗する組織なんだろ？。やつらに頼もへ……
早くこの生徒会をぶち壊してくれ！

第1話 桐生和也と東董の騎士団

陽が差し込む小さな窓が鉄格子に見えたのは初めてだ。

俺は、朝以来、再び部室棟に来ていた。というよりは無理矢理連れてこられた。俺は椅子に座られ、目の前には長机越しに三人の上級生。一つしかない出入り口には、門番のように佇む、彫り深い、金髪の恐らくハーフか外国人。これまた上級生。

まるで面接のようだ。

一人、机の上に足を乗っけてるのが気になるが……。

今、聞きたいことはただ一つ。

「いつたい、なんなんですか？」

そう言うと、一人の眼鏡をかけた男子生徒の口が開く。

「まあ、落ち着いてくれ」

自分では、これまでにないくらい落ち着いてるつもりなんだが……。

「僕の名前は、一木 博^{いつき ひろし} ようじく」

眼鏡の奥の小さいが鋭い眼差しと、洗礼された仕草。

「は、はあ……」

相槌に紛れて小さな溜め息をつく俺。

一木さんは、隣の二人の女子生徒に向やかに会話をす。

「山口 桃子とおっしゃいます。よろしく！」

これまた眼鏡をかけた黒いおかっぱの髪の女子生徒が自己紹介をする。

「ウチは、松田 聖一 よろしく！」

毛先を遊ばせた赤いショートヘアの女子生徒。悪そうなツリ目、口元に眩しいぐらいに光輝く真っ白い健康な歯。

体操着姿のそいつは、実にボーグンショだ。

そして、俺が気になつてた奴だ。机の上に足を乗つけて偉そうな態度。

それにもしても、よひじくつて言われても困る。

「そして彼は、ゴーパーだ」

一木さんがドアの付近の西洋風の男子生徒を指差す。

ゴーパーと呼ばれた先輩は、無口で返事も挨拶もしない。

「……」

「よ、よろしくお願ひ、します……」

とつあえず俺も全員に「ことわざ」を辞儀し挨拶をする。礼儀だからな。

「気になつていただる? 我々が何なのか

「は、はー」

一木さんが放つオーラに圧倒される俺。

「我々は、教頭から直々に命じられて、君ら生徒会に制裁を降す、いわば反生徒会ってわけだ」

「は、はあ……」

出た。さつき小泉さんが言つてた奴だ。

それにして教頭は頭が悪いのか? 会長が仕切る生徒会が嫌いなら、無理矢理解雇すれば良いと思つんだが……。

なんでわざわざ「反生徒会」なんか作つたんだ?

「ちやんと名前もあんだよ。『東董の騎士団』ってね! カッコいいでしょー! ?」

松田さんが付け加える。

「……その『東董の騎士団』が、俺になんの用ですか?」

俺もバカな質問をしたなあ……。俺たち生徒会を制そりとしてる連中に。

「実は、君に頼みがあるんだ」

一木さんがひつそりとした低い声で言いつ。

「な、何ですか？」

「君も『東董の騎士団』に入らないか？」

「もうもうー、そしてあのバカ美園をギッタギタにこらしめんのー、
楽しいよー、絶対！」

一木さんと温度のある、高いテンションと声で松田さんが口を挟む。

そしてそれを一木先輩が「君は黙つてくれー」と制す。

「……確かに楽しそう」

正直な気持ちが零れた。

「でしょでしょーー？」

松田さんが前のめりになると、一木さんが大きく咳払いをする。

あのクソ会長を懲らしめるのは、確かにこれ以上にないパーティーだ。でもこの人たちにそんなことができるのか、少し不安な部分もある。

まだそんなに会長のやりたい放題ぶりは見たことがないが、オーラ

で伝わってくる。

「ナハレで、あなたにやつてもらいたい、とても重要な任務があるの」

山口さんが口を開く。

「どんなことですか？」

「スペイツハイツ」

「スペイ？」

「せう、スペイ。あなたはいつものように生徒会活動、もといお遊びに付き合えれば良いの。それで、あの子の弱味や色々な情報を握つて、で、手に入れた情報を私たちに伝える。それだけ。それで、タイミングを見計らつて、私たちが一気に攻撃する。もちろんあなたもね？ その方が混乱させられると想つから」

「この人たちがバックについてくるのは、とても頼もしい。成功するか不安だ。」

「そんな心配すんなつて！」

松田さんが根拠のないフォローを入れてくれる。

「とつあえず、が、がんばります！」

「よし！ 今日から君も騎士団の一員だ！ よろしく！」

一木さんが握手を求める。

俺は、生徒会でありながら反生徒会の騎士団へ入ったのだった……。

第1話　桐生和也と東董の騎士団（後書き）

そういうえば、まだ美園の傍若無人ぶりが發揮されてないね。 。 。 。

第2話 ウオッヂボーイ

しかし、誰が美園を見張るのか！　もちろん俺だ。

だが、一つ困ったことがある……。

クラスのみんな、知らない奴まで俺のことを「ロリコン」だと「ロリシコ」と呼ぶ。そう、これも全て会長のせいだ！

そう、だから俺は騎士団に味方するのさー！

美園会長といつも薄汚れた醜い魔獣の首を、俺が勇者となり、騎士団が俺の強力な武器となり、原型もどぎめないほどグチャグチャに切り裂いて、その墮落しきつた精神を死体安置所に送つてやるのさー！

そして俺はこいつ言つ、「火葬でお願いします」。

イカれた悪の魂を洗礼された正義の炎で見違えるほど更正させてやるのさー！

悪を洗い流された魂が会長の肉体に戻つた時、会長は俺にこいつ言つだろ？、「ああ主よ。どうか私を董査に連れてつてくださいー！」。

そして、全てを涙ながらに謝罪するんだ！

うん、最高のシナリオだ　　なんてね。

バカみたいだ。

放課後、俺は、会長に絶対に来るよつと言っていた生徒会室へ向かう。

騎士団のひともあって、行かないわけにはいかないんだけどね。

それにしても、生徒会室を未だに使えることが不思議でならない。いつたこどうなつてんだこの学校は……。

お城の中にいるよつと、大きくて豪華な扉の前に、クソ会長と栗山さんが立つて何やら貼り紙とじらめっこしていた。

「どうしたんですか会長?」

一応訊いてみる。

「ああ和也……」

相変わらず貼り紙とじらめっこしながら囁く。

俺は隣にいた栗山さんに話を聞く。

「何があったの?」

「……つかえないみたい」

苔アホ毛娘め。何をかって聞いてるんだよ!

「『東董の騎士団』ねえ……アホみたいな名前。誰が考えたのかしら。私ならもつと良い名前考えるわよ」

会長が呆れたように脱力して言ひ。

騎士団の名前を聞いて、俺はその貼り紙を見る。

『「」の部屋は、腐れ会長率いる堕天生徒会には贅沢すぎる。ヘドロまみれのガマカエルにフカヒレを与えるわけにはいかない。今日からこの部屋は我ら反生徒会団体『東董の騎士団』の部屋だ! 異論は認めない! 交渉にも応じない!』

酷い言われようだな。まあ全部クソ会長のせいだが。

「行くわよー」

会長の力強い叫び声に、俺と栗山をよびくんとなる。

そして、去り行く会長の後に続く。

それにしても驚きだな。会長なら強行突破とかしそうなのに。いつたいこの人は何を考えてるんだ?

それより、会長に関する情報を集めないといけないんだっけな。情報つつても、どんなのがある? 弱味? まずそんなものが会長にあるのか疑問だ。

会長の後を追つて着いたのは、新聞部の部室前だった。ここに来るのは朝と今の一回目か。今度はなんの用なんだ?

もしかして、この部室を乗つ取つたりなんてしようとしてるんじゃあるまいな?!

「たのもーー！」

会長はこいつをよ前にそつ昂び、大きな音を立てて全力でドアを開ける。

まるで道場破りだ。

「はあ……美園、今度は何の用？ それにメンバー全員連れて」

朝と変わらず、大きなテーブルから離れたところにパイプを置いて座っている小泉今日歌さんことキヨンキヨン。

会長はお構い無しにズカズカと室内に入ると、適当に置いてあつたパイプ椅子を持ち出し、小泉さんのところまで行くと、向かい合わせに椅子を置いて、座った。

「……だから、何の用なの？」

呆れる小泉さん。

「キヨンキヨン！ あんた、生徒会に入らない？」

「これは！ 僕もこんななかたちで生徒会に誘われたんだ！」

『サッカーやるつぜー』みたいなノリで！

「はあ？ ……生憎、新聞部の作業で手一杯なんだけど」

完全に呆れ返つてる。めんどくさいつ。だが、俺だってこんな風に

お断りをせてもうつたさー！

会長のスカウトはこんなもんでは終わらない。

「大丈夫よ！ 息抜きだと思えばいいから！ 新聞部なんていう人のプライベートをることないこと書く、ゲスい部活なんて、心底疲れるでしょ？ でも生徒会は違うわ！ そう、すつごく楽しいの！」

「ウチらはパパラッチなんかじゃないし……。学校の行事に関する」ととか色々な情報を発信して……」

あ、そうだ。これもちゃんとした情報だな。会長が新聞部部長を勧誘つと。

「お願い！」

「別に私じゃなくとも、他にそういう騒ぎたいだけの連中はいつもいるでしょ？ 今から記事書くんだから、あんたらがいると邪魔なの。とっとと帰つて」

「いいじゃん！ 別に」

少し甘えた口調になる会長。

「聞こえなかつたの？ 私は無理つて言つたの！ もう出でつてよ！」

小泉さんが煙たそうにしゃづいて、会長は「ふんっ！」とふくれて、椅子も戻さず、出入り口まで向かつてきた。

そして一步廊下に出ると、「キヨンキヨンのケチ！」と舌を出した。

小泉さんは呆れた様子で天井を見上げて知らんぷりをした。

「行くわよ！ 二人とも！」

今現在、大した情報は手に入らず。次に期待。

第3話 セイントカイをぶつぶせ

会長はいつたこじに向かってるんだ? 一つの意味で。

会長は一階にある何の部活か分からぬ部屋の前で止まると「よしー」と声を上げた。

「なんですかこじは」

「今日からこじが、生徒会室よー。」

またそんな勝手に.....。絶対許可取つてないでしょー。

「大丈夫なんですか?」

「その質問は野暮よ」

なるほど。たすが会長だ。

会長は堂々とドアを開けて入るが、俺も栗山さんも気が引けて、なかなか入れない。

「もつと度胸を持ちなさい! そんなんじゃ生徒会の仕事が務まらないわよー。」

仕事つて、もはや遊びのようなもんじゃん。それに、まさか会長が会長になれたのがすごいな。

部室には何も置いてなく、殺風景だ。

「テーブルが欲しいわね」

会長がそんなことを叫んで出す。

「和也、夏子ちゃん。」

突然名前を呼ぶもんだから俺も栗山さんも「はーー」と大声で反応する。

「お隣から机を拝借してもらえない?」

「隣に部屋なんてありましたっけ?」

「いいからいいかなさい。」

「はーー。」

俺と栗山さんは勢いよく廊下へ飛び出す。

また栗山さんと顔を見合せ、隣の部屋を訪ねる。ある。

ドアに貼り付けられた紙には「枕研」と書いてある。枕研ってなんだ?

とつあえずノックをする。

返事もなく開かれたドア。田の前の立っていたのは、パジャマ姿の女子生徒だった。

眠たそうな田を擦りながら「なんですか?」と俺に呟ねる。

「あ、あの～机をですね、貸して欲しいんですけど……」

俺がそう言つと、女子生徒は、相変わらず眠たそうに背後を振り向くと「部長、なんか来た」と言つて、下がつていった。

その代わりに奥から現れたのは、同じくパジャマ姿の男子生徒だった。この人も眠そうだ。

「なんだい? 君らは

「え、えっと、せいとか……」

やばい。生徒会の名前は出さない方がいいかな。

「なんて?」

「新聞部の者です。机を拝借したいのですが……」

「新聞部? 君、見ない顔だね。もしかして新入部員かい?」

「ええ、まあそうです」

やだ。このまま嘘をつするのが辛い。

「ああ! よろしく! 僕は枕研の部長、クレイグっていうんだよろじくー!」

握手を求めてくるクレイグを。とりあえず俺も手を差し出す。

それより何より、俺には溜まり溜まつた疑問がある。『枕研』って
いつたい何だ？ 何なんだ？

でもそんなこと聞けない。聞く余裕がない。早く机を拝借しないと。

「それで？ 何だっけ？」

「机を貸して欲しいんです」

何回言わす気だよ！

「失礼します」

背後から声が聞こえた。聞き覚えのある声だ。後ろを振り返つてみる。

「あ、桐生さん」

俺の視線の先にいたのは、『東董の騎士団』の山口直子さんだった。いつたいて直子さんがこんな所に何の用なんだ？

「やあ、ヨロちゃん」

「ちよっと、椅子が足りなくてね。悪いんだけど貸してくれない？」

偶然、同じように物を借りに来たようだ。それにしてもすぐ隣に会長がいることが心配だ。

「一人がいるみたいじゃ、あの子もいるのか？」

山口さんが俺と栗山さんを見て言ひ。『あの子』とは正真正銘、会長のことでだらう。

「一応……」

クリエイヴさんが運んできた椅子を抱えると、山口さんは俺に意味深なワインクをおくる。

「それじゃ、頼んだわよ桐生くん」

「は、は……」

とにかく会長と接触しなくてよかつたあ。

「それで？ 君たちは何だつけ？」

「もう一度言おひ、何回言わす気だよー。」

俺は半ば強引に机と椅子を奪い去るよつて廊下に運び出す。

「ひさしごと、美園さん」

ホッとしたのも束の間だった！ なんと山口さんと会長が顔を合わせてしまっていた！

「あなた誰？ 見た」とあるナビ……」

「あなたが追い出したんでしょう？ 生徒会からね」

「ああ、思い出した！ 田中ちやん！ 『めん影薄いから忘れちゃつた』

「……私たち『東董の騎士団』は、必ず生徒会、もとい、あなたを潰しますから。それだけは覚えておいてください」

それだけ言つと山口さんは、会長に背を向けて立ち去る。

宣戦布告されても会長は、どこか余裕の表情だ。その自信はいったいどこから湧いてきているのか不思議だ。

そうだ、騎士団の勝利には、俺も頑張らなくちゃいけないのか……。

生徒会室に机と椅子を手分けして運ぶ。

「さあて、作戦会議よ」

机と椅子を室内の真ん中に起き、椅子には座らず机の上に座る会長。

作戦会議つてのは、いよいよ本格的に騎士団との対決に挑むつてことか。情報がいっぱい手に入りそうだ！

「キヨンキヨンを生徒会に入れる方法、何か案ある人いる？」

俺はずつこけた。

第3話 セイントカイをぶつぶせ（後書き）

恐らくクレイヴは今回限りのキャラ。

第4話 最後の勧誘

「私に良い案があるわ」

だったら何故俺らに聞いたんだ?

「ちょっと待つてね」

会長はそう言つと、机から飛び降り、それくせと部屋を後にした。いつたい何をしようつていうんだ。

会長が戻つてくるまで暇だ。俺は床に胡座をかく。

栗山さんも座り込む。

待つこと数分、ドアがバタンお開き、会長のアホ面が戻ってきた。

会長は遊園地の帰りみたいに、脇に画用紙とマーカーセットを抱えて戻ってきた。

「何ですかそれ?」

「見て分からない? 小学生の時からよく使つてたでしょ?」

「いや、何をするんですか?」

「『』が生徒会室だつてわかるよつこ、『』に田立つ色と大きな字で『生徒会』と書いて、ドアに貼るのよ? わかつたら手伝つて

机に画用紙とマーカーセットを置きながら囁く。

「いつも思つが会長はバカだ。なんて危険なことを言つて出すんだ。

「会長それってちよつと……」

今までざつと黙だつた栗山さんが口を開く。

「向むかへ？」

「いや……何でも無い、です」

会長に威圧されて引き下がる栗山わざ。

「やつれ、和也にはちよつと御使ひに行つてもいいわ」

なんか嫌な予感……。

「な、なんですか？ 御使ひつて」

俺がそつと、会長は待つてましたとばかりに、画用紙の下に隠してあつた白い封筒を取りだし、「じゅじゅーん」と俺に見せつけた。

「何ですかそれ？」

「お手紙よ」

「お手紙？」

「そ、お手紙。あなたには、今からこれキヨンキヨンに届けに行くといつ極めて重要な仕事をしてもわづわ。誇りに思いなさい」

まだ諦めてなかつたのか！

「嫌とは言わせないわよ？」

「……分かりました」

「夏子ちゃんにもひやんと仕事があるから安心してね

俺は廊下に出て、新聞部に向かつ。

そつだ。会長には悪いが、これを騎士団に持つていい。でも時間を掛けると寝しまれるな……。

騎士団の人たちとメアドでも交換しようとんだった。

……よし、走るー

俺は、ドアを閉めると、全力疾走する。

向かうのは元生徒会室。今は騎士団のアジト。

渡り廊下を駆け抜け、目指すは二棟の最上階一。会長に寝しまれまいよに、急ぎ足で向かつ。

そして息切れしながらも元生徒会につく。大きな扉に似合わない控えめな小さなノックをする。

「はーい？」

仲から女子生徒の高い声がしたと同時に、観音開きの扉が開く。

「あら、桐生くん。どうしたんですか？」

声の主は山口玲子だった。

「あの、」「」

息切れしながら俺は山口玲子に封筒を差し出す。

「ロ～コシコロ～、渡したの？」

背後からハキハキとした高い声が聞こえたと思つたら、体が引っ張られ、グッと傾く感覚を覚えた。

松田さんが肩を組んできた。

「会長が新聞部部長に宛てて書いた手紙です。届けるまではわれたんですが……」

松田さんの腕の中で囁く俺。

「なるほど……私が桐生くん。よへやつたわ

笑みを溢す山口玲子。

「それじゃ、俺、会長を待たせてるんで

「せつ、引き続き頼むわよ」

「はーーー。」

そつと聞いて俺は、松田さんの軽いヘッドロックから逃れ、騎士団室を後にする。

そして大急ぎで生徒会室へ戻る。

ドアにはすでに田立つ鮮やかな字で「生徒会ー」と書かれていた。

固唾を呑み、息切れを隠しながら恐る恐るドアを開ける。

「遅かったわね

ドアを開けるのと同時に会長が、机の上に座りながら俺に不適な笑みを見せる。かなり怖い……。

栗山ちゃんもさすがに怖じ気づいたみたいで、申し訳なさそうに俺を見る。

「いつたこ、どうしたんだ？　俺が言えたことじゃないけど……。

「手紙はちゃんと届けてくれた？」

「は、はーーー。」

「よかったです、今さつき夏子ちゃんも手紙を届けてくれたの。これで

私の計画は成立ね

栗山さんも手紙を届けた？ 作戦？ いつたい何のことだ？

「どうこう」とですか？」

「その内わかるわよ」

やつぱりヒュインクをする余裕。

俺には状況が理解できない。

第4話 最後の勧誘（後書き）

軽い感じで書いたら頭が混線。

みんなキャラ薄いかな？

第5話 スーパーガール（前書き）

騎士団VS生徒会（というよりか美園）の本格的な対決です。

第5話 スーパーガール

この日の生徒会の会議（？）は終わり、俺と栗山さんは、帰つて良いと言われた。

部室棟の廊下を歩いていると、目の前から見覚えのある四人の人物が歩いてきた。

俺はその姿を見て、少し驚いて立ち止まってしまった。栗山さんもだ。

歩いてきた集団は、騎士団の方々だった。

恐らくリーダーである「一木さんを先頭に横並びに松田さん、山口さん、ゴローさんと続いている。

「やあ！ 口～リショウ！ 元気してる？」

松田さんが笑顔で言ひ。

「あ、どうも……」

恐る恐る言ひ。

いつたい、どうしたんだ？ もしかして、もう攻め込んできたのか？ まだ情報は新聞部部長に宛てて書いた手紙しか無いぞ？

俺と三メートルほどの距離で騎士団の人たちが立ち止まる。

「手紙、読ませて貰つたよ」

一木さんがそいつひとと、何故か栗山さんが後退り、逃げ出でたのです。

「どうへ、でしたか……？」

「最高の内容だつたよー。」

一木さんは笑みを浮かべながらそいつひとと、俺が渡した封筒を地面に呑きつけるように乱暴に捨てた。

怒つてゐるのか？

その行為の直後だった、無口なゴーパーさんが俺に向かつて突き進むようこ歩いて向かつてくれる。

その顔は厳つい顰めつ面だ。

俺は思わず後ずさる。

ゴーパーさんがとつとつ俺の田の前まで来る。何なんだいつたい。

ゴーパーさんの青い瞳を見ていこと、ふと、何かが浮いてゐるのが見えた。

そう思つたのも束の間、俺は頬に尋常じやないほどの衝撃を受け、体が吹き飛ぶ！

「ぐむっー。」

三メートルほど俺は飛ばされたんだが、何事かと思って、飛び起き、前方を見てみると、ゴーリーさんが拳を俺に向けて何やりポーズをとつていた。

俺は、殴られたのか……？ 口の中は血の味がする。

栗山さんが怯えたように立ち竦んでる。

ふと、生徒会室のドアが開き、中から会長が出てくる。

「やつぱり、ちゃんと来たわね。ありがとう(和也)！」

騎士団の姿を見据えると会長は何故か俺に礼を言う。殴られた衝撃もあり頭がぼんやりする。いつたい何のことなんだ？

「望み通り来てやつたぞ！ 生徒会！ 貴様らは我が校の恥だ！」

一木さんが叫ぶ。

「へえ？ それで？」

「今日で美園さん、あなたのぐだらないお遊びは終わり！ あなたは、私たち騎士団によつて一度とその口をきけないように打ちのめされるのよ。でも安心しなさい！ ちゃんと報酬もあるわ！ 毎日休みなく社会貢献に追われる人生をプレゼントするわ。まず最初は、そうね、トイレ掃除なんてどうかしら？」

淡々と喋る出口さん。

しかし、会長は笑みを溢す。

「それ、間違つてない？ 修正するとこいつよ。』『今日であんたらのくだらない偽善は終わり。あんたらは私たち生徒会によつて一度とそのクソをたれる汚れきつた口をきけないように打ちのめされるのよ。でも安心しなさい。ちゃんと報酬があるわ。私たちのお世話係といつ、これまでにない最高の高校生活をプレゼントするわ。まず最初は、そうね、生徒会室の飾り付けなんぞうかしら？』『…』

「あなた方は、何も理解していなつよつね……」

山口さんが真っ黒いオーラを放つ。心なしか少し毛が逆立つてゐるよう見える……。

「あなたたち、空気の読めない連中ね。第一なによ。『東董の騎士団』って。ダサい名前。ゾッとするわ！ それと吐き氣もね」

会長と山口さんの元氣み合ひが勃発する！

いつたこどつじこづなつたんだ、と栗山さんと顔を見合わせる。これで三度目だ。

「ユニー！ まやは裏切り者の和也くんをやつちやにな！」

松田さんが勝手に指示する。つていうか、俺が裏切り者！？

「ちよつ …」

ユニーさんが猛スピードで突進してくる。これはマズイ！

死の恐怖を感じた俺は慌てて逃げる。せつとすつじへ無様だらう。

でも構わない！ 命をえたすかれば！

しかし逃げ場が生徒会室しかない！ これはホントにマズイ！

いきなり、会長は俺の胸ぐらをつかんで、庇つよひに俺と位置を交換し、向かってぐるゴゴーさんの方に出た！

いつたじどうする氣だ！？

そう思った次の瞬間だった。俺は胸ぐらをつかまれたまま、下に引張られ、前のめりになつた。

そして、それに追い討ちをかけるように背中にずりしつけた、そして暖かい重みを感じる。

その直後、ものすごい物音と振動が耳と体に伝わった。

背中が軽くなり、ゴゴーさんの姿を確認しようとしながら、向かってきていたはずのその姿が見当たらなかつた。

一木さん、松田さん、山口さんは、驚愕の表情で窓の方を見ていた。

俺も何かと思って見てみる。

するとなんと、ゴゴーさんが窓ガラスに身体を突っ込んで力無く頸垂れていた！ まるでコメディーだ。

といふか大丈夫か！？

本来強力なはずの分厚い強化ガラスは無惨にも割れて、破片が辺りに散らばっていた。

「今の見たー!?」

会長が目を輝かせながら俺の方を向く。そして俺の反応など無視するように「カッコよかつたでしょー!? 私のキックー！」

キックー!?

まさか、アレって、会長がやつたのかー!?

さつきの重たい感覚はさうか、俺の背中を台にしてゴーパーさんを蹴り飛ばしたのか!?

つていうか、あの窓割るつて、相当なパワーが必要だと思ひナビ…
…?

「あのゴーパーが一撃で……」

一木さんがゴーパーさんの無惨な姿を見て力無く言つ。

「上等じゃん！ 次はウチがやるー。ゴーパーは油断しそぎなんだよー！」

松田さんが悔しそうに叫び、俺らとこいつが会長に近づいてくる。

だが会長は松田さんに背を向け、俺の方を向きながら、目を開じて、勝ち誇ったような笑みを浮かべる。

あぶないですよ会長！

とこりか俺はどひの味方なんだ？

「おーりやあああああーー！」

会長の背後で、松田さんは、顔を狙つた高い回し蹴りをする。

だが、なんと会長は相変わらずの笑みで見ずに腕で防ぐ。

鈍い音が廊下中に響き渡る。

「えつ？」

松田さんは思わず声をあげる。

それも束の間、会長は使つていない左腕の肘で、勢いよく松田さんの腹部を突く。

「がはつー！」

松田さんは悲痛な声を上げ、腹を抱え後退し、片足で苦しそうに会長を見る。松田さんあぶない！

会長は、振り返り際、大きく足を上げ、スカートを翻し、松田さんの顔面に田掛けて回し蹴りを入れた！

「あやああつー！」

今までに無い女の子っぽい悲鳴を上げ、松田さんは仰け反り、三メートルほど吹っ飛び、廊下に仰向けて倒れこむ。

「あんたのやりたかったことってこれでしょ？　お手本は役に立つたかしら？」

どうやら生徒会会長、今田美園は、本当に悪の大魔王だったようだ。

第5話 スーパーガール（後書き）

このままだと能力者とか出てきそう……。

第6話 生徒会からの手紙（前書き）

今回は美園▽S田子！

そしていつもより長め。

第6話 生徒会からの手紙

俺は今日、会長のとんでもない一面を栗山さん、騎士団の人たちと刮目した！

まるで映画のようだ！

窓から夕日が射し込む日差しは、睨み合ひ会長と騎士団にスポットライトを当てているようすで、戦いの始まりはまだまだこれからだということを仄めかす。

心なしか歎声も聞こえる……。

それにしても凄まじい光景だな……。

筋肉質のボーアイッシュショガールの松田さんは、仰向けで倒れてる。

「さあ、次は誰が吹っ飛ばされたいのかしら？」

会長はすっかり余裕を決め込み、背中から不適な笑みを浮かべていることが伝わる。

一木さんは怖じ気づいたのか、少し後退りし、山口さんの顔を見る。だが、山口さんは、眼鏡のレンズに反射して、どんな顔をしているかは分からぬが、どこか強きで、それでいて冷静なオーラを醸し出している。

そつ思つた矢先、山口さんは、会長田掛けて歩み寄つてきた。

眼鏡の奥に見え隠れする田は、刃物のようだに鋭く、会長を睨んでいた。

その田にはまるでメテューサのような能力が秘められていて、その田を見てしまつた俺は、得体の知れない恐怖で足がすべむ。

「……随分やりたい放題やつてくれたわね。どうやら私たちは生徒会を見くびつていたようね」

歩みよりながら山口さんは口を開く。

やりたい放題やつてくれたわね、って、襲つてきたのはそつちですよ！

ゴローさんは会長に向かつていつたと思つたらガラスにダイブしてるし、松田さんは、いちよ前に回し蹴りしたと思つたら廊下の真ん中でイビキかきそうな勢いで寝転んでるし……

まさにやりたい放題だな！

「教えてあげる。騎士団はあなたみたいな騒ぎたいだけの子供なんか負けたりしない、ってことをね」

そう言つて、山口さんは華麗におかっぱヘアを揺らしながら眼鏡を外し、その鋭い眼光を会長に向ける。

眼鏡を外した山口さんは、案外美人だった……。

「へえ？ やる気なの？ それなら手加減しないわよ？」

「言いたいことはそれだけ？」

山口さんはその言葉を聞いた直後、俺は凄まじい衝撃を感じ、身体が吹き飛んだ！

「うあー。」

背中にも強い衝撃を覚えた。廊下の壁に打ち付けられたようだ。すぐ痛い。

セルフで背中を擦りながら、俺は会長とヨロセさんの「」とが床になり、前を向く。

その光景は、まさに次元を超えていた。

まるでアクション映画のような壮絶な大立ち回り！

山口さんの滑らかで俊敏で強力そうなパンチやキックを会長が手足を使い防いだり、華麗な動きでかわす。

しかし、みる限りでは会長が圧されてる。

一木さんは、額に汗を滲ませ、心配そうに一人の闘いを見据えてる。

山口さんのパンチキック地獄を見切つたのか、会長が素早くしゃがんだ！ そして、そのまま一回転し山口さんのアーム掛けで蹴りを放つ！

しかし、山口さんはわかつてていたように俊敏に身体を仰け反らしてかわし、一気に体勢を前にのめらせ、勢いよく隙だらけの会長田掛けてパンチを放つ！

パンチは会長の顔面にクリーンヒットし、会長は「きやつー」と悲鳴をあげ、仰向けに地面に身体を強く打ち付けた。

大丈夫か会長！

「いっただいい！」

倒れても会長は、どこか余裕そうで、すぐに身体を起します。

だが、今度は山口さんの踵が、会長の頭上で待機している。このままで会長が危ない！

山口さんの踵落としが炸裂すると、同時に、会長はそれをかわすように、しゃがんだまま素早く山口さんの横を勢いよく滑り抜け、窓際へ移る。

山口さんの踵落としあ、隕石が墜落するよつに大きな音を立てて、俺の目の前に落ちてきた。

びゅうっ！ つと掠れた音が俺の耳の中に響く。そして凄まじい空風を感じ、身体がのけぞる。

なんてパワーのある踵落としなんだ！

ガリ勉の陰気少女だと想っていた山口さんは、会長にも負けない格

闘家だったようだ。

ゴローさんのもとまで逃げた会長は、何を思ったのか窓ガラスの鋭い破片を素手で掘み、山口さんを見据える。

おーおー、まさかそれで山口さんに斬りかかるつもりか！？

しかし、山口さんもかなり余裕な表情で、笑みを浮かべ、気取ったように手のひらを返し手招きをする。

それを念図に念長は、飛び付くよつて山口さん田掛けて足を踏み込む。

かと思つと、姿勢を落とし、身体を寝かし、スライディングキックで、山口さんの足を狙う！

しかしそこは山口さん、上に飛びかわす。そのまま空中で一回転し、足を開いて着地する。

山口さんの股のしたに、仰向けで寝転がる念長。そして山口さんは拳を振り上げる！

またしても会長のパンチ！　そのまま互角で終わつたら、山口さんはの判定勝ち間違いなしだ！

しかし会長はにやける。

会長は寝転んだまま、足を曲げ、体育座りの様な状態になり、そして山口さんのパンチが来る前に、そのまま足を田一杯開き、その衝撃で同時に山口さんの足も開かせる！

「さやあ」

山口さんは小さく悲鳴を上げ、会長に向かつて倒れかかる。

それを見計らい、会長は持っていたガラスの破片を山口さんの顔面
目掛けて突きだす！

山口さんは顔を傾けてかわし、ガラスは頬を掠め、切り傷が走る。

だが会長の攻撃はまだ終わってなかつた！

会長は、すぐにガラスを持った手を引っ込め、目一杯開いた両足を使い、女座りで地面に座り込んだ山口さんの顔をヘッドロックする！

まるでプロレスの試合を見ているようだ！

「くつー！」

苦しそうな山口さん。

会長は、そのまま勢いをつけ、ともえ投げをするよひに山口さんを
投げ飛ばす。

その勢いはどじまるところをしらず、山口さんは強化ガラスを突き
破り、屋外へ飛んでしまつた！

そして悠々と起き上がり、見事に割れた窓を見ながら「どうする?
一木さん」と言つのだつた……。

西田に殴りやられた会長の堂々とした表情は、とにかくかっこいい。
惚れてしまいそうだ！

「……次会つ時が、お前の命日だー。」

悔しそうに吐き捨てる一木さん。

そして、皿の前に仰向けで倒れ氣絶している松田さんの脇腹を小刻みにさすと同時に蹴り、「起きろ松田ー。」と焦った様子だ。

ふと、誰かが階段を降りてくる音がした。

降ってきたのは新聞部部長の小泉さんだった。悲惨な光景を前に立ち止まると「え？」と声を漏らす。

「キヨンキヨン。遅いじゃない」

会長が腰に手をあてて立つ。

「つーか、何これ」

不思議そぶりに辺りを見回しながら会長に向かって立つ小泉さん。

「ゴーヤーさん？ 死んでるの？ これ」

窓に身を突っ込んだゴーヤーさんを見て立つ。

「わあー。」

なんとも無責任な発言をする会長。

「それより、和也、夏子！ これより生徒会緊急会合をするわー！
早く中に入つて！」

騎士団の人たちを放置し、会長は手招きをする。

さつきまでの会長の残像に圧倒され、言われるがまま、生徒会室の中に入る俺と栗山さん。それと小泉さん。

室内の真ん中の机の前に会長と小泉さんは立つ。

「ああーー！ 一人とも！ 心して聞いてー！」

会長が叫ぶ。

「一Jの度、一Jの子、キヨンキヨンが生徒会の一員になつまーす！」

「え？」

いつたこどつしたつてこつんだ？ 僕は手紙を届けてないぞ？

小泉さんは、余計なお世話とばかりに、少し恥ずかしそうにそっぽを向く。

「全部、夏子のお陰よ。ありがとう夏子」

「び、びつこたしました……」

俺には状況が理解できない！

「か～ずやつ」

会長がわざとらしく俺の名を呼ぶ。

「は、はい？」

我ながら少し同様した声を上げてしまつ。

「廊下に落ちてる手紙、ちょっと回収しておひるねかしあへ。」

「わ、わかりました！」

俺は廊下に出る。

さつきまであつたゴーネさんの姿もとい騎士団の姿はどうにもなく、窓際にはガラスの破片が落ちている。

そして、廊下の真ん中に俺が騎士団に渡した封筒が落ちている。

俺はそれを拾い、中身を確かめる。

手紙には太い字でこう記されていた。

『俺、桐生和也は騎士団など言つ下劣な集団に付き合つ氣も協力する気も更々無い！ 俺が慕うのはただ一人、偉大なる今田美園名誉会長のみだ！ わかつたか！ そして我ら生徒会は、貴様ら薄汚れた足の裏の角質を集めたような騎士団に宣戦布告する！ 桐生和也』

……なるほどね。そういうことか。

会長は、最初から全て見抜いていたってわけか……。

施設でのことしかうだが、もう迂闊なことができないな

俺の高校生活、自由など一切許されないようだ。

。

第1話 告白（前書き）

新章突入！

第1話 告白

昨日は、会長の意外な一面を刮目し、騎士団の無様な姿を目撃した。

そして、新聞部部長の小泉さんは、会長の書いた手紙に心動かされたのか、生徒会に入った。

これで生徒会のメンバーは四人になった。これからいつたいどうなつていいくのやら……。

朝、教室に向かう途中、廊下の掲示板を見てみると、その記事がすでに張り付けてあった。

見出しへストレートだった。『騎士団、無惨!』

記事には昨日の一件に関する写真は無く、文章だけだった。

「よつロコロン」

後ろから男の声がして、振り返って確認する。

そこにはいたのは、入学当初から仲良しだった近藤 彰造じんどう しょうぞうだった。

彰造、お前も可哀想な奴だな。

俺は彰造を軽くあしらい、教室へ向かつ。

教室に入ると、真っ先に俺の席に向かつ。

ふと、机の中に手を入れると、何か薄っぺらい紙のよつたものが入っていた。

取り出すと、それはざらざら手紙のよつだつた。

まさか、惨敗した騎士団の連中がリベンジを申し込もうと俺にこいつそり手紙を書いたのか？

手紙の内容を見てみる。

『桐生 和也くん 放課後、体育館裏に来てください』

果たし状か？ 名前も書いてないし……。でも、騎士団ではなぞやうだな。文面が殺風景だ。それに文字が整つて可愛らしい。

「おい！ それって ！」

「なんだよ」

「それ、ラブレターじゃね？」

彰造がわざといらっしゃつて、まさか、俺にそんなものが？ まるで青春映画だ。

「騎士団の罷かも」

「いいや、騎士団はそんな器用に攻め込んでこないだろ」

「こいつは騎士団の何を知ってるんだ？」

「絶対、女子からだよ！ 行つた方が良いって！」

「騎士団だったら、この手紙食わすからな」

「お好きにビリッや」

放課後、俺は手紙に書いてあつた通り、体育館裏へ向かう。体育館に向かう渡り廊下を外れ、その大きな建物に沿つて、裏へ回る。

路地裏のような小さなスペースに一人の女子生徒が立っていた。

「あ、あの～」

恐る恐る声を掛けてみる。

そうすると、鳩が豆鉄砲を喰つたような顔で振り向く。

リンゴのように赤い頬、薄い眉毛、少し垂れ気味の大きな瞳、そして、魅惑の厚い唇。ミニティアムのふわふわとした桃色の内巻きの髪。

なにより、ワイヤーシャツの上からでもわかる、その巨乳を加減！

俺はこの女子が眩しくて仕方なかつた。

もしかして、この綺麗な子が俺を呼び出したってことか？

「和也くん……」

「この子はやつこいつが、俺はこの子を知らない。

「ええっと……」

同じような感じで言つてみる。

「あ、「めんなさい」……。私、矢口 やぐち 真依まい つて言いります！」

「矢口、さん？ あの手紙書いたのつて」

「私です！」

食い気味来られた。なにやら緊張しているようだ。それに触発されてもうちょっと緊張してきた。色々な可能性を考えて……。

「俺に何か用？」

「は、は、はい！ 入学式の日から、ずっと好きでした！ 私と付
れ合つてくださいっ！」

矢口さんは、顔を真っ赤にし、思いつきり目を閉じて、恥ずかしそうに手を向いた。

昔、泣かれるなんて、しかもこんな可愛らしい子から一回など一生無いこと思つてた！

とこりうか、返事をしなければ！ ビジュアル的には物凄くOKだが、俺はこの子のことを全く知らないし……どうじょう。

勢いだけで付き合つか？

「俺も！ す、好き、でした！ 真依と呼ばせてください！」

緊張して出た言葉がこれだ。我ながら意味不明だが。

しかし、矢口さんは一気に顔を上げ、ニッコリと笑顔になり、目を輝かせた。

俺の青春はこれからだ！

この日は、俺は連絡先だけを交換し、わかれた。

なぜなら、生徒会という名の鎖が俺を縛っているからだ。

しかし、俺は鼻唄を歌いながら生徒会室に向かつ。恐らくスキップもしていただろう。

生徒会室に入ると、もう既に俺以外の全員が揃っていた。

「遅い！」

机の上に座りながら会長が怒鳴る。

「ちょっと用事がありまして……」

一応、いいわけをする。

「これから大事な会議なのよ？ 遅れるなんて言語道断」

いや、そんな」と聞こてませんし……。

「すみません」

とつあえず頭を下げる謝りとく。しかしつづくが止まらない！

「今度は何を企んでんの？ 会長さん。私は部活もあって忙しいんだから、ぐだらない内容なら帰るよ……って全部そつだからこんなこと言つても無駄か」

小泉さんが皮肉っぽく言つ。

「安心しなさい！ 今日も私の夢田掛けて、突き進むわ！」

意味不明だ。

「おりむら 折村 純ちゃんって知ってるかしら？」

折村 純？ たしか入学当初に聞いたことがある。

「もちろん。忌まわしき風紀委員の奴だからね

小泉さんが答える。

「そつそつ。それでね、その子を生徒会に入れようと思つてゐるのー。」

またメンバー集めか！

「無理無理！　一つの意味でね！」

「どうしてよ」

「あの頑固な奴が絶対にこんなゲスい集団なんかに入らないし、ま
ず私がアイツを嫌い！　私バス！」

そつと生徒会室を出していく小泉さん。

会長、今度はどんな作戦で俺を驚かしてくれるんだ？　新聞部無し
で。

第2話 サイレント暴（前書き）

第三章は急展開の章です。

第2話 サイレント暴

小泉さんが帰ってしまったことで、会長はひどく激怒してしまって、今日はすぐに解散となつた。

すつゝく助かるー。

栗山さんと一緒に廊下に出たとき、割れたままの窓の外に騎士団の松田さんがいた。

松田さんは、慌ただしく校門を出でていった。いつたいじりしたんだ？
そんなことより、早く家に帰ろ！　俺は大急ぎで通学路を逆走する。

家につき、自室のベッドで横になりながら携帯を開くと、メールが一件届いていた。真依さんからだ。

『和也くん。いきなりだけど、明日の放課後、暇かな？　生徒会の活動あるから無理かな？』

ホントにいきなりだ。

生徒会もあるけど、あの感じじゃ、きっとすぐ解散かな？　そういうなくてもサボれば良いし。

『たぶん暇だと思つよ。何かあるの？』

送信つと。

返事はすぐには返ってきた。内容を見てみる。

『じゃあ、明日の放課後、一緒に帰りませんか？』

そんなこと、わざわざメールでいふことなのか？なんか可憐らしくからとつあえず『いいよー』と送りとくか……。

次の日、俺は掲示板を見て驚愕した！

『桐生 和也 × 矢口 真依 熱愛！』

そして体育館裏で俺と矢口わんが話してる写真が貼られていた。

「やー 新聞部め！ とこうか小泉め！」

「か~すやくわん！」

後ろから声がし、振り向くとそこには彰造がいた。

「お前やるなー セクシーレーザーと付き合えるなんてやー！」

「セクシーレーザー？」

「お前の彼女だよ」

矢口さんのことか。

そんなことより、この記事をどうにかしてもらわないとー！

まだロリコンの件も終わっていないのに！

昼休み、俺は新聞部の部室へ向かった。

ノックもせずに勢いよくドアを開ける。そして「ひづり。『小泉さん！」

部室には小泉さんはいなかった。いたのはたった一人の男子部員だけだった。

「あ、あの、小泉さんは？」

俺がそういつつと、その部員は俺に小さな紙切れを渡してきた。

そこには『生徒会室』とだけ書かれていた。

喋れないのか？なぜ紙切れなんかに……。

俺は取り敢えず生徒会室へ向かう。

ドアを思いつくり開けると、室内には、小泉さんと会長がいた。

それとなぜか部屋のカーテンは全部閉められていた。

「小泉さん！なんですかあの記事は…」

「シー！静かに」

小声でそう言つ小泉さん。

そして会長が一枚の紙切れを俺に渡してくれる。

『あの記事は新聞部が書いた記事じゃない』と書かれている。

今日はなんか様子がおかしい。誕生日パーティーでもするのか?

といつか一人は仲直りしたのか?

会長はもう一枚俺に紙切れを渡してくれる。

『今日は生徒会活動無し』

そして会長は俺を出でこへようとして言ひ。

俺は生徒会室を無理矢理出された。おかしい。明らかに変だ。

でも、これで矢口さんと一緒に帰れる。まあ嬉しいつけや嬉しいな。

放課後、俺は校門前で矢口と合流した。

「待たせた?」

「うん、全然」

「じゃあ行こつか」

なんか緊張するなあ〜といつこうのつて。

校門を出で、大きな道路沿いを歩いていると、ふと矢口さんが、「そつだ、ちゅうと遠回つしない？」と声に出した。

「いいねー。」

普通に帰るのも味気ないから、たまにはそつこつのもいにな。

矢口さんは、俺の手を引いて、狭い路地まで連れていへ。

なんか青春だなあ～……。

しばらく手を引かれながら歩くと、このまま行け止めできていた。

三方をコンクリートの壁が覆つてゐる。

「行き止まり?」

「うん」

けろりと答える矢口さん。

「やあ、和也くんー。」

背後から男の声がした。

振り向いてみると、そこは、一木さんが堂々と立っていた。

「一木さん……」

俺がそう言つた途端だつた。矢口さんは、一木さんに向かつて走つていつた。

かと思ひつと俺の方を振り向いた。

「もひ分かつただろ？　お前は騙されたんだ！　矢口さんの色氣にな！」

一木さんが言ひ。

クソ！　やつぱり騎士団の體じやないか！　彰造のせいだ！

第3話　スタンド　バイ　ミー（美園視点）（前書き）

なんか違うと感じサイブタイ変更。

第3話　スタンド バイ ミー（美園視点）

私は一人、風紀委員の連中が集う教室へ向かう。

私にノックされる『つぽい』ドアは、私に『勝手に入れ』と言つてい
るよつなもの。

ドアを開けると、そこには一人の女子生徒が立つていた。私は彼女
を知つてゐるわ。

「折村 純ちゃんね」

「……はい」

様子を伺つて返事をする純ちゃん。

「委員長は不在かしら？」

「はい、こません」

そりやそりよね。

私はスカートのポケットから封筒を取り出し、それを純ちゃんに渡
す。

「はいこれ、ちゃんと読んでね」

「あ、はい」

封筒を受け取る純ちゃん。そしてそれをポケットにしまった。

封筒をしまったのは反対のポケットからやり黒ごものを取り出す。

私はそれを見切れなかつた。

脇腹にすさまじい衝撃を感じる。そして気が遠くなる……

「んん……」

意識が朦朧とするけど、私にはわかるわ。私は氣絶してた。

田を擦ると、田の前に足の角質騎士団のローパーとの横に純ちゃんもいる。それとさつきまでいなかつた田子も。

自分の身体を見てみると、身体がロープでぐるぐる巻きられて動きがとれない。

「まんまと眼にハマつたね。余韻をさつ

田子がぼやく。

「騎士団は、あんたの行動を全部読んでたんだよ？ あんたが純ちゃんを勧誘しようとしてたつことはね。純ちゃんは元々、騎士団

派だからせ、すぐに協力してくれたんだ。知ってるよ？ キヨンキヨンと仲間割れしたんでしょ？」

全く面白く冗談だわ！

「これで一対一の回戻だね。余韻をひいて」

言いたことはこいつぱーあるナビ、口にガムテープを貼られて声を出せない。逆に好都合だわ。

「今、和也くんも酷い田にあつてるかもよ？ ハーネトワッシュってやつ」

百合のアールがクソを垂れた途端、ドアが開く音がして、その方向を見てみると、そこには風紀委員の委員長、浜田^{はまだ}伊代^{いよ}ちゃんがいた。

みつあみの髪、風紀委員長らしいキチッとした身なり、横円形のフレームの眼鏡、いかにも真面目そうな伊代ちゃんは私を見下ろしてから、騎士団のところへ歩みよつた。

「やりましたよ委員長！ ついに生徒会長を捕らえました！ 委員長のスタンガンのお陰です！」

嬉々と笑みを浮かべながら言つ純けやん。ホントに……物騒なものを持つてるわね。軽く犯罪だわ。

「よくやつました。純さん」

「はーーー！」

嬉しそうにまじめに純ちゃん。

そんな純ちゃんに伊代ちゃんは手を差し伸べた。

「スタンガンを貸してくれますか？　こんな下劣で不気味な下等生物はもつと懲らしめてやらなくちゃいけません」

「はこびわー！」

伊代ちゃんはスタンガンを受け取り、私の方に近づいてくる。

だけど、素早く純ちゃんの方に振り返ると、勢いよくスタンガンを持った手を純ちゃんの脇腹に掛けた突きだした。

そして電源を入れたのね、バチバチッと音がなる。

そして純ちゃんは当たり前のよつに崩れ落ちる。

だけど、ゴマーと百子がそれに気づいたのか、一斉に伊代ちゃんに襲いかかる。

伊代ちゃんは素早くゴマーの腹にスタンガンを突き刺すようにあたって、休むことなく百子の腹にも同じ仕打ちをする。

ゴマーの巨体も百子も崩れ落ちる。

さつすが伊代ちゃん！

「ふう……。私も柄にもないことをしたものね……怪我はないで

すか？ 美園ちゃん

そつまつて伊代ちゃんは、私のもとまで来てガムテープを剥がしロープをほどこしてくれる。

「ありがとう伊代ちゃん…」

私は伊代ちゃんに抱きつく。

「やめなさい…」

伊代ちゃんは顔を真っ赤にして私を振り払う。……懐かしい光景。

わあい、IJKからが本番ね。

騎士団を懲らしめてやるなくちゃ！

「ねえ、一つ聞いていいかしら？」

伊代ちゃんが言つ。

「なあに？」

「あなたの集めた生徒会メンバーのIJKなんだね？」

やばいわね。気付かれたみたいだわ。

「シー！ その話は内緒！ それよつまづやんなきやいけないことがあるでしょ？」

私は純ちゃんに歩み寄る。

第4話 それでも恋する和也くん（前書き）

次の章からはもうちょっとほのぼのとした急がない話にしようかと思ひ……。

第4話 それでも恋する程也くん

行き止まつに追い詰められた俺には、もはや逃げ道は無い。

田の前にばく王立ちをする一木さんと、哀れんだ田で俺を見る矢口さん。

「今いり、痴の会長も、亀甲縛りで痛め付けられてるだらつー。」

「まさか。会長がそんなバカするはずない！ 会長は強化ガラスを割るような暴君だ！ 返り討ちにあつてやー。」

「そればどつかな？ では試しに電話してみようか？』

そう言って一木さんはおもむろにズボンのポケットから携帯電話を取り出す。そしてキーを何度も押し耳にあてる。そして「もしもし。折村くんか？」と通話を始めた。

電話相手の声は、俺にも聞こえた。

『はーい、折村 純ひやんです』

風紀委員の奴は、自分のことをちやん付けで呼ぶのか？ そういうルールか？

「誰だ貴様はー！」

一木さんが突如怒鳴る。

『純ちりやんですよ？ 今、気絶してるんだけど、もつすぐ亀甲縛りで蠅燭垂らされる予定で～す。喘ぎ声は聞かせますけど、映像は見せませんよ～』

「貴様は……今田美園か！？ なぜ貴様が！」

「ふん。俺の言つた通りじやん。

『あ、そつそつ聖ちりやんの画像なら送りますよ～』

「うぬれーー！」

『あとは頼んだわよ。ま～いちゃんつ』

一木さんの携帯からそつ聞こえた途端、矢口さんが、あらかじめ用意していたのか、少し開いたスクールバッグの中から何やらスプレーのようなものを取り出した。

かと思つうとそれを一木さんの顔面に掛けて噴射する。

「ぐわあああ！」

目を押さえて跪く一木さん。いつたい何が起つたんだ？ 催涙スプレーか？

「和也くん！」

矢口さんが大声叫ぶ。

「えつ？」

「早く来て！」

矢口さんが大振りな手招きをする。

それにつられて自然と身体が矢口さんの方へ進む。

矢口さんは、俺の手をぎゅっと掴むと、一木さんを置き去りに、走り出す。

しかし、何かに躊躇して「さやあつ！」と声を上げ倒れ込む、手を握られていた俺も跪く。

その瞬間、田の前が一瞬だけ真っ白になる。

倒れながら見えたのは山口さんの姿だった。

どうやら山口さんは矢口さんの足を引っ掛けた転ばしたんだとすぐによかった。姑息な女だ。

何かに駆け立たれたようにすぐに起き上がる矢口さん、俺の手を引き走る。

だが、後ろを向いてみれば、山口さんが猛スピードで追ってくる！

矢口さんは、狭い路地の角を曲がった。

その時、俺は電柱に隠れている栗山さんの姿が見えた！ いつたいこんなところで何をしているんだ縁頭のアホ毛は！？

山口さんも角を曲がつてきた。しかし！

なんと、あの陰気な栗山さんが、「えいっ！」と可愛げに叫び、山口さんに足を引っ掛けた！

当然、勢いよく走っていた山口さんは「ぎやあ！」と柄にもない声を上げて転んだ！

栗山さん！ ナイス！

俺と矢口さんは、学校からほど近い賑やかで大きな道路に面したチビッ子たちの笑い声や叫び声が響く公園のベンチまで逃げた。

ベンチに一人して腰掛ける。

運動が苦手なのか「はあはあ……」と過呼吸で額に汗を滲ませる山口さん

「和也～～！」

遠くから高い声が聞こえる。会長だ。それともう一人女子生徒も一緒だ。

「うわーうわーうわー」とはやったのね！ ありがとう矢口さんっ！」

全然ついていけない。俺の知らないところで、いつたい何が行われていたんだ？

「それじゃ、私は最後の仕事があるから、騎士団は向こうにいる

のよね？ じゃ、行くわよ伊代ちゃん！

「全く…… 美園つて子は……」

そつ言つて、俺らが逃げてきた道に走つて行く二人。

疑問は溜まりたまつてゐるが、一番気になるのは……。

「や、矢口さん？」

「はい？」

背筋をピンと伸ばした正しい姿勢で俺に振り向く矢口さん。

「あ、あの、お、お付き合いの件は……」

徐々に声が小さくなる俺。情けない……。

「うーん…… 私、まだ和也くんのこと全然しらないから、お友だちからつてことで」

「は、はいす……」

呆れて声が掠れる俺。

矢口さんはポケットから紙切れを取り出して俺に渡す。

そこにはメールアドレスらしき文字が書かれていた。

「なにこれ

「私のメアドです」

「え？ 昨日、交換しなかったっけ？」

「ううん。あれは私のじゃないから」

「誰の？」

「一木さん」

嘘だろ？ ってことは、俺がドキドキしながらメールした相手は一木さんか！ ふざけやがって！

矢口さんは俺に「じゃあね」と別れを告げ立ち去る。

はあ……なんだかすりこぐらしこ気分だ。

第5話 レジスタンス／負け gehen 者たち（前書き）

ちよつと書き忘れたことがあつたから修正した。

第5話 レジスタンス／負けざる者たち

次の日、俺は掲示板を見て唖然とした。

『騎士団、カツプル襲いつ』といつ見出しが、山口さんが矢口さんに足を引っ掛けのシーンを写した写真が使われていた。

あの白い光は、フラッシュショottたのか！ それにしてもよく捉えたなあ……。

「よお！ 大変だつたな！」

彰造が笑いながら寄つてくる。ふざけやがつて！

「騎士団の罠だつたぞ！」

「何が何が？」

「あの手紙だよー！」

「ああ！ あれね！」

「お前の言つた通り、食わす！」

俺はあの忌まわしき手紙をズボンのポケットから取り出す。

「まあ待てよ！ 俺の話も聞いてくれー！」

言い訳など聞かん！

俺は手紙を突きつけた。

「実はあれ、俺がお前の机に入れたんだ」

今なんと言つた？

急なことに手が止まる。

「騎士団の山口先輩に頼まれたんだよ。これを和也の机にいれといてくれってね」

「おこー、じうごう」とだ?」

「それだけじゃないんだ。朝、手紙を受け取つてお前の机に入れようとした時、生徒会長が俺に声を掛けてきたんだ」

「会長が?」

「やつだ。そして俺にこう言つたんだ。『その手紙、ちゃんと和也に読ませてね』って、しかもその後、芸を仕込まれたんだ!」

「……芸?」

「和也が手紙を開いた時は『それ、ラブレターじゃね?』って言つて言われた。さらに『騎士団の罷かも』って言われた時には『いや、騎士団はそんな器用に攻め込んでこないだろ』って仕込まれた。そして止めにこう言えつて『絶対、女子からだよー! 行った方が良いつて!』ってね。後はアドリブ。良い芝居だったろ?』

「うつでわざとらしかったのか！」

「ト」とは、会長は手紙の内容を全て知っていたのか？なぜ？
どうやって？

「うつ」とで、もうすぐ予鈴がなるから俺は「」の辺で……

「待て！ 約束は約束だ」

俺は彰造の肩をつかむ。

「冗談だろ？ やめろやめろおおおおー！」

放課後、俺はいつものように生徒会室へ向かう。

ドアを開けると、昨日とは違って、カーテンだけでなく、窓も全開だ。

そしてこつものように机の上に会長が座っている。

その後ろで小泉さんが椅子に座っている。

俺のすぐ隣には栗山さん。

そして、もう一人、昨日見た知らない女子生徒がいる。もしかして、この人が折村 純？ でも昨日電話で亀甲縛りとかなんとか言つた気が……。

「気になるでしょ？」

会長が俺の気持ちを察して言つ。

「生徒会新メンバーの風紀委員長、浜田 伊代ひやんめー。」

え？ 風紀委員長？

「メンバーに勧誘しようとしてたのって、折村純といひどじやなかつたんですか？」

「私が狙っていたのは、最初から伊代ちやんよ？」

「え？ でも昨日……」

「あれは嘘よ？」

「え？」

ホントにどうこういとだ？

「教えてあげる」

そう言って会長は黙々と喋り始める。

「昨日、キヨンキヨンが新メンバーのことで協力しないって言つて出ていったじゃない？ それは嘘でわざと言つたのよ。外に騎士団のスパイがいてね。新聞部員が教えてくれたの。私があらかじめ外に忍ばせておいたね。それでお芝居をしたってわけ。純ちゃんを狙うつて、そして新聞部が今回は仲間はずれだってえてね。でもホントの狙いは委員長だったの」

昼休み、抗議にいったときに静かだったのはスパイを警戒してのこ
とだったのか？

それにもしても

「なんで嘘なんかつくんですか？」

「ほらこれを見て」

そう言って会長は一枚の写真を俺に渡す。

そこには窓ガラス越しに向やら文章を書く山口さんの姿が写つてい
た。

書いてある内容、見たことあるー 矢口さんからの手紙だ！

あれは山口さんが書いていたのか！『□』しか会つてない偽物が！

「その写真は私が撮つたやつね。騎士団の作戦は、会長を他のメン
バーから引き離して、別々で痛め付けるつて作戦だったわけ。それ
に、和也くんが詰め寄ってきた、あのスクープ写真は、実は私が撮
つたやつ。騎士団のモチベーションを無駄に上げるためのね。私が
生徒会から仲間はずれだっていつ。まあ、和也に嘘をついたのは、
あのとき和也は邪魔だったからね。ひとつそり作戦会議には」

小泉さんが座りながら話しあう。

やつぱりあれは新聞部のだったのか！

「アイツらは、純を新メンバーに入れるっていう嘘の情報をまんまと手に入れて、私らより先に純に接触して、手を組んだんだ。元々、純は騎士団派だからね。でも、それも会長さんの狙いだったってわけ

小泉さんの言葉に「うんづん」と頷く会長。そして会長が口を開く。

「私たちはその隙を狙つて、すでに騎士団の手先だった真依ちゃんを説得してお芝居をするように言ったの。和也を騙すのとは別ね。その次はこの作戦の重要人物である和也がちゃんと真依ちゃんと接触するように、騎士団に仕込まれた演技に騙されるように、和也の親友の近藤くんに芸を仕込んだの。もつ聞いたでしょ？ そして私は、騎士団がノーマークだった、そこにいる伊代ちゃんに手紙を渡したの。そしてあとは和也が真依ちゃんにまんまと連れて行かれるのを待つたの。気づかなかつたでしきうけど、一人の後をキヨンキヨンと夏子がじつそりつけてたのよ？」

全然気づかなかつた！

つていうか、やつきの彰造が真実を話すつてことも作戦だったのか！

もう大体内容は掴めたぞ。

「それに私も体を張ったのよ？ 和也は何も知らないでしょ？ けど。まず、伊代ちゃんに頼んで純ちゃんにスタンガンを持たせたのよ」

スタンガン！？ そんなもん捕まるだろ！

「それで、私は、嘘の通り、純ちゃんに会いにあの教室へ行つたの一人で。まあ、廊下に伊代ちゃんを忍ばせてだけどね。そして私は

わざとスタンガンをくらったの！ 気絶したわよ。起きた時にはロープでグルグル巻きよ！ コゴーと聖と純ちゃんが私を嘲笑つたわ。でもナイスタイミングで伊代ちゃんが教室に入ってきたの。純ちゃんに信頼されてる伊代ちゃんは、言葉たぐみに純ちゃんからスタンガンを奪うと見事に三人を潰したわ！ 田にも止まらぬスピードでね

なんでそんなめんどくさいことするんだ？ 会長なら蹴り一発で殲滅できると思うんだが……。

「そして、あとは、純ちゃんの携帯に博から電話が掛かつてきたから、それを利用して真依ちゃんに合図したの！ 私があらかじめ渡しておいた催涙スプレーを博の顔に吹きかける合図をね。案の定大成功よ！」

会長の表情は喜びに満ちていた。

「そうそう。あとは私となつちの仕事つてわけ。一木の背後に山口が隠れてることなんて大体予想できたからね。追つてくる山口をなつちが転ばせて、あとは、私が押さえつけてやつた！」

会長のところまで歩み寄る小泉さん。そして一人は笑顔で「いえーいー！」とハイタッチする。

俺の知らないところで、生徒会と騎士団の裏をかいだもん勝ちの頭脳戦が繰り広げられてたってわけか……。

そしていつの間にか俺もそれに巻き込まれていたのか。

騎士団の奴らは、前回みたいに直接対決じゃなくて、今回はちゃんと

と作戦をたてて会長に挑もうとしたようだけれど……。『ひつやう』会長のリサーチ勝ちって感じだな。

関心したよ会長……。やつてゐるとはアレだけビ。

「回りくどくないですか？ その作戦

俺は疑問を投げ掛ける。

「やつ？ 私たちにもちゃんと目的があるのよ？」

会長が俺に言ひ。

「目的？」

「和子が一人を転ばせた瞬間、実はキヨンキヨンが写真を撮つたの。それで記事を書いたの。和也も朝見たでしょ？ 『騎士団、力ツブル襲ひ』ってね。そもそも私たちの狙いは、騎士団の支持率と好感度を低迷させることだったのよ。結果は大成功！ 今や騎士団の味方なんて小汚ない『キブリぐら』よー 話めが甘いのよ。騎士団の連中は！」

……なるほど、納得。会長、あんたは天才だ、色んな意味でね。それにしても騎士団もバカな連中だ。

小泉さんを仲間に勧誘すればよかつたのに。

それと、いつの間に小泉さんは栗山さんのことを『なつか』と呼ぶよつこ……。

第5話 レジスタンス／負けたる者たち（後書き）

ちょっと展開急ぎます。さて微妙な話になつたけど第三章はこれでおしまいです。

次からほのぼのやせます！

キャラ（第1章～第3章）（前書き）

キャラの名前にプチ情報を添えました。

キャラ（第1章～第3章）

主人公
・桐生 和也（男）

16歳（一年）

何の取り柄もない普通の高校生。雛菊育成園出身。

生徒会長の美園に無理矢理生徒会に入れられて、大変な一年を送る予定。

週に一度、施設に遊びに行く。

幼馴染みの歩莉に対しては謎のシンデレラ。

生徒会

・今田 美園（女）

18歳（三年）

東董高校の生徒会長。そのわがままさと傍若無人さと悪賢さに誰もついていけず、ついに一人になってしまふ。しかしそれも彼女の狙い……？

格闘技もでき、その腕前は百子を凌ぐ。

和也と同じ施設出身。しかし、昔は地味で和也にその存在を忘れられていた。

・栗山 夏子（女）

16歳（一年）

和也と同じように無理矢理生徒会に入れられてしまふかわいそうな少女。

無口でほとんど喋らない。髪の毛が緑色なため、和也に心の中で「苔頭」や「縁頭」と呼ばれている。

よそ行きの彼女は実は饒舌。

・小泉 今日歌（女）

17歳（2年）

愛称は『キヨンキヨン』。

新聞部の部長で、美園の手紙を読んで生徒会に入る。
やや冷たい性格で、めんどくさがりだが、仕事はちゃんとする。
さまあーずの大ファン。
だて眼鏡に憧れている。

・浜田 伊代（女）

18歳（三年）

風紀委員の委員長でありながら、美園の手紙で、生徒会入りする。
礼儀正しくて、仲の良い同級生にも下級生にも敬語を使う。
カラオケでの十八番は「センチメンタル・ジャニー」

とうきん
東董の騎士団

・一木 博（男）

18歳（三年）

騎士団のリーダー。

優等生で、元生徒会メンバー。美園のことが誰よりも大嫌い。
口だけが達者だが、運動神経は無く、戦闘を避ける。

・山口 百子（女）

17歳（三年）

普段は大人しいが、怒つて、眼鏡を外すと豹変する。カンフーとテコンドーと空手とカリを習っていた。

・松田 聖（女）

17歳（二年）

潑刺とした明るい性格。運動神経抜群だが、眼鏡を外した百子ほどではない。

男子との絡みが多く、性格も男っぽくなつた。その割には虫が嫌い。

・ゴーリ（男）

18歳（三年）

在日フランス人。無口だが、ガツチリした体型と堂々とした出で立ち誰もが圧倒される。

ケンカに負けたことが無いが、初めて美園に惨敗した。実は作家志望。

・折村 純（女）

15歳（一年）

風紀委員だが、一度目の生徒会と騎士団の戦いの時、騎士団の仲間入りを果たした。

博にかなり気に入られている。

枕研究部

・クレイヴ（男）

18歳（三年）

枕研部長。

アメリカと日本のハーフ。

おつとりとした性格で、万人に癒しを『』える。

・北乃 くう（女）

15歳（一年）

いつも眠たそうな顔をしていて、部長と似ておつとりしている。
校内を堂々とパジャマ姿で歩き、パジャマで授業を受けることもある。

あだ名は「ねむ子」や「くうちゃん」

追記：ミドリ星人の友人がいて、宇宙語も話せる。

話せる言語は、ミドリ語（火星の南半球の共通言語）とパルメス語
(水星のパルメス共和国の言語)が話せる。

現在は水星のピシュメイヌ大陸にあるキュイミ連合国の古語である
ポルニ語を勉強中。

雛菊育成園

・島崎 明里（女）

11歳（小5）

穏やかでまつたりしたしゃべり方が特徴。
和也に一番可愛がられている。

・九重 理沙

11歳（小5）

愛称は『くるりん』。頑固でわがままな性格なため、周囲の人をよく困らせる。

実は誰よりも和也が好き。

・ 濱名 理緒

11歳（小5）

明里、理沙と違つてしまふかり者。

仕切るのが好き。

・ 前田 淳史

16歳（高1）

施設時代の和也の大親友。

その他

・ 近藤 彰造

16歳（高1）

和也が入学当初に出会つて気が合ひ、すぐに友達になつた。飄々としていて、考へることが誰にも察しれない。

・ 矢口 真依

15歳（高1）

和也を魅了した巨乳の持ち主。

清楚なイメージを持たれがちだが、実は小悪魔らしい。みんなからは「セクシーレーザー」と呼ばれている。

・ 桐生 桐乃

12歳（中1）

和也の義理の妹。

そもそも桐生家が和也を引き取つたのは、桐乃が和也に惚れたかららしい。

キャラ（第4章～番外1）（前書き）

案外早めのパート2です。。

キャラ（第4章）番外1

レジスタンス
生徒会

・広瀬 小海（女）

16歳（1年）

冬好きの少女。嫌われもので、誰にも相手にされない。B組の学級委員。

美園に憧れていて、生徒会に入ることが夢だった。

広瀬流拳法の使い手。

得意技は「笑刺」スマイルと「逃葬」ラナウェイ

雛菊育成園

・アメリ（女）

11歳（小5）

日本とフランスのハーフ。施設に新たに入ってきた。
暴走すると手がつけられなくなる。周囲のモノを気が済むまで破壊する。

何故か和也にはなついた。

軽音楽部／五反田ランチタイム

・凹沢 唯（女）

16歳（2年）

M C ネームは、BYUI

表向きはドジで天然で可愛らしいが、実は全て演技。そして虚言癖。裏向きは手のつけられないほど性格の悪い悪女。

澪にそれを指摘されたことで仲が悪くなる。

「ダイエット・スペクタクル・イマジネーション?、?」と「心の底からブレインコントロール」の作詞をした。

軽音部の夢を「2247年に火星の植民地で開催される『第5回マーズフェス』に参加する」と語る。

・冬山 澪（女）

17歳（2年）

M C ネームは、M . I . O . (H M A I O)

口が悪く、普段はおとなしいが、汚い言葉を吐きかけることに快楽を感じている。

「オアシスがかかるほど騒ぎたい」と「ディスカウントショップ～イレブンハートmark2～」の作詞をした。

・土井中 律（女）

17歳（2年）

D J ネームは、I B A R A G I

男勝りなだらしない性格。ガサツで片付けが苦手。主に作曲をする。

憧れのD Jは、D J F U M I K O。

「日本刀 VS ロングソード」と「ブラスバンド・ショープレヒール」と「竹竿伝説」の作詞作曲をした。

・琴吸 紗（女）

18歳（3年）

M C ネームは、O T S U M U

素顔は眉毛が無い。校内一のヤリマン、それにアゲマンと尊されている。

ボロアパートにすんでる。

あだ名は「むぎちやん」、「ビッチ先輩」、「ビッチちゃん」。

・新宿 梓（女）

15歳（1年）

M Cネームは、P H C C A D I L L Y 9（ピカデリー-nine）
不真面目で、悪ふざけやイタズラが大好き。背が低いのがコンプレ
ックス。

「エイチエフ・フツ化水素酸を浴びて熱くなれ」と「クラッシュ
チエアー」と「パスタ無しスパゲッティー」の作詞をした。

・御花畠 サわ子

年齢不詳。

3年A組の担任兼軽音部顧問。そして現役クラブD.J.。学校には隠
してある。D.J.ネームは、F L O W E R G A R D E N。
主に週末にスカラでD.J.をしている。

いい加減な性格。唯、紬、澪、梓、律のネームを考えた。

留学生

・須藤 シュミルヌナ

火星の南半球にあるギュギ王国から日本に来た留学生。
愛称は「シユナちゃん」。

キャラ（番外2）第5章

和也周りの人物

・新島 歩莉
にいじま あゆり

15歳（女）

和也の幼馴染み。

気持ちの切り替えが気持ち悪いくらい早い。大学生など年上の友達が多い。

「ファインド・ウーハイ」に出てくる新島歩莉（理彩）と同一人物つて設定だつたけど、ファイアの歩莉が理彩に名前を変更したことで、そういう設定は拭い去つて、全く別キャラといつことにした。

東董の自衛隊

・東京 都
とうきょう みやこ

17歳（女）

美園の姉妹。

美園からは「デレデレ」に可愛がられている。本名は今田
いまだ 薫子
かおるこ

外国の首都や姉妹都市をそのままあだ名として呼ばれることが多い。
美園の影響で地味でアホ臭い和也に興味をもつた。

・伊達 ラムネ

13歳（女）

東董高校の地下室に住み着いている中学生。あだ名は「レモンちゃん」

「殺地球未遂」の異名で全校生徒（特に二年、三年、三四期生）か

ら恐れられていて、小柄で華奢な姿からは想像もできない、驚異の身体能力を持つ。武器は、「ピューア」というクマのぬいぐるみと、その背中に隠された「スラット」という太い針と「ビッチ」という糸（ロープだが、本人曰く糸）。

伊達ラムネの技

- ・「ぬいごろし」……相手の肉に直接ビッチとスラットを通して複雑に縫い付ける。（複数人を背中合わせにし、一気に縫い繋げるという応用技がある。映画「ブレア・ウィッチ・プロジェクト」を見て思い立つたらしい）
- ・「ラムネと一緒に」……ビッチを巻き付けて締め上げ、相手の四肢の骨をへし折り、そのまま死ぬまで連れまわす。
- ・「レモネード売りの少女」……不明。恐ろしく強力な技であることだけわかっている。

・ 栃木 莓子

17歳（女）

あだ名は「とちおとめ」

図々しい性格だが、実はドジっ子。

横浜生まれの横浜育ち。放課後は中華街をぶらぶらしている。

休日は友人や幼馴染みとラ・ゾーナ川崎でショッピングをしている。

「うだべ」や「うじやん」など、ハマっ子全開。

11歳の夏、土嚢の積まれた物置小屋で幼馴染みの男子に処女を奪われた。

・ 広瀬 元晴

18歳（男）。

小海の実の兄。

百子と同じ空手道場に通っていた。百子とは永遠のライバル。

妹の小海とは仲が悪く、顔をあわせればすぐに喧嘩が始まる。

「広瀬流拳法」の使い手。小海の師匠でもある。

- ・ 主な技
　　・ 「迷宮少女」…………目潰しと頭突きの繋げ技。
　　・ 「純拳」…………正拳突き。
　　・ 「愛絞」…………思いつきり抱きついて締め上げる。
　　・ 「逃葬」…………相手の両足を払い、倒れ際に腹を思いつきり殴る（小海が和也にかけた技）。
　　・ 「滑流男児」…………滑るようにして相手に素早く蹴りを一発叩き込む。

・ 猫好 飛々（ねこよし ぴょんぴょん）

17歳（女）。

動物が大好きで、犬5匹、ビーバー3匹、ペンギン6羽、ウサギ4羽、サイ1頭を飼っている。

そのわりに猫が嫌い。

小学校の頃、大量のゴキブリを校舎に放つたことで、今も嫌われている。

常に一匹の柴犬「マッケンロー」と「ジョン」を連れて授業を受けたり、校内を歩いている。

・ 新山 丸子

18歳（女）。

しつかり者に見られがちで、性格もしつかりしてゐる風だが、成績は学年最下位。

クラスの丸子の席には漫画や雑誌でパンパンで、自宅の私室も汚い。

・ 田原 俊麻呂
たはら としまろ

18歳（男）。

自衛隊のリーダー。

優等生だが重度のオタク。

中二病がまだ治っていない。

東京パラチノース

・ 羽笛子
ぱふえこ

？？？

・ エルモ

？？？

・ エスパニョーラ

？？？

・ 柴犬
わんこ

？？？

広瀬流拳法一覧（不完全）（前書き）

謎の、技集です。W

広瀬流拳法一覧（不完全）

広瀬流拳法

ラナウエイ

- ・逃葬スケーターボイ……両足を払い、倒れ際に一発強力なパンチを叩き込む。

ホット

- ・愛絞アリス……抱きついて締め上げる。

・迷宮少女アリス……目潰しの直後、畳み掛けるように頭突きをする（

多く、トドメに使う）。

マイワールド

・我独世界マイワールド……同じ流派の決闘で、迷宮少女に耐えた奴が、目が使えなくても感覚で相手を倒したことから、その名がついた。

アローラン

・一点拳アローラン……相手の一ヶ所だけを集中的に攻撃する。

ガールフレンド

・女友撃ガールフレンド……「しゃーー！」と気合いを入れて、一本立てた中指で相手の腹を突き、そのまま突き上げる。

スマイル

・笑刺スマイル……につこり笑顔で動搖する相手を拳で突きまくる（同じ流派にはききづらい）。

イノセンス

・純拳イノセンス……中指の第二関節を突起させた正拳突き。

キープホールディングオン

・忠犬ハ公舞キープホールディングオン……相手の攻撃が全て終わり、バテている最中に猛

攻。

トウギヤーザ

・一処トウギヤーザ……ジャーマンスープレックス。

ウォンティッド

・罪罰拳ウォンティッド……男のボコチンを足で掴み、捻り上げ、勢いで空いて

る方の足で顔面を蹴る。（決まりが良いことで有名）

ワットザヘル

・猫騙掌底ワットザヘル……猫騙して相手が驚いてる最中に掌底を叩き込む。

トウモロウ

・明日華トウモロウ……相手の後頭部を蹴りや拳で叩く。相手は気が付けば

ベッドで横たわっている。

アイムウイズユー

・絆君拳アイムウイズユー……相手を蹴り上げ、空中で背後に周り、抱き締めながら高速回転し、地面に自分」と叩きつける（「表蓮華」と似ている

と訴訟を起こされた）。

ハウダスイツフイール

・如何感柔手ハウダスイツフイール……相手の、男なら股間を扱き、女なら胸を揉みし

だく（厳重禁止技）。

・全返却相失別良エガリシングバックパッドユー ? ? ?

- 栗山夏子オリジナル（第6章で解禁）
栗山夏子フーノウズ
- 無言拳殺ワントクノウズガールズ ? ? ? (第6章)
- 孤独立少女擊ソラノハツヒガールズ ? ? ? (第6章)
- 我的幸福終殺マインハッピーエンドスイッチ ? ? ? (第6章)

広瀬流奥義

- 死別子守唄グッバイララバイ ? ? ?
- 相行突殺レッシュゴー 相手を思いつき壁にぶつけて氣絶させる（美園
- がユゴー戦で使用）。
- 隱瞬超頭突アンダーマイスキン 威力の弱い技に紛れて、一気に強力な頭突き（
- 相手は必ず氣絶する）
- 超薙頂点拳ベストタムシング ? ? ?

広瀬流特殊技

- 危険的失恋撃バットロマンス 超強力なビンタ（多く、女性が男性を振る時に使う）。
- 平然的顔拳ボーカフェイス ? ? ?
- 裏切拳ジュークス ? ? ?
- 運命生破ボーンデイスウェイ ? ? ?
- 獣拳破アニマル 獣のように四つん這いになり、相手を襲う。
- 時計音的拳ティックトック メトロノームや時計の針の音のリズムに合わせて相手を殴る。
- 金持的奴的豪邸的宴会拳パーティーアップアリットチドウーズハウス ? ? ?

第1話 訪ねる1人の少女（前書き）

いつから恐いくほのほの始まりかと。
もともとそれを目指してましたから

第1話 訪ねる1人の少女

金曜日の放課後、俺は若干特別な思いでいつもよりも早く生徒会室に向かつた。

「騎士団入団テスト!」とか言つ無数に張り付けてある謎のポスターなどには田もぐれず、俺は部屋棟一階にある生徒会室の扉を開けた。

室内のカーテンと窓は全開で、穏やかな陽気の中、部屋の中心の机の上で会長が一人、携帯を耳にあてがい何やら通話していた。

「へえ～ホントに? どんな子? へ～。う～ん。へ～。うん、じやあね～」

俺が聞いたのはそれだけだ。通話を終えたのか、会長は携帯を閉じてスカートのポケットにしまう。

「あら和也、早いじゃない? どうしたの?」

会長は不思議そうに言つ。

「会長。一つだけ聞きたいことがあるんです!」

「何よ改まつて。まさか辞めたいって言つんじゃないでしょうね?」

その思いもあるけど……。

それに聞きたことがある、とは言つたが、言いたいことがあると

は嘗つてない。

会長が今、やううと嘗つたことせ、嘗こたいての類こじ當てねま
る。

つて。

「これ違こまわ」

「向へ もつたいぶらないで早く嘗つなやつよ。そんな早く来たつ
てことは、私にだけ聞きたいんでしょう。早くしないとみんな来ち
やうわよ。」

わすが会長だ。向でも察する。

「前にくるつんから、会長は雛菊育成園の出身と聞いたんですが、
本当ですか？」

俺がそつぱつといふのは、感慨深げに腕を組んだ。

俺は答へいややかな期待を噛せぬ。

「わうよ。それで？」

わうけりつとはぐりかすんじやないかと思つたんだが……。なんか

拍子抜けした。

でも、まだ聞きたいことがある。会長もそれをひざひざしてこる
よしだ。

「いつ頃までいたんですか？」

「知りたい？」

「……」で焦らしが入なんて。俺の予想とは違つ。

「ええ、知りたいです」

俺は真剣な面持ちを作り言う。室内に謎の緊張感が漂う。

会長はまた腕を組んで今度は目を閉じる。そして音をたてて大きく息を吸つた。すると、一気に笑顔になり、むふふ、と不気味というかマヌケな笑顔で下を出しながら「教えない」と俺を嘲笑つよう

相変わらず憎らしい！

けど、ここで引き下がるわけにはいかない。

「何ですか？」

「うん。なんでも

「は？」

「とにかく、お・し・え・な・い！」

会長がそう叫んだ途端、会長からすればナイスタイミングだらう、
ドアが開き栗山さんと小泉さんが入ってきた。

もしかして、いや、ホントにもしかして、会長かこのタイミングも見計りつて、わざと焦らしたのか？

今までの出来事からするとどう考へられるおえない。

「和也くん。こんなに早く……。それに一人で何の話？」

小泉さんはグルのように見える。俺の思い過ごしがもしかれないが。

「大した話じゃないわ。悩み相談みたいなものね」

会長が『テタラメ』を言ひ。

「俺がいつ会長に悩み相談したっていつんですか」「

「やうだよね。悩み相談なら占い部にするもんね！」

小泉さんはそう言ひながら、特等席の窓際にある椅子へ向かい、腰を掛ける。

それにして、枕研に占い部、それにさつき「合宿部」まで見た。この学校はホントに何でもあるなあ……。

俺が呆れて床に胡座をかいだ途端、今度は浜田さんが室内に入ってきた。

「「」ここにちはみ園。」」ここにちはみんな

礼儀正しく挨拶をする浜田さん。

それにつけられて、ところよりは礼儀を重んじて俺も栗山さんもペロリとお辞儀する。

「そういえば、なんでこんな真面目そうな人が生徒会に入ったんだ？」

会長は手紙を渡したって言つてたけど、あの手紙には何て書いてあるんだろ？……。

「今日はまだなお仕事で私ひき古がわせる気？ 会長さん」

小泉さんが窓の外を見つめながら皮肉っぽく言つて。

すると会長は「へん……」ともつ一聲掛けてほしげに小さく唸る。

よし、いじせみんなのかわりに俺が言つてやる。

「どうしたんですか会長？」

「それがね。一つ困つてることがあるのよ……」

柄にもなくトーンションが低くて会長。

「悩みなら古川部に相談しきって、小泉さんが今やつれづれてしまつたけど？」

俺はあえて[冗談で食つて掛かる。

「今私が言つて思つたのにー。」

なぜか小泉さんは悔しがる。

「ある女の子がね」「

俺らの」となび軽くシカトし、会長は話し始める。

「生徒会に入れてくれって言つて、朝からずっと私に言つてくるのよ。それで困つてねえ……」

会長は呆れたよつと叫ぶ。

「いれてあげればいいんじゃないんですか？ メンバーを増やしたがつてたじやないですか」

「もう！ 和也はホントに……和也だねえ」

いや、意味が分からん。

どうやら俺の意見には誰も賛成してないようだ。またニアウーの空氣だ。

俺がただならぬ空氣を感じた途端、急に背後から大きなノックの音が聞こえて、体が反応する。

「は～い？」

会長が叫ぶ。

するとドアが開き、そこに立っていたのは一人の女子生徒だった。

茶髪ショートヘアの少女。着崩した制服。謎の赤い首輪。見たこ

とあるや。」については確か同級生だ。というか同じクラスだ。

名前は確か……広瀬 小海ひろせ こみだ。

自己紹介の時に「スキー場のあのほどよく雪が積もてるちょうど良い感じの角度の斜面ががとけるほど恋したい！」って意味不明なことを高らかに叫んでたのを覚えてる。

ほどよく雪が積もてるちょうど良い感じの角度の斜面つて『ゲレンデ』のことだろって思いながら聞いてたのも覚えてる。

第2話 ミンノ・アイデンティティー（前書き）

もともと、ほのぼのでハーレムを目指してたのに。
いつしか、クールでスマート路線へ行つてるとこ。
第一章からそうかも……。

第2話 ミンホ・アイドルティイテイー

「また来た……」

会長がめんどくさそうに顔を潜める。

「噂をすれば……」

小泉さんが笑う。

広瀬さんは堂々と立たちをして、なんか偉そうに会長を見据える。
しばりへ会長と広瀬さんの謎のにらみ合いが続く。

俺を含め他のメンバーは蚊帳の外からその数分間のにらめっこを見つめた。

「何か用かしら?」

渾れを切らした会長が沈黙を破り、少し優しい口調で帰れと呟つ。

広瀬さんは、ぶらつと下げてあった腕に入れ、ぎゅっと握りこぶしを作った。

そして、何をしだすのかと思えば、キレて頭を机に打ち付ける小学生のような勢いで、お辞儀をした。

「お願いです！ 私を生徒会に入れてください！」

広瀬さんの涙声にも似た叫び声が室内に満遍なく響き渡る。

会長が煙たそりてたのつて広瀬さんのことか。

入れてやりやいに。何で、何の取り柄も無い俺や、無口で何も喋らない栗山さんとか、いつ裏切るかも分からぬ埃みたいに漂つてる新聞部部長とか堅苦しくて後々厄介になりそうな風紀委員長を入れて、広瀬さんはダメなんだ？

会長の好みがわからん……。

「どんなことでもやりますー。」

お辞儀をしたままやつぱつ広瀬さん。

「うへん……良いわよ？」

え！？ わざあんなに煙たがってたのに良いのかよー。

「ほ、本当ですかー？」

広瀬さんは、顔を上げ、目を光らせながら会長の顔を見る。

「でも、その前にまずはテストを受けてもらひつわ。ほひ

そう言つて会長は、机の上からおつるとい、スカートのポケットから丁寧に折り畳まれた紙を取り出した。

そして血ひれを開いて広瀬さんに見せる。

「それは……なんですか？」

「『入団テスト』よ！ あなたのために特別に用意したの。騎士団の連中も、見たでしょ？ ポスター。ゼーんぜん懲りずにメンバーを集めようとしてるから、私たちもそろそろピンチなのよホントのことを言つとね。だけど、ただ単に寄せ集めのメンバーってわけにはいかないの。ちゃんと面接をして能力を判断ないとね。ここにいる全員、テストを受けたのよ？」

嘘だ！ 入団テストなんて一回も受けでないぞ！

会長が見せた紙を見てみると『生徒会新メンバー募集！』と色とりどりの字で書かれていた。

「是非！ 受けます！」

騙されてますよ！ 広瀬さん！

会長は広瀬さんに紙を渡すと「そこに書いてある時間に、ちゃんと来てね」と広瀬さんを送り返す。

広瀬さんは騙されたとは知らずに嬉しそうに鼻歌をつたいながら部屋を出ていく。

それを確認すると、ドアを閉め、机の上に座り直すと「はあ～～～と大きくため息をついた。

「キヨンキヨン、あとは頼んだわよ」

「わかつてゐよ、美園」

いつたい今度は何を企んでるんだ会長たちは。また俺だけが仲間はずれになる展開は勘弁だ！

「こりはハツキリ言っておこいつ。

「今度はどういう作戦ですか？ 今度こそは俺にも教えてくださいよ！」

「知りたい？」

会長は表情を一つ変えずに無意味な焦らしを入れる。

「はひ……」

あえて俺は声を掠める。『はい』と言つたつもりだ。

「何よ、その感じ。もう作戦には和也は入れてあへげないつ。口リシユは口リシユらしく幼女と戯れてれば良いのよ！ 親が居ない孤児の弱味に漬け込んで内面から自分のものにしようとしてる非人道的な変態尿道野郎！ ポノでも撮る気なの？」

おい！ えらい誤解を催促させやがって！

「全部デタラメだ！」

思わず大声が出る。

すると何故か会長が「ムフフフフ」と不気味に笑いだした。

しかし、他のメンバーは完全に引いてる。

何につて俺に。

「冗談よ【冗談】！ 怒らないでね？」

そう言つて会長は可愛らしく顔を斜めに傾けながら顔の前で合掌する。

「美園は和也のこと大好きだからね～」

不意に小泉さんがそんなことを言い出す。

「シー！ もうー。キヨンキヨンは口が軽いんだから！ 次言つたら顔面ガムテープでグルグル巻きだからねっ！」

若干焦つた様子で小泉さんを制する会長。

小泉さんのいつてることが本気なら……女子に好かれるのはありがたいが、会長は嫌だ。それに俺はまだ矢口さんを諦めてない！

それ以前に、好きならあんな悪口言わないでもらいたいね！ 【冗談】でも。

「ちよっとすみません！」

急に浜田さんの張った声が室内に響いた。

「どうしたの？ 伊代ちゃん」

「この教室に、椅子は一つしか無いのですか？立つて居るのが辛いです。床は汚れて私にまともに座ることはできません」

ロボットのようだが、こもつともな意見だ。

「へんやうね……。じゃあ、枕研に借つてこようかしら」

またあそこか。

第3話 眠たいパジャマと16歳の再会

俺は一人、また隣の枕研へと向かつた。

ドアを軽くノックしながら、「すみませ~ん」と言つ。

……。誰も出でこないなあ～……。

もう一度ノックする。

……。それでも誰も出ない。いないのか?

「勝手に入っちゃいなよ

びっくりした!

急に背後から声がするから振り返れば、そこには小泉さんがいた。

「そんなチンケなノックじや起きないよ?」

「起きない、つてどういふ意味ですか?」

「枕研の活動内容って、大体寝ることだからね

なんじやそりや。だつたら帰ればいいのに!」

「合宿部、では

「ないよ? 枕研と合宿部は似てるようで違うからね。枕研は、泊

まらないの。合宿部は泊まる。ほら、全然違うでしょ？

ほら、って言われても……。俺にはその違いが今一理解できないんだけど……。

「今は、みんな寝てるから、勝手に入つていいのよ？」

平然とそういう小泉さん。

「でも、ちょっと気が引けるなあ……」

「なんなの……？ 家にキタマ置き忘れてきたの？ 男でしょうが！」

「うあ！」

つていうか、小泉さんは呆れながらそういう言づけど、性別の問題じゃないし。

「 もう…」

小泉さんは業を煮やしたのか、俺を差し置いて枕研のドアの前に立つた。

「よく見てなさいよ。一回しか見せないからね！」

そう意氣込むと小泉さんは、気合いを入れる不気味な雄叫びとか、戦隊ヒーローみたいな見世物のファイティングポーズをとるわけでもなく、公園のチビッ子が親御の前でいきなり「チコー」と叫ぶようなノリで、枕研のドアを蹴り飛ばした！

大きな音を立てて開くドアの向こうに広がった光景に俺は啞然とした。

十畳ぐらいの畳が敷かれた部屋のちょうど真ん中に布団が敷かれてあつた。周囲の広々としたスペースには数個の机と椅子が並べられてあつた。

しかもその布団で、一人の女子生徒が寝息を立てて寝ていた。

黒いショートボブ、への字に閉じたキュートな口、剥がれた掛け布団が見せるピンクのパジャマ姿、大きく開いた胸元。

その寝姿は言い様の無くすごい無防備で、それに部室の鍵を閉めないのもあって、寝込みを襲うのは簡単そうだ。

この女子生徒とは、前にもここで会つたっけな。名前は知らないけど。

こいつのパジャマ姿はもう慣れた。普通に構内をパジャマで歩いるからなあ……。

「熟睡ね」

小泉さんが寝姿を見ながら言つ。

「そうですね……」

そつとしか言ひようが無い。

「そう言えれば、前はクレイヴとかいう部長がいた気がしたんだが？
今日は不在のようだ。」

「それじゃ私は用事があるから。じゃあね。女の子を泣かすんじ
やないわよ～」

そう言って小泉さんはその場を後にする。

「ちゅうひ

俺は思わず小泉さんに手を伸ばした。

かなり『ままずいからね』の状況。

だけど小泉さんは会長とま違つて察する能力なんてないつで、そ
そくせと棟を出でこつた。

それで……どうする？ 会長も待たせてるんだ。

「し、失礼しまーす……」

俺は上履きを脱いで恐る恐る室内の畳に足を乗せる。

「すー…………すー……」

寝息を立てるパジャマ少女の横を俺は忍び足で、通過し、俺は椅子
たちが待つ楽園へ向かう。

まるで集中力ゲームだ。

それにしてもこの部屋、良い香りがする。何の匂いだ？ なんか、甘酸っぱい、レモンみたいだ……。

そんなことを考えながら、俺は椅子の背凭れに手をかける。椅子を一つ同時に持ち、出入り口へ向かう。もう少しお忍び足で。

起きるなよ……。

なんとか、俺は廊下まで辿り着き、やつくべドアを閉めて、生徒会室へ戻る。

「なかなかの遅さね。ねむ子ちゃんと一緒に発ヤつてきたの？」

何の話だ。

「ねむ子つて？」

俺は椅子を置きながら立つ。

「枕研の部員よ。北乃くづちゅん。みんなは『ねむ子』って読んでるわ。有名でしょう？ パジャマで授業受けている子よ」

ああ、パジャマ少女のことか。

「あれは、アリなんですか？」

「ナシだったりとつくて制服に着替えてるわよ

まあそりでしょ？ね。

俺が持ってきた椅子は、すでに浜田さんと栗山さんが占拠していた。

まあ仕方ないよね。そのために持ってきたんだから。俺は当分床でいいや。

「あともう一つ椅子が必要みたいね」

「会議室がそういう。もしかして俺のやつか?」

「俺は良くていい」

「何言つてるの? 私の椅子よ

「こつも机の上に座つてゐるじゃないですか?」

偉そうにね。

「持つてきなさい」

「またですか?」

「聞こえなかつたの?」

はあー……。

めんどくさい奴だ。自分で持つてくれればいいのよ。

俺はまた枕研の部屋へ向かつた。

第4話 クウ（前書き）

「うつごううつごう」メみたいな展開ってみんなよく考えられるね。
俺にはこれが限界だ。。。

第4話 クウ

「失礼します……」

俺はまた、恐る恐る枕研の部室のドア開けて、一いつ々り忍び込む。さて、第一ラウンドの始まりだ。

寝息を立てるパジャマ少女」と北乃さんの横を通り、椅子がある室内の隅っこへ向かう……。

起きるなよ……。

足音を立てないようひそひそと、

まるで通学路の番犬との駆け引きだ。

俺は北乃さんに背を向ける……。

「本日はおはようございますっ！」

げ！

背後から高い声がした！ それに合わせて俺は魔法をかけられたように動きが止まる。そして胸の鼓動が高まる。

北乃さんが起きたようだ。と、とうあえず挨拶しようと……。

「おはよ つぎやー！」

俺の体は何かが飛び付いてきて仰向けに倒れてしまつ。それが何かは一瞬の出来事で、確認なんてできなかつた。

畳の上に倒れた俺は急いでそれを確認する。

……北乃さんだ。

どうやら北乃さんが俺に抱きついてきたようだ。

柔らかい感覚が全身を駆け巡ると同時に鳥肌が立つ。

「本日はおはようござります」

「どうやら北乃さんは寝ぼけているようだ。目も開いてない……」

俺は急いで北乃さんを引き離す。

しかし、北乃さんは何故か抵抗する。なかなか離れない。むしろ頬擦りをしてくる。

この状況じゃあつとも嬉しくないし、新聞部に見られたら大変だ！

『和也、浮氣発覚！』なんて見出しど、『一年B組の桐生和也は金曜日、枕研の部室でパジャマ姿で有名な『ねむ子』こと北乃くうと校内畠セツスで絶頂に』なんて無いこと書かれちやう！

俺には矢口真依さんがいるのに……

「本日はおはようござります」

相変わらずそれしか言わずに離れない北乃さん。

駆け引きは数分に及んだ。

全然離れない！

と思つた途端、北乃さんが田を開けた。そしてそのまま俺の顔を見た。

「本日はおはようございます……」

小声で駄々歩きといふこというか様子をつかがひつに俺を見つめる北乃さん。

「あ、おはようございます……」

慌てて俺は返事をする。

「本日はおはようございます……」

『北乃くん』とこう名の田大レコーダーには「本日はおはようございます」とてワンパターンの台詞が何パターンも録音せれてるみたいだ。

「あ、あの、き、北乃、さん？」

今の状況を説明すると……俺が尻餅をついてM字開脚で座り込んでるところ、北乃さんが俺の両肩に両腕をかけて俺のうなじに手を回して、俺の腰に両足しがみついてる。

北乃さんの暖かい吐息が俺の顔にかかる。

新聞部に嘘かかれても言い逃れができないくなる！

「くわちやんです」

北乃さんが俺のまだ眠い眼をじっと見つめながら掴み所の無い雲のようなおつとりとした声で言つ。

「え？」

「くわちやんです」

「く、くわちやん……？」

「はー？」

「は、離れてくれない、かな？」

「くわちやんは嫌です」

日本人、だよな？

「いや、ましいんだつて！」

俺は無理矢理北乃さんの肩をつかんで引き離す。

「くわちやんは離れません！」

「ちゅつヒー

北乃さんは、叫ぶと同時に俺を強く抱き寄せて、何故か俺の首筋に噛みついた。

生暖かい、唾液と舌と歯の感触を感じた。すじごくすぐつたい！

びっくりした。食い千切られるかと思つた……。

わて、この牙無しのHセヴァンパイアをこれからどうするか……。一刻も早く椅子をもつてこつから立ち去らないと。

しばらくすると、北乃さんの甘噛みはおさまつ、その跡地である首筋がスースーして少し気持ち悪い。

「枕研に入りませんか？ 和也つひー」

真正面を向いて言つ北乃さん。

和也つちつて、ていうか、俺の名前知つてたのか？ まあ、無理もないか……。色々あつたもんな。

「ま、まだ離れてくれない？」

「返事が先です」

「いやあ……俺は生徒会で精一杯なんです」

「だいじょです。会長さんがついてますう……ふわあ～

眠たそりあくび混じりに言つ北乃さん。あれ？ 前に来たとき、こんなおつとりしてたっけ。もつと冷たい感じじゃなかつたっけ？

「会長がついてるって？」

「会長さんは私と和也を一人きりにしてくれた流のキューピットなのです」

「え？」

まさか、俺はまた会長の作戦にハマったのか？

待てよ……。

今思えば、浜田さんの椅子が欲しい発言も、会長が椅子を取りに行かせたのも、部長がここにいないのも枕研に俺を勧誘の機会を与える作戦だったのか？

だとしたら回りくどくないか？

「入つてくださあ！」

「入りなよ！」

「じやあ離れまてん！」

困る…

どうしよう…。

ふと、北乃さんの顔を見てみると、目に涙を浮かべていた。今にも声を立てて泣き出しそうな勢いだ。

小泉さんがさつを語つてたのはこれのことだったのか！

入るか入らないか、決断しろ！ ってか！

汚い連中だ。

第5話 レジスタンス

「入ってください……」

北乃さんは鼻をすすり、目から涙が頬を伝つて畳に滴り落ちた。ホントに悲しそうな顔をする。

もづー

「わ、わかったよ！」

「ホントですか！」

北乃さんは田を輝かして俺を見る。

「だから離れて！」

北乃さんはよつやく俺から離れてくれた。そして、パジャマの胸ポケットから一枚の紙切れを取り出して無言で俺に渡してきた。

見てみるとそれは入部届だった。さすが会長が仕込んだだけある。準備が良い。

「月曜までに書いて顧問に届けるよ……」

「どうか枕研の顧問つて誰なんだ？」

「クレイヴさんに届けてください。顧問はいないのですう」

納得。寝るだけの部活に顧問がつかないのは。

「じ、じゃあ、俺はこれで……」

俺は当初の目的だった椅子を持つて、そそくさと部室を後にする。

「絶対に来てねー！」

そう言つて北乃さんは俺を見送る。

ドアを閉めてすぐ隣の生徒会室で大慌てで向かおうとした。

しかし、「今、出でてきたの？ 椅子一つだけでいいの？」と背後から声がした。それは正真正銘、小泉さんの声だった。

俺はシカトして生徒会室へ向かつ。生憎、小泉さんとも目的地が同じなので、シカトしたことについてしつこく聞かれた。

でも無視無視。

生徒会室のドアを開けると、一番最初に会長の膨れつ面が見えた。

「遅い！ 何してたのよー！」

会長が俺に向かつて怒鳴る。俺にはそれが耳鳴りに聞こえた。

いや、何って言われても……。

「それより美園。どうすんの？」

小泉をざかぢゅうじゆ良こタイニングで会長は、懇りへと瀬せきのじとを聞く。

「わいね。はあー……なんでいりもめぞざくわこのかしき……」

会長は染々とやつていてながらも、喋り始める。

「一応みんなに話すわね。今回の作戦はこうよ、小海ちゃんを騎士団のメンバーに入れるの。あえてね。それにもう手は打つてあるわ。小海ちゃんに騎士団のオーディションを取らせせるの」

いきなり始まつたけど、騎士団との戦いのことが。とこつか今回せ俺にも作戦を教えてくれるのかー

でも……

「受からなかつたらびづかるんですか?」

俺はストレートな疑問を投げ掛けた。

「残念だけど軽く作戦失敗ね……。その時は別の方法を考えるわ

まあ、会長には力ずくとこつ最終手段があるからね……。

「今のところ一対〇だから、負けてもそんなに悔しくないしね

やつて小泉さんが笑う。

「向言ひしのよー。負けは悔しくわー。すいじくねー。むしゃくしゃするよー。面白くもないー。」

会長が叫ぶ。

「美園は小さい頃から負けず嫌いだからね……」

浜田さんが宥めるよつて叫び。

とこりか、え？ 会長と浜田さんつてもしかして幼馴染みだったの？

「ちょっと伊代ちゃんっぽー・シーー！」

会長は人差し指を唇にあてる。

「あー、『めんなさい』……」

何故か謝る浜田さん。

そして何故か小泉さんが笑い出す。

この二人、絶対何か隠してるな。居心地が悪い。栗山さんも俺と同じ気持ちなのか、笑顔が無い。って元々か……。

「気を付けてよね……」

小声で囁ひ会長。

「それより、ねえみんな！」

すぐに話を切り替える会長。回転が早い。会長が飲食店とか出したら、五分で出されそうだ。

それ以前に会長の店なんて誰も来ないよな……。

全員が会長に注目すると、会長は喋り始める。

「この生徒会も、名前、つけない?」

「名前?」

みんなを代表して俺が答える。

「そうよ? でも『東董の騎士団』なんてダサイ名前はノーサンキューね」

「うーん……」

小泉さんが興味を持ったのか考え込む。

前々から思つてたけど、これ生徒会じゃなくて部活だよな? 完全に。

俺に部活一つ掛け持たせて、会長はいつたい何を企んでるんだ?
今度はどんな手で騎士団を圧倒する気なんだ? いつしか会長に期待してみし……。

頭が良いのか、バカなのか、それとも考える余地を「えないパワフルな会長にはある意味憧れるよ……。

「レジスタンス、なんてどう?」

小泉さんが提案する。

「たしか、『抵抗』って意味だよな？ まあこの生徒会にぴったりじゃん！」

「それ良い！ 悪い奴をやつつける『レジスタンス』！ 私たちにぴったりじゃない！ 決まり！」

何か色々間違ってる気がするし。客観的に見ると、向こうがヒーローでこっちが悪だと思うんだよなあ。

「今作戦から、我々は『レジスタンス』って名前で活動するわ！ 新聞部、記事まかせたわよ！ もし新名発表後も『生徒会』とか呼ぶような拭ききれてない汚いアルがいたらソイツには振り向かなくて良いわよ…」

女の子の言ひことじやない！

「じゃあ、今日はこれで解散！」

会長は間髪入れずに叫ぶ。

全く忙しい人だ。

第6話 ハプニング（前書き）

強烈なキャラが出来ます。。。。

第6話 ハプニング

次の日、昨日は金曜、なら今日は？ もちろん土曜日だ。

平日といつ名の広い砂漠の中にひっそりと蜃気楼で人々を誘うオアシスに行き着いても、ふと気づいた頃にはもう干上がってるんだ。そんな幻想にも似た現実、この高低さに酔ってしまうと、当日に主役の代役を言い渡された冴えない劇団員みたいに熱も冷めないまま舞台上であたふたしてしまつ。

でも俺にはそんなの関係ないね！

とにかく俺はオアシスもとい休日を楽しみたいんだ。

土曜日といつたら俺が行く場所はただ一つ、そつ、雛菊育成園だ。

いつもより少し遅い時間に起きて、やることやつてから、妹の桐乃をあしらい、朝十時、自転車に乗り、一人隣町へ向かつ。

いつもの幹線道路の片隅を流されるまま自転車を漕ぎ、駅から近いガード下の小さな脇道へ吸い込まれるように進入し、住宅街の路地に忍者のように紛れた緑色の門を確認し、その隣の小さな駐輪場に自転車をとめる。

自転車からおり、せつせと中に入り口と緑色の門へ向かおうとした時、来た道から黒いリムジンがゆっくりとしたスピードで走ってきた。

珍しいな。もしかして、政治家とか有名人が乗ってるのかな？

俺はリムジンを見送る。だが、そのリムジンは何故か俺の前で停車した。

そして後部座席の車窓が開いた。

やばい。なんか緊張する。大統領だったりひじょー。

「ハあ～イ、元気してる?..」

遊び心をによわせた高い声が、馴れ馴れしく俺に声を掛けてきた。

この声、聞いたことあるw.....。

車内なのにストローハット、垂れ下がった水色の長い髪、洒落たサングラスをずらしながら俺の顔をつかがつ純白のドレスを着た年上の女性、というか女子.....

「もしかして、会長.....ですか?..」

「なあに? その宇宙人を叩きしちゃったような顔は、こつも会ってるじゃない」

そんな舞踏会みたいな格好をした会長には会ったことはないよ。

「なにしてるんですか、こんなところで」

「その質問は野暮よ」

そう言つと、会長は自分で車のドアを開けて俺に近寄る。

ストローハットとサングラスをとり、車内へ雑に放り投げると会長は年老いた運転手に、ジョスチャーで合図すると、運転手はめんどくさそうに微笑んで、リムジンは走り去っていった。

会長は何も言わずに施設の門を開け、俺よりさきに中に入った。

慌てて俺も会長に続く。

会長も、施設が名残惜しいのか？ 俺みたいに定期的に来てるのかな？

若干ワクワクした様子でレモンの家の呼鈴を押して、待つ。家中から何やらドタバタと暴れまわるような騒音が聞こえ、すぐに玄関のドアが開いた。

出たのは理緒だった。

理緒は、すこし焦っている様子で、息を切らしていた。

「いったい何事なの？」

会長が訊ねる。

「前に電話で言った」

「アメリカちゃんね……」

くい氣味に会長が言ひ。

アメリカちゃん？ 誰だそれ。

「そんなことより大変なの！」

理緒がもどかしげに叫ぶ。

「さあて品定めと行きますか……」

そう言って会長が家に上がり込む。

アメリカちゃんが気にたつて俺も上がる。

「しゃー」「リーーー！」

リビングへ続く廊下で、何やら甲高い叫び声が聞こえた。同時に物が崩れ落ちる大きな音も聞こえる。

いつたい何事か……。

そう思つた時、リビングのドアに嵌め込まれてる長方形の彫りガラスの向こうに人影が見えた。

その影はどんどん大きくなり、何かがドアに近づいてるのがすぐにわかつた。

「 ちょっと待って！」

理緒が泣きそうな声で叫んだ。

その次の瞬間だつた！

耳をつんざくよつと大きな大きくて高い音が廊下に響いた。

俺はその正体をちゃんとこの田で確認した。

ドアのガラスを突き破つて、一人の背の低い、小学生ぐらじの金髪で長い髪の女の子が廊下に飛び出でてきた！

ガラスの破片は飛び散り、俺と会長と理緒は反射神経でそれをかわす。

金髪の女の子は、頭から飛び込んだのか額から血を流しながらも、廊下に落ちた破片をものともせず思いつきり踏みつけ、痛みも出血もものともせず、まるで花畠でも駆け回つてゐるんじゃないかつてぐらうに走つてくる。ただ顔はかなりのしかめつ面だ。

金髪少女は何か叫びながら田にも止まらぬ早さで廊下を駆け抜けると、突き当たりで思いつきり身体を打ち付けると「つぎやー」と声を上げて倒れ込み、動かなくなつた。

「い、これは面白こわね……」

さすがの会長も苦笑いだ。

アーメン 。

第7話 ダイ・ハード（前書き）

とんだ超人が出ちゃいましたねw

第7話 ダイ・ハード

「 ドレスに血がついたじゃない」

会長が呟く。

そんなの着てくるからだよ！ つーか何でドレスなんか着てきたんだ会長は。

それにして何なんだアレは。ブルドーザーが突っ込んできたのかと思った。

「 大丈夫……？」

啜り泣く理緒を慰める会長。

俺は床に散らばった破片に気を付けながら、ドアは開けずに割れたガラスの穴からリビングへ入った。

「ひどいなこりゃ……」

思わず声が漏れる。無理もない……。

食卓の大きなテーブルは虫の死体みたいに引っくり返り、辺りには割れた皿などが散乱していて、それを施設の職員が片付けてる。

一つの部屋の合間にあつた大きな本棚は倒れて、辺りに本が散乱した状態になってる。

壁には至ると、ここに穴がいていて、まるで蜂の巣だ。

庭に通じるスライドドアの窓は跡形無く全て割られていて、その窓際のソファーアーが置かれた小さな団欒スペースにあるレモンの家唯一の大型液晶テレビは、何故か真つ一つで一つは、右側は俺の目の前に転がっていた。

もう片方はと思い、リビングを恐る恐る歩きながら見渡し、探していると何やらドアの開いたままの部屋の中から泣き叫ぶ大声が聞こえた。

俺は警戒しながらその部屋へ向かう。

「テレビ……」

部屋に入ると、明里がテレビの左側を抱き抱えながら泣き叫んでいた。そしてくるりんがそれを慰めようとしているのが明里を撫でていた。

「和也くん」

くるりんが俺に気づいて、俺の方を向いた。

「いつたい何が起こったんだ？　まるで戦場だ。こんな悲惨な光景……」

「理緒のバカがアメリカちゃんを怒らせたのー！」

キレ氣味に明里の頭を撫でながら叫ぶくるりん。

「アメリカって、さつき凄まじい勢いで突っ込んできた金髪少女が…
…いつたい何者なんだ？」アイツは

「つこ昨日、ここに入ってきたんだ。すぐ大人しい子なんだけど、怒ると嘘みたいに豹変しちゃうの。そのせいで、親に捨てられたんだって」

なるほどね……。凄すぎても拘るなによ……。これから雑菊はどうなつてこくのやう。

「今ビデオしてる？ アメリちゃん」

くもつんが心配そうに訊ねてくる。

「気絶したのか死んだのか……とにかく意識を失ってるみたい。壁に思いっきりぶつかって奇声上げてね」

俺がそつまつと、くもつんはホッと肩を撫で下ろした。

その傍らで相変わらず「テレビ」悲痛に泣き叫ぶ明里。相手レジが好きなんだなあ。

「和也くん、おはよー……」

ふと背後から声が聞こえた。

振り返ると、施設の職員である本田美香子さんだ。この人には俺もお世話になつた。

「おはようございます」

他人行儀に挨拶をする俺。

「明里ちゃん、理沙ちゃん、ちょっと私、これからアメリちゃんを病院に送り届けてくるね」

本田さんが一人に言った。

「あ、アメリちゃん！？」

不意にくるりんがリビングの方を見て叫ぶ。

その言葉に俺と本田さんが振り返る。

そこには額から出血して顔面が血だらけの青い瞳の少女、噂のアメリカが立っていた！ もう田代めたのか！

アメリに寄り添つよし、会長と田代元の赤い理緒が立っている。

「病院なんていいもん。アメリンピンしてるー。」

寝ぼけたようなふわふわした口調でそう言つアメリ。なんて屈強なタフガールなんだ！

「ダメ！ ほら、足とか、頭とか痛いでしょ？」

本田さんがしゃがんでアメリの両手の腕をつかんで叫ぶ。

「そんなことより お腹空いたー。」

その言葉にその場の全員が呆れ返った……。

しかし、一人、会長だ。会長は嬉しそうに携帯片手に何やらメールを打つてるようだ。事の深刻さを理解していないようだ。

「片付けが最初よ！」

本田さんが怒鳴ると、アメリはしょぼんとうなだれてしまった。しかし反省はしていないようだ。

アメリは足の裏に刺さったガラスの破片を平然と痛がる様子など無く抜き取つて雑にその場に捨てた。

「片付けなら、俺も手伝いますよ」

「ありがとう和也くん」

とは言つても、あんな戦場をどう片付けるのか……。

そう思つた時、不意に視線を感じた。

その視線を逆探知すると、アメリの青眼に辿り着く。

目が合いつと、アメリは俺に一コッと笑いかけた。

なんて可愛らしい無邪気な笑顔だ。これがさつきのあのしかめつ面になんて何も知らなかつたら絶対に結び付かない。

こんな不思議な女の子、会長以来だな……。

会長よりも強烈なのは間違いない。

「これは年末の大掃除より大変ね……」

そう呟きながらビービングに戻る本田さん。俺もそれについていく。

斯くして俺たちの大掃除が始まった。

第8話 生徒会長のスピーチ（前書き）

アメリカちゃんは我ながら可愛い。。。。

第8話 生徒会長のスピーチ

大掃除が終わると、俺と会長とくるりんと明里と理緒、そしてアメリは、くるりんと明里の部屋で一休みをすることになった。

会長はくるりんに対する嫌味のよつこくくるりんの勉強机の椅子に座る。理緒は絨毯の床に、明里、くるりん、アメリは一段ベッドの一階で寛ぐ。

掃除中、アメリは何故か俺にすっごくなつこにきて、くつについて離れようとしなかった。

今も俺がアメリを膝枕してやつていて、アメリはすっごく嬉しそうに下から俺の顔を見ている。可愛いもんだ。

俺は作り笑いでアメリを撫でる。なぜならコマイツの機嫌を損ねると次こそはレモンの家が倒壊する、と大暴れを田撲した奴らに忠告されたんだ。

そんなことより、門で会長に会った時から気になっていたことがある。

「会長つて、かなりの金持ちに引き取られたんですね」

「やつよ」

会長が即座に反応する。

「なんかすごいお城みたいなところに住んでやつ……」

「やつ見える？」正解よ。和也の家の数十倍の敷地面積はあるわね

その場の全員が関心する。しかし、ぐるりんだけは不満そうだ。

「そんな金持ちだったら、もつとすいじことどきるんじゃないんで
すか？」

犬を可愛がるよう アメリの頭を撫でながら言つたのが本題だ。

「す」「こと？」

会長が首をかしげる。

「なんで騎士団との対決の時、あんなネチネチした作戦立てるんで
すか？ 金にものを言わせれば」

「ナンセンスよ。それは」

会長が食い気味に人差し指を横に振りながら言つ。

そして、よくぞ聞いてくれた！ と言わんばかりに語り出す。

「教えてあげる。私は、常にクールで、そしてスマートでいたいの。
それに引き取つてもらつた分際で、わがままも言えないしね。それ
に私そういうの大嫌いなの。金持ちが金にものを言わせて好き勝手
するのつて。私は、自分が作った作戦で相手を打ち負かしたいの！
私の武器は家柄じゃない！ とにかく私は家族には迷惑かけない
の！」

珍しいな。会長がこんな熱弁するなんて。

明里や理緒は会長に謎の拍手をおくる。

だが、くるりんは「よく言つよ」と不満げに呟く。同感だ。

会長は立ち上がるところに近づき、仰け反るくるりんの頭を難に無理矢理撫でると「あなたにも解るわよ。そのうちね」と怖めの微笑みを難に叩き込む。

「あれ？」

不意に、理緒が開いたままのドアの向こうに何か見つけたのか覗き込む。

「どうした？」

「今外に誰か知らない人がいた……」

幽霊を見たかのように不安げな理緒。

それと同時に会長の携帯のバイブレーションが鳴った。

「理緒ちゃん、安心して……私の知り合いだから……」

そうついつい会長は部屋を出ていって、玄関へと向かつていった。

会長の知り合い？ 僕も知つてゐる人なのかな？

数分すると、会長が戻ってきた。会長の横にもう一人誰かがいた。

俺はその姿を見て驚愕した！

「矢口さん？ どうして」「……？」

「」そこには和也くん。み、美園に呼ばれたの。楽しそうで会長と矢口さんって仲良しだったのか。上級生なのに呼び捨てだ。でも少ししゃべりちなし。

「真依、紹介するわ」「

やつぱり会長は、それぞれの紹介を始める。

会長も矢口さんのことを呼び捨てだ。俺もまだ真依って呼んだこと無いのに……

「 そして、この子がアメリカちゃん。昨日入ってきたね」

「へえ～可愛い～」

矢口さんは田舎を輝かせながらアメリカを見る。そして「よろしくアメリカちゃん」と手を差し伸べる。

「 よろしく真依ちゃん！」

アメリカは起き上がり、二人は握手する。それを会長がうんうんと頷きながら見つめる。

「 気を付けてよ真依。見たでしょリビングを。アメリカちゃんを怒らせてると酷い目見るわ」

矢口さんに注意を促す会長。酷い口ぶりではないけれど。

「ねえ、和也」

矢口さんと会長が話している端でアメリが小声で俺の顔を見つめる。

「どうした?」

俺も小声で言ひ。

「アメリ眠いの……」

そう言いつと問答無用でアメリは俺に強く抱きついて、一瞬ですやすやと寝息を立てて寝てしまった。

こんなに可愛いのに残念だ。色々と。

第9話 アメリ（前書き）

映画「エイリアン」の話が出てくるけど、知識がない人にはすみません。。。

第9話 アメリ

アメリが寝てから、会長と矢口さんは、駅前のスイーツショップへ行くと言つて出ていってしまった。

ドレスに血をつけたままね。

二人はいつたい何しに来たんだ。特に矢口さん。

俺はと、アメリが俺に抱きついて寝てしまつたことで、理緒たちに、絶対にアメリから離れるな！と強く言われ、身動きができたい。

寝姿はホントに可愛いのに……。

そうだ。寝姿で思ひ出した……。俺は月曜日、そう一週間で飛び抜けてダルい日だ。俺は『冥王曜日』と呼んでるが。

枕研に入部届を出さなきやいけないのか。

まあ、会長が主催したイベントだ、絶対に入らなきやいけないんだろうけど……。

『恋のキュー・ピッヂ』なんて言ひてたな。もし、北乃さんに告白されたら、自称矢口さんの彼氏候補である俺はなんて答えよ？

うーん……。悩みどじうだなあー。会長はいつたい何を企んでるのやひ……。

俺はふとアメリの顔を見た。白くて透明感のある顔。

おかしい。

わざわざまで額から出血していたはずなのに、何故か傷が治っている。

今度は足元を見る。白くてすりつぶして綺麗な足だ。

膝を曲げていて、足の裏は膝枕をしている俺に向いている。

あんなにガラスの破片を踏んだのに、傷が嘘のようになってしまっている。

ダイハードなタフガールなんでもんじゃないぞー！

コイツは一体何者なんだ！？

「おこちゃん！ 見てみるよ」

俺はアメリカを起こさないようにカッスカスの声でくるりんこ、アメリカの足の裏にお視線をおへり、見るよつに促す。

「傷が」

くるりんもかなり驚く。

「どう思ひへ？」

俺とくるりんは顔を見合わせる。

理緒と明里も呼び込み、この奇跡を四人でまじまじと見つめる。

「人じゃないんじゃないの？」

くるりんがそんなことを言い出す。

「Hイリアンだよ！」

理緒は真剣な表情でくるりんの意見に乗っかる。

「違うよー。Hイリアンはリブリーが全部殺したもん！」

テレビ好きの明里が意味不明なことを言い出す。

「なに言つてゐるの明里ちゃん！ Hイリアンはまだ守田ひづじゅうじやいるよー！」

「じゃあ、アメリカさんの親はリブリーを騙してHイリアンを地球上に持つて帰らうとした会社の社員なの？」

くるりんが訊ねる。

「科学者が作つた新種の人形Hイリアンがアメリカんなのかも！ ニュー・ボーンはパンチでクイーンを粉碎したんだけど、アメリカンなら小指で触つただけで粉々なんだ！」

バカみたいに熱弁する理緒。

Hイリアンなら俺も一匹知つてるよ。//ソノコランとこつこー。 ウオーリアーザの進化系をね。

そいつは生徒会長を装つて地球を侵略しようとしてるんだ。困った話だ。

そういつてる間にへるりんと理緒の議論が激化していた。
だが、俺が一瞬だけ物思いに耽つただけで、どうにつけど、どういふ話になつたか掴めない。

「 科学者を嘗めてるの？ 調教するに決まつてるじゃんー。」

「 でも反逆されてみんな死んだじゃん！ 」

「 時間がかかるのよー。ハイリアンの優等生は人間でこいつらへるりんと同じで小さい脳なのー。」

「 そういうアンタはエイリアンそつくり。人の気持ちを考えないと汚いとか、ヨダレだらだらの寝顔とか、寝相も悪いしー。あれを見たとき寒気がした！」

おこおこ、罵り合になつてるじゃないか！

「 二人ともやめろー。アメリカがエイリアンだったら血を浴びた会長は今ごろ全裸で内蔵とろとろで死んでる。それに……アメリカが起きるだろー！」

俺は一人を制す。

しかしその途端だった。アメリカが口を開けた！

その場は凍つつく。

「あ、おはようアメリー……気分はどうひへ。」

俺は恐る恐るアメリーの機嫌を損なわないようにひそかに歩く。

「わい朝?」

寝ぼけてこらアメリー。

「今は……夕方の四時だよ」

「ふ~ん……」

アメリーは起き上がり、ベッドからおりつて、部屋を出るとビームへ歩いてしまった。

「エリ行へ氣だらう……」

理緒がさつぱつたと同時に、「和也くんー」とアメリーが呼ぶ声が聞こえ、俺は慌ててアメリーのもとへ向かつ。

全く今日また。

リビングの真ん中のフローリングの上に立ちながり、腰に手をあてがいながら俺のことを見るアメリー。

「どうしたの?」

「アメリから離れないでって言つたでしょ?」

初耳だ。

「ほり、来てー。」

そつ言つとアメリは俺に背を向け、玄関に続く廊下へと歩いていった。

俺はアメリの奴隸なのか……。でも奴隸じつもすべすべ終わりだ。

「！」めんアメリ

「え？」

アメリが振り返る。

「もひ、帰りなきや、いけないんだよね……」

頼むから怒りしないで！

「やだーーー。」

そつ叫ぶと、アメリは俺に思いつきり抱きついてきた。背の低いアメリは俺の腹部に顔を埋める。

苦しい……。

「やだ、じゃなくて

優しく言わないと大変なことになつそうだ。

「いや――」

セーラー服をきっちり締めてくるアメリが、可愛くて仕方ない……。

「う、じゃあ、明日も来るから」

「いやだ――」

困った。まさに修羅場だ。

第10話 パートの日

冥王曜日が回ってきた。

土曜日、なんとかアメリを説得して午後八時という遅い時間に家に帰れた俺は、その次の日、日曜日も施設へ向かい、アメリの相手をした。

日曜日は奇跡的にアメリはキレなかつた。

だけど帰れたのは土曜よりも遅い九時だ。笑える。

そこで平日最初の日、さう今日の昼休み、俺が向かっていたのは三年C組の教室。

理由はもううん、クレイヴさんに入部届を出すためだ。

途中、騎士団の連中に会わないかひやひやしたが、奇跡的に会わずにすんだ。

C組の教室のドアから一番近い生徒を経由してクレイヴさんを呼んでもらつ。

クレイヴさんは、ふわふわとした穏やかな微笑みを保ちながら俺のもとへやってきた。

「」

俺はとりあえず挨拶する。

「おはよっ。入部届は？」

穏やかな割に噛み合つてないし、結構唐突に来る人なんだな。

呆れながらも俺はクレイヴさんに入部届を渡す。

「確かに受け取ったよ……。これでくつも喜ぶね。今日は僕は行けないから、くつを頼んだよ」

「は、はい……」

前にあんなことがあつたから、少し気が重い……。

新聞部という厄介者もいるし……。

クレイヴさんと別れ、俺は自分のクラスに戻る。

途中、騎士団が作ったポスターに目が行く。

『入団テストは土曜日に終了！　たいへん優秀な人材が集まりました！』

おいおい。また変なの兼敵が増えたのか……。

会長も大変だな。会長が悪いんだけどね。

そういうえば、広瀬さんの生徒会役員オーディションってのはどうなつたんだろう？

会長が好きそうな奴ではなかつたけどね。

広瀬さんが女子で一番ガサツな奴だつてことは、校内にしれわたつてるからな。

それにもしても生徒会役員選挙とかは重要なことだから朝会とかで取り上げられるけど、このオーディションは生徒会メンバーしか知らないんじゃないかなつてくらい内密に行われてる。

騎士団の団員募集のポスターは至るところで見たが、生徒会オーディションポスターって全く見かけないな……。

騎士団にでも剥がされたのかな?

放課後、俺は生徒会室へ行く思いではなく、枕研へ向かう思いでB組の教室を出る。

C組の北乃さんは、授業に参加せずにずっと部室で寝てるのを聞いて、少し枕研に偏見を持ちながら、一階へ向かう。

だが階段の踊り場で、なにやらこそこそしてゐる小泉さんを見かけた。

「小泉さん?」

声をかけてみる。

「静かに! シッシッビツか行つて! これから大仕事 大スクープなの!」

そつと、俺を追い払う小泉さん。新聞部も大変だな。

俺はいつものように渡り廊下側へ行こうとしたが、途中で気になる人物を発見した。

栗山さんと浜田さんだ。一人は、靴を完全に履き替え、正門に向かっていた。

あの二人、バッくれる気が？

「……心配しないで。お使いに行かせただけよ」

ふと、横から声が聞こえたと思えば、会長がたつていた。

「何があつたんですか？」

俺が訊ねたのも束の間、会長は俺の手を強引に引いて、生徒会室へと引きずり込んだ。

そして椅子に座らされる。

「あ、あの……」

俺が訊ねようとした時、会長の携帯が鳴った。

「もしもしキヨンキヨン？」

会長が出て、話始める

もしもし + キョンキョン。なんか可愛らしいのかバカみたいなのか
……。

「アハ……」

それだけで会長は携帯を切つてポケットにしまつ。

すると会長はこつものように机の上に座つた。だなび今田は少し不機嫌そうだ。

「あの……会長、俺、枕研に」

「座つてよー。」

食い気味に叫ぶ会長。ホントに様子がおかしい。

恋人にでもフラれたのか？

なーんて、会長に恋人なんてできるわけないか……。

第11話 ミソノ・アルティメイタム（前書き）

「あなたさー、またいつこいつ展開。

第1-1話 ミソノ・アルティメイタム

「会長、どうしたんですか？」

俺がそう訊ねると、会長は頃垂れてしまった。

こんな会長、珍しい……。

そんな時、ふとドアをノックする音が静かな室内に響き渡った。だが会長は出ようとしない。代わりに俺が出ようと立ち上がるが、その必要は無くドアは勝手に開いた。

すると二人の男女がズカズカと入ってきた。

騎士団の一木さんと山口さんだ。なぜまたここに？ やられてきたのか？

「じんにちは会長さん」

一木さんが会長に向かつて言つ。しかし反応は無い。

一木さんは今度は俺の方を向いた。

「そして、じんにちは桐生和也くん。東董の騎士団、団長改め会長の一木 博だ」

え？ 前に自己紹介したはずだけど？ 忘れっぽいのかこのメガネは。

ぽかんとしていると、一木さんは不気味ににやける。

「まだわからないか？ 君は忘れっぽいんだな。俺が恋のキューピッドさ。君と北乃くうのね」

「どうこう」と、ですか？」

全然話が掴めない！

「今日この日、忌まわしき生徒会長、今田美園の作戦は我々の手によつて潰されたのさ！」

一木さんが嬉しそうに叫ぶと、隣の山口さんも淡々と喋り始める。

「私たちは、北乃さんが和也くんのことが好きだつて情報を入手したの。それで、私たちが北乃さんに恋のキューピッドになつてあげるから、和也くんを枕研に誘いなさいと言つたの。枕研に和也くんを誘つて、枕研は寝る部活だからその最中に我々は和也くんを捕らえるつて作戦よ。一人だけの空間を作つてね。でもそれだけじゃ二人の空間なんて生まれないわよね。だつて、普段和也くんは枕研なんて行かないものね？だから私たちはこの情報をあえて新聞部に流したの。美園はまんまと和也くんを枕研に送り込んで、一人だけの空間を作つたみたいね」

「でも会長は俺たちを疑つていたんだ。それで会長が利用したのは、かねてから生徒会に入りたがっていた広瀬小海だ。会長は、我々が作ったポスターを真似て、『生徒会オーディション』という紙切れを作つた。日時、集合場所は騎士団の入団テストと全く同じ。嬉しいように生徒会室を出た広瀬に小泉が後から声を掛けたんだ。団員は

ちゃんと田撃していた。小泉が広瀬に騎士団へスパイとして入り込んで情報を盗んでこいと言つてゐるところはね」

あの時、広瀬さんが嬉しそうに出ていった後に会長が小泉さんに「頼んだわよ」と言つてたのは、このことだったのか！

「私たちはあえて小海ちゃんを騎士団に入れたわ。スパイにはスペイの仕事をさせてあげるためにね。私たちはデタラメな情報を彼女に教えて、それを美園に伝えさせたのよ。枕研での作戦は嘘で、北乃さんを捕らえたから、北乃さんからの呼び出しと見せかけて、和也くんを一年C組に呼び、隠れていた団員で一斉に和也くんを捕まえる。ってね。でも、それはただ単に厄介な新聞部部長を捕まえるための罠よ。会長はまんまと騙されて、今日歌をC組に送り込んだわ！」

小泉さんが、わざわざこうしてたのって、このことか。

「それで、こそそして今日歌を聖ちやんが捕まえたの。それを皮切りに生徒会の手先である新聞部を全員ね。そして、今日歌の携帯を使って美園にこう言つたの。『作戦成功！』とね」

これつてもしかして、会長がおされてる？ 会長は相変わらずつなだれでいる。

「何をしにいつたかは知らないが、きっとお前の下らない作戦の一部だったんだろう、わざと出ていつた風紀委員長と栗山夏子も捕獲済みだ」

またしてもいきなり生徒会と騎士団の作戦に巻き込まれたかと思えば、どうやら大ピンチのようだ……。

「か、会長……」

不安な俺は会長に声を掛けるが、やはり反応しない！

不意に、一木さんが指を鳴らした。

すると、室内が一気に暗くなつたと思ったら、窓の外に謎の黒ずくめの集団が現れた！

その集団は窓ガラスを一気に割った。

大きな音を立てて破片が室内に飛び散る。会長に破片があたるが、会長はびくともせず頑垂れている……。

そして、割れた窓から黒ずくめの集団が数十人体勢で押し寄せて、俺と会長を囲んだ！

これはホントにまずい氣がする！

まるでアクション映画のクライマックスだ！

山口わんが会長に歩み寄る。

「わかつたでしょ？ 負けるつですっごく悔しい。『家柄』を使えばよかつたのにね。……仲間を助けてほしかつたら、とつとと降伏しなさい！ アンタの大好きな和也と一緒にね！」

山口わんの声が響き渡る。

なにとか書いてくれるやつー。

第11話 ミソノ・アルティメイタム（後書き）

次章はいつこの辺の無じでしょうと想つ。。。。

第1-2話 離菊よつ葉を引むて（前編）

また戦闘ですね。。。

第1-2話 離菊よじ愛を「」めて

なんか空しい感じするナビ、よくよく考えてみれば、これが正義なんじゃないのかな？

俺たち生徒会はバカだつたんだ。それをほつといた教師もね。

これを機に俺は普通のつまらない人間として高校生活を送るのか……。

もつけひとつ生徒会で良い思い出ができるからでもよかつたのになあ……。

「ねえ和也、覚えてる……？ 私が言つた言葉」

会長が頃垂れながら呟く。

「な、何をですか？」

「私たちを『生徒会』って呼ぶ連中はシカトして良いって……」

たしかにそんなこと言つてたな……。

だからずっと無言だったのか。

「は、はー」

「今やり向を出すのかと思へば……」

一木さんが呆れる。

ふと、廊下から、足音が聞こえてきた。

「ねえ、和也。騎士団が一つ、忘れてる」とあること知ってる?」

「……へ?」

その言葉に、その場の全員が会長に注目する。

「紹介するわ、私の親友よ」

会長がそう言った途端、生徒会室の出入り口の前に一人の少女が立つた。

矢口さんだ。

「またせた? 美園」

「もひー! すひー!」待つたんだからー。」

会長はわざわまでの落ち込み具合が嘘だつたかのよひにわやぴわや
ひ喋る。

もしかして、ずっと黙っていたのって、『生徒会』って呼んだから
だけじゃなくて、矢口さんを待つてたからなのか?

「呆れた……。こんなアバズレだるだる巨乳ヴァージンに何ができる
るっていうの?」

山口さんが嘲笑う。

「……山口、さんでしたっけ？ 紹介します。私の友達です　」

怒りを必死に堪える矢口さんの後ろから一人の背の低い少女が顔を出した。

金髪に青い目……あ、アメリ！？ なぜここに！

……なるほど。どうやら、この戦にも、会長の勝ちのようだ。

アメリは不機嫌そうに山口さんをはじめとした騎士団員を睨み付ける。

「実は、夏子と伊代ちゃんには、アメリカちゃんを迎えて行かせたのよ。でも私は一人だけじゃ不安だから、保険を掛けたのよ。元々騎士団の手先で、今は完全にノーマークの真依をね。案の定、真依の出番ができたわ。不本意だけどね。……バカな騎士団がわざわざ施設まで来てこそこ所得た情報は、私が『金持ち』ってだけ。ホントに、笑えるわ！」

「だからどうだつていうの？」

山口さん……アーメン。

「私の勝ち、あんたらの負け、それだけ」

会長がそつ言い終わつた時、突然、部屋中に大きな金属音が響いた。

その途端、黒ずくめの騎士団の手先たちがざわめき、後ずさる。

俺はその正体を叩撃していた。

初対面の時と全く同じ眉間にシワを寄せた厳つい表情でアメリが見せた一瞬のショーやは、アメリの身体よりも大きな生徒会室の鉄のドアを根こそぎ取り外したかと思えば、それを持ち上げ、頭上で本を閉じるかのような軽さで一気に折り畳んでしまった。

ドアに嵌め込まれていたガラスの破片がアメリの頭に降り注いだが、アメリは顔色一つ変えないで、騎士団の連中を睨む。

俺は「」の時ははじめて、アメリがキレることに対する喜びを感じた。

「アメリカちゃんの本領発揮ね」「

会長が笑みを浮かべながら呟く。

「な、なんなの……？」

山口ちゃんがアメリに偏見な視線を向け、一木さんと共に後ずさる。

「しゃーー！」「ラーー！」

アメリは気合を入れるように大声で叫び、上体を少し仰け反らせた。

恐らくあの折り畳んだドアを投げるつもりなんだろうけど、明らかにこのまま投げたら机の上に座つてゐる会長にあたるつて！

俺の心の叫びも空しく、アメリは一気に腰を引っ込ませ上体を前に

突き出し、その勢いで頭上のドアを会長曰掛けて投げつけた！

しかし一瞬だけ見えたアメリがドアを投げつけるまでの会長の表情は、余裕そのものだつた。

俺にはちゃんと見えた。

会長は、凄まじい勢いで飛んできたドアを完全に見切り、座つたまま股を開き、出来た隙間に両手をつけ腕を曲げると、勢いをつけ、ドアが直撃する、まさにその寸前に、両腕をバネにして宙に飛び上がつた！

会長と机の狭間を猛スピードで通過するドアの上を会長は華麗に一回転した！

生徒会室のドアは真っ直ぐと脇田もふらず、黒ずくめの集団へ突っ込んだ。連中はかわすことなどできず無様な声を上げてまるでボウリングのピンのように弾け飛ぶ。

完全に怯んだ騎士団の手先を蔑ろに、会長は机の上に綺麗に両足で着地した。

かと思えば、間髪入れずにしゃがみこんだ。

「アメリちゃん！」

会長はそつとふと、勢い良く、アメリのいる廊下の方へ飛び込んだ！

それを合図に、アメリは机の方へ突進する。

一気に会長とアメリの位置が逆転しそうとしていた。

俺も身の危険を感じ、会長が着地した廊下に逃げる！

アメリは机の脚を片手で掴むと、それを狂氣したように振り回し、次々と黒ずくめの騎士団の手先を打ち負かす。

全員が戦闘不能になつたのを確認すると、廊下際の机を一木さんへ向かつて机をぶん投げた！

机は一木さんにクリーンヒットし、一木さんは衝撃で吹っ飛ばされ、机と共に壁に身体を打ち付け、倒れ込んでしまつた。

一木さんが打ち付けた壁には窪んで蜘蛛の巣状に亀裂が走つていた。

ホントに、アメリの本領發揮だ……。

「面白いじゃない……」

山口さんは驚きながらも、どこか余裕の表情でアメリを見据える。

そして、メガネを外した。

「びつやう山口さんは本領發揮するようだ……。

「楽しませてくれそうね。『尿色金髪おチビちゃん』

やつぱり山口さんは右手に握った自分のメガネを思いつきり握り潰し、それを思いつきアメリに投げつけた。

アメリは平然と首を曲げてそれをかわした。アメリの目は、輝きを失い、まるで狂氣の殺人鬼のようだ。

山口さんと対角の壁にメガネが打ち付けられた小さな音を合図に、
アメリが山口さんに向かつて走り出す！

今日は会長も固唾をのんで見守つていた……。

次章はまかせて。。

第1-3話 エイリアンvsプレーティ

俺たちはアメリといつ名の金髪美少女小学生の皮を被つたエイリアンと、それを狩ろうとする山口百子もといプレーティーの壮絶な死闘がまさに始まろうとしていた！

「心配しなくともアメリちゃんは大丈夫よ」

会長が俺の肩に手を置いて優しく呟く。

テレビを真っ二つにして、ドアを折り畳んだ奴なんだ。それに山口さんは会長にすら勝つてない。

大丈夫だらうけど、山口さんの謎の余裕さが気になる。

そういう想つてる間にも一人の戦闘は激化する。

アメリの先制突進を流れるような滑らかな動きでかわして後ろに回り込んだ山口さんは、腰を落とし、左足を曲げ、バットを振るよにピンと伸ばした右足でアメリに足払いを決める！

アメリは仰向けに倒れこむ！

だが山口さんは間髪入れずすぐ立ち上がり倒れたアメリの顔面に大人げない強烈右ストレートを叩き込む！

アメリは暴走の達人とはいっても、武道の達人ではないんだよなあ……。

山口さんは口元に笑みを浮かべながらアメリの顔面から拳を退ける。

アメリは氣絶したのか目をつむり、顔は赤くなり、鼻血が出ている。

「観念した？ オシッ！」ちやん

山口さんが嘲笑う。

すると、アメリはふと目を開ける。

そして瞬く間に立ち上ると、山口さんに掴みかかるが、平然とかわされ、回し蹴りを腹部に喰らい、吹っ飛ばされ、枕研側の壁に身体を強く打ち付けた。

手加減しない山口さんは、そのまま壁に凭れたアメリに殴りかかるが、すぐに起き上がったアメリは、突っ込んできた山口の腰に抱きつくと、そのまま半回転し、自分もろとも壁に豪快な体当たりをする。

お陰で壁には大きな穴が開き崩れ落ちる。

壁を突き抜けてしまった二人の姿は見えなくなり、俺と会長と矢口さんは、すぐに隣の枕研の部室へ向かつ。

そしてすぐさまドアを開ける。

すると、呑気に布団で寝ている北乃さんの床を舞い、また壁に身体を打ち付けた。

恐らく山口さんに投げ飛ばされたんだろう。

ボロボロの姿で頃垂れるアメリ。もつ見ていられない！

山口わんのやつてる」とは非人道的だ！

しかし、アメリはやつぱりダイハードなタフガールだ。普通の奴ならもうとっくに死んでるような衝撃を受けても、また起き上がりふらつかながらも、山口さんへ力強く足を踏み込む！

だが、山口わんは向かってくるアメリの顎を蹴り上げる。アメリは垂直に宙に浮かぶ。

その隙も逃さず山口わんは、いや山口は、アメリの服を掴み、窓へ思いつきつり投げ付けた！

大きな音を立てて割れた脆い窓ガラスの破片と共に外へ投げ出されるアメリ。

それでも北乃さんは起きない。

山口は、俺たちの方を振り返る。

「あれが生徒会の最終兵器なの？」

「……」

山口が『生徒会』と呼ぶからか、会長はシカトする。

「そんなことよつ

「

シカト決め込むかと思つていたが、会長が口を開く。

すると、山口の真下の畠が不自然に盛り上がる。異様な光景だ。

盛り上がった畠は、火山が噴火するよつて、一気に押し上げられ、山口は仰け反り、尻餅をつく。

畠の下から現れたのは、ガラスの破片が身体中に刺さつて血だらけのアメリだつた！

さすがタフガールだ。

山口はすぐに立ち上がるつとしていたが、立ち上がれなかつた。

いつの間にか背後から山口に近寄つていた会長が、両腕を山口の脇の下から通し、山口の身体を押さえつけていた。

「離せ！」

焦りを見せる山口。

アメリは、畠の縁を掴むと、畠で、山口の顔にビンタを撃ち込んだ！

畠の角が山口の顔面を直撃し、山口は血を吐く。

アメリは畠を窓の外に投げ捨てる、姿勢を低くし、思いつきり足を踏み込み、山口の腹部田掛けで突進した！

その衝撃で会長もろとも吹っ飛び、コンクリートの壁を突き抜け、廊下へ飛び出した！

飛び散った瓦礫で煙が発生し、三人の姿が隠れてしまい、どんな状況かわからない。

俺と矢口さんは、固唾を呑んで煙がおさまるのを待つ。

会長とアメリカは、そして生徒会、じゃなくてレジスタンスはいったいどうなってしまったんだ！？

第1-4話 レジスタンスを忘れない（前書き）

第四章終了です。

第14話 レジスタンスを忘れない

煙が引き、俺の目に映った光景は、まるで寝相の悪い女子生徒が集まつた修学旅行の夜中のように、瓦礫に埋もれた三人の姿だった。

三人は死んだように動かない。

俺と矢口さんはそれを凝視する。言葉が出ない。

割れた窓ガラス、穴の空いた床、崩壊した壁二ヶ所、そして起きない北乃さん。

まるでディズニーランドだと言わされて廃墟に連れてこられた時みたいな空しい気分だ。

連れてきた奴、そう、会長を恨みたいが、そこを連れてこられたのを機に廃墟にハマつたように凄まじい光景を見れたことに関心してしまった。

「死んじゃった、のかな……？」

心配そうに弦く矢口さん。

「まさか。会長もアメリカも、それに山口も、かなりのタフガールだし、壁突き破った程度じゃ死ないと思つ」

「そう、だよね……」

とは言つても一向に起きる気配が無い。

会長がここに死んだら、レジスタンスも、束縛も無くなるんだろうけど、それはそれで寂しい。

ふと、背後から無数の足音が聞こえてきた

「和也く～～～ん！」

それと聞き覚えのある声も。

振り返ると、小泉さんを始めとした、浜田さん、栗山さん、広瀬さんが走り寄つてくる。

「みんな！ 大丈夫だったの？」

俺がそう言つと、小泉さんは、余裕の表情で、自らの腕を手で叩いて俺に見せつける。

「私の実力を讃めないでよね！ 繩脱けなんて朝飯前！」

さすが新聞部。 といふか小泉さん。

「といふか騎士団の連中はびりしたんですか？」

「スタンガンと催涙スプレーもレジスタンスの一員だつてことをもう忘れたの？」

なるほどね……。

普通に考えたらおかしいんだけどね。なんて言葉はもはやナンセン

スだね……。

「全くひどいわね……」

浜田さんが瓦礫に埋もれた三人を見て咳く。

栗山さんや広瀬さんも、その異様な光景をこの世のものとは思えないと、田を見開き見つめる。

ふと、瓦礫が崩れる音がしたから見てみると、破片と血と埃だらけのアメリが起き上がりっていた！

けろりとしていて、欠伸をして田を擦る。

ホントに修学旅行の朝みたいだ。

「アメリちゃん！ 大丈夫なの？！」

矢口さんが驚き、叫ぶ。

アメリは無言で、初めて歩き出した赤ちゃんのように手を前に伸ばして俺に近寄ってきた。

「和也くん……」

そう言って俺に抱きついてくるアメリ。

俺はそれを優しく抱きしめて上げる。

端から見れば実に奇妙な光景だろう。

「美園！ あんた平氣なの！？」

小泉さんが叫ぶ。会長も起き上がつたよつだ。

「……今日は久しぶりに楽しめたわ」

顔にできた無数の切り傷や後頭部の出血なんてものともせす感想を述べる会長。

……わすがです会長。といつか前にもこんな出来事があつたのか？

氣絶して倒れている山口を見据えながら会長は微笑む。

「三対〇」

小泉さんは山口に小さい瓦礫の石をぽんと投げる。その石は山口の顔面に当たつた。

すると、山口は田を開けた！

「ハ～イ、氣分はどう？」

会長が嫌味のように話しかける。

「アンタに触れた背中が痒いわ」

山口は会長に向かつてツバを吐きかける。ツバは会長のまつべたに付着した。

「キヨンキヨン……」

会長がそう言つと、分かつていてかのよつに小泉さんが会長にスタンガンを渡した。

受け取つた会長は、電源を入れて山口の腹部に感電させた。

山口は強がつたのかグツと声を堪えて氣絶する。

「今日は結構ヤバかつたんじやない？」

小泉さんが山口を見据えながら会長に言ひ。

「確かにね。キヨンキヨンが捕まつたことも予想外だつたし。アメリちゃんがいなかつたら完全に負けてたわ……」

ホントにピンチだつたんだなあ。

「みんなー、今日は打ち上げに行きましょ。私の奢りよ。お金なら腐るほどあるわ」

「いえいー！」

明確に喜んだのは小泉さんだけで、他は呆れ返つた苦笑いだ。

「あ、あのー」

広瀬さんが意を決したよつに会長に歩み寄る。

「どうしたの？ 小海ちゃん」

「あ、あの、あの生徒会の件は……」

「入って良いわよ。それと生徒会じゃなくてレジスタンスね
「あ、ありがとうございます!」

またメンバーが増えるのか……。

それにはうする気なんだ? 騎士団。

校舎は会長が弁償するとして……。

第1話 グリーンソーン（前書き）

「けいおん！」のパロディに走りました。

第1話 グリーンゾーン

あの死闘の後、俺ら生徒会改めレジスタンスは、騎士団が使っていた元生徒会室を制圧した。

生徒会室には物置でも何でもない謎の部屋があつた。

枕研はレジスタンスの傘下となり、謎の部屋は枕研の部室になつた。騎士団の連中がどうなつたかは、正直わからない。簡単に諦める奴じやなさそうだけどな。

また何か企んでるのかもしれない。そうだとしたら今度こそレジスタンスは終わりなんじゃないかって思う。

あんなピンチ迎えてや……。

あれから一週間後の月曜、じゃなくて今日は火曜日だ。

放課後、やはり俺は生徒会室へ向かう。

大きな扉を力ずくで押し、部屋に入ると、ソファに会長が座つてガラスのテーブル越しに向かいの誰かと話していた。

向かいのソファに座つているのは一人の女子生徒で、一人は茶色の癖のあるショートボブで左前髪を黄色いヘアピンでとめていて、どこかおつとりしてる子で、もう一人は、前下がりの茶髪でおでこを余すこと無く出していて、頭にヒッピーバンドはめていて、股を開

いて座っている。

誰だろ、う。

「あ、和也」

会長が俺に気づいてわざわざ話を中断して俺の方を向く。

二人の女子生徒も俺の方を見る。

「ここにさは……」

俺は三人に挨拶する。

「ここにさは——」

ヘアピンのバカっぽい奴が返してくれた。

けどもう一匹、失礼、もう一人のヒッピーバンドのデコは少しにやけただけで挨拶をしない。

別にいいんだけどね。

「彼女たちは軽音楽部の子よ。今私に相談しにきてたの」

「凹沢 唯です！ よろしくねー！」

ヘアピンが満面の笑みで自己紹介する。

「土井中 律。 よろしくー！」

「桐生和也です。よろしく、お願ひします」

「桐生和也です。よろしく、お願ひします」

「はい。それより、軽音部がレジスタンスに何の用なんですか？」

「ああ、G-L-T？ 美園主催でライブを開催して欲しいんだって」

「五反田ランチタイム、略してG-L-T。聞いたことない？」

「五反田ランチタイム、略してG-L-T。聞いたことない？」

壁には小泉さんが寄り掛かって読書をしていた。

「」

「つあえず俺は小泉さんに挨拶する。一応先輩だからね。

「和也くん。元気？」

本からは田話をさずに返事を返す小泉さん。

「はい。それより、軽音部がレジスタンスに何の用なんですか？」

「じ、G-L-T……？」

「五反田ランチタイム、略してG-L-T。聞いたことない？」

軽音部

相変わらず本から田を逸らす「スラスラ」と書つ小泉さん。

「ああなんか聞いたことがあります。バンド、ですか？」

「いや、ヒップホップグループ。凹沢 唯、冬山 露、琴吸 紗、
土井中 律、新宿 梓の五人で構成してるね」

「そのG-L-Tって奴が、何で会長なんかに？」

「要は金だね」

なるほどね。

でも会長に頼むつて密ひないんじや……。

そう思つた途端、ドアが開いた。

背後を振り向くと、そこには会長がいた。

「和也、ちょっと一緒に来て」

唐突にそう言って俺の手を引いて連れてこようとする。

「な、なんですか？」

引っ張られながらも訊いてみる。

「軽音部の練習風景を見に行くのよ。そして判断するの」

俺が小泉さんから話を聞いたことを知っていたような感じだ。

さすが会長だ。

斯くして俺は軽音部の部室へ連れていかれる……。

第2話 16歳のカルト（前書き）

はい。作者は「けいおん！」をみたことがありません。

第2話 16歳のカルト

音楽室のような防音壁のスピーカーなどが取り付けてある広々とした部室。天井にはミラー、ボールまでついている。

部屋の奥の窓際に大きな長机が横向き置いてありその上にキサー やターンテーブルなどが置いてあり、部屋には他にも色々な機材が置かれている。

音楽室でやればいいのに。なんて大きな学校なんだ。

その部屋の中心に五人の女子生徒が輪を作つて座つている。

さつきいた凹沢さんと土井中さんもいる。

「あー、会長さんー、それにカズくん」

凹沢さんが俺たちに気づいて立ち上がる。

カズくんだつて。馴れ馴れしい。

「紹介しますー。この子は、PHICCADILLY9ーじ、あずに ゃんです」

凹沢さんがそう言つと、黒髪のツインテールの小柄な女子生徒が「どうも新宿梓です」とへりへりと軽い感じで挨拶する。

「やしてーのは、OHSUMIJIと、むぎわらやん」

すると今度は、金髪の眉毛が無い、いかにもヤンキーな少女が「チヨコース」と挨拶する。

「で、この子は、ミ・エ・オーヒ、澪」

仲悪いのか？ 何故か呼び捨てだ。

前髪パッシュの長い髪のつり目の中年の少女が「ゼリム」と挨拶する。

「Gマークは、りつりゅうがロード、あとは全員ミシなんだ」

「ふ～ん……」

会長が相づりをつる。

するとドアが開き一人の女性が悠々と入ってきた。

「ハ～イみんな元気？」

サンダル、革ジャンにハーティなインナー、ジーンズ……。

「だ、誰？」

思わず声が出てしまう。

「D FLOWER GARDENよ

「ふ～り、フラワーガーデン？」

「やつよ。やわ子先生は巷では有名なクラブの」

会長が説明する。

先生？　この人が？　冗談だろ？

「他の先生には内緒だけね」

さりげなくローラ先生がそう言つたが、色々とおかしい。

こんなツーリングの途中でちゅうつと寄つたみたいな格好の時点で
もつローラ者じやないつて氣づかれてるつて絶対。

「私たちのネームを考えててくれたのもやわ子ちゃんなんだ」

凹沢さんが嬉しそうに言つた。

先生はセンスの無い人なんだなあ……。

「それはやつと、やろそろ本題にいかない？」

会長が壁に寄つ掛かりながら言つた。

「そうでした！　もし良かつたら資金出してくれるんですね？」

「それ以外に私が何か言ったかしら？」

会長のその言葉を最後に凹沢さんは他の部員へ「みんな準備してー」と呼び掛ける。

DJの土井中さんは、ミキサーの前に立ち、他のメンバーはその前でマイクを持つて横一列に並ぶ。

DJ先生は案外気が利いた人で、俺と会長のために椅子を用意してくれた。

俺たちはそれに座つて、確か「五反田ランチタイム」だっけ？ それのシヨーを見学する。

「じゃあまず、メンバー紹介からします！」

わつきしたよ！

「色んな人から、唯はよく転ぶジッ子ね」と言われるんですが、改善したいなあって思いながらも、今朝もまた！ なんとリビングで躓いて転んじゃつたんですよ～！ もう！ ってイライラしながら足に引っ掛けたモノを見てみると、なんと妹だったんですね～。偶然妹も躓いて転んじゃつて、私が転んで倒れていた妹に躓いちゃつたんですね～。血の繋がりつておつそろしい～！ MC BYU Iです～」

凹沢さんが流暢に自己紹介するけど、なに？ 笑点なの？

「こないだ幼馴染みの男の子に久しぶりにあつた時、色々積もる話をしたんですが、私の昔を知ってるソイツはスッピンの方が絶対綺麗だって言うんで、化粧を落として素顔を見せたんですよ。そしたら、ソイツは『いや、スーパーサイヤ人3のモノマネじゃなくてさ～！』っていうんですよ。ソイツとは一度と口利きません！ MC OTSUMUよろしく～」

そういう路線で行くんだな……。

「こいつも、つい汚い言葉をしてしまうんですが、こないだある先生に、澪は才能がある！って言われたんですね。私が『何がですか？』って聞いたら『S嬢』って言つんですよ。危うく大人の歓楽街へ連れていかれそうになつたMC M・I・Oです！」

全くヒドイ話だ。

「私は背が低いから、よく新喜劇の池乃めだかみたいな『あれ梓がいないぞ～？』って扱いを受けるんですね。悔しいから私はこう言つてやつたんですよ。『背が低いとアリがよく見える。アリはあんたらよりずっと働き者ね』ってね。MC PICCADILLY9ですよろじくびつわ」

意味が分からん。

最後はD〜か……。

「ウチみたいに頭が悪くてヒップーバンドをつけてますと、どうしてそのバンドが頭を締め付けてそのせいで頭が回らなくなつてるんじゃないの〜って言われるんですけど、このバンドを外してしまって、脳みそが本来の位置からずれてしまふことも儘ならなくなるんですよ。それじゃあ駄目じゃんD〜 I B A R A G I、よろしく〜！」

四人の後ろで自己紹介する土井中さん。

このメンバー紹介は絶対間違ってる！

しかし会長とロッ先生は微笑みながらショーに釘付けだ。

第3話 眠りたい…（前書き）

謎の急展開に我ながらゾッとした。。。

第3話 眠りたい…

特に耳を傾けて聞くほどでもない笑点風のメンバー紹介が終わり、やつと機器に電源が入り、ミラー・ボールも回り始め、演奏が始まると、雰囲気はヒップホップっぽいけど、ビニカ昔のアイドルっぽいものも混じる。

「一曲目、聞いてください、『オアシスがかれるほど酔わたい』…」
どにか聞き覚えのある曲名だ。

曲が流れ始めると、四人は思い思いに身体を揺らし、踊り始める。

* * *

一曲目が終わつた。

ヒドイ歌詞だ。

特にサビの『絶不調／私の身／胃潰瘍／痛風／急降下／痛い
身体／かかるほど騒ぎ／たい／クラッシュ／寸前／不幸せ／
のゴール 私／だ／け／に classic healing son
g 聽かせて欲しい／の／つて部分。

それに一曲目からヒップホップじゃないし。

俺の思いとは裏腹に拍手する会長とローラー先生。まるでアウェイだ。

「じゃあ一曲田ー。『ダイエット・スペクタクル・イマジネーション?』！」

？の前にまず？を聽かせるべきなんじゃないの？

そういう想ひでいる間に一曲田が始まる。

どこの国に、大音量でロックを流しながら車で暴走する奴が捕まるか、クラシックを聴かせて拷問するやつあったけど、その気分だわまさ!。

* * *

一曲田が終わった。

今度は確かにヒップホップだつたけど、やはり何かが違う。

会長とローラー先生のスタンディングオベーションの脇で苦笑いをする俺はホントに面白味も無い普通な奴だ……。

「援助決定ね！」

会長が親指を立てて五反田ランチタイムのみなさんを見せつける。

「ありがとうございますー！」

凹沢さんが嬉しそうに飛び跳ねる。

ライブを主催してほしいうて用件じゃなかつたのか？

いつの間にかレジスタンスは軽音部のスポンサーにならつとしてゐる。

軽音部も可哀想な奴だ。完全にイメージダウンだらう……。

「じゃあ、私は忙しいから帰るわね。後でキヨンキヨンが書類持つて来ると思つから」

「はいー。」

会長は廊下に出る。俺もそのあとに続く。

「田一とー田一がー離れてるーかーすかにーんー顔デかいーー」

会長が口ずさむ。聞き覚えのある……。

G-L-Tはそんなの歌つてないのに……。

生徒会室につくと、俺はすぐに枕研の部室へ向かった。

なんだかすつじく眠い。

ドアを開けると、相変わらず北乃さんが寝息を立てて眠っていた。

この人が起きてる姿は最近は滅多に見ないな……。

俺は北乃さんの横の少し離れた位置に布団を敷いて、ジャージに着

替えて布団を被り、畳をつむる。

学校で寝るのは実は始めてだ。

いつもは壁に寄りかかってるだけだ。

今日は俺にとって特別な日だ。

畳を閉じてしばらぐ色々と考えてみると、何やらとなりに動く気配を感じた。

いや、気配だけじゃなく音も……。

そして、温かい何かが俺にぶつかり、顔に生暖かい風が吹く。

何かと思い、その方向を見てみると、すぐ畠の前に北乃さんの顔があつた。

なるほどこいつ展開か……。

北乃さんは畠を開じているが、まるで見えていいかのように、手を使い、俺の布団の中へ入ってくる。

俺の常識は覆された。

北乃さんは寝ながら生活する睡眠民族の末裔だ。

「暖かい……」

気持ち良さそうに寝て北乃さん。

もつ起きでしょ？

そう思つた矢先、北乃さんが思いつき抱きついてくる。

今日はよく眠れそうだ……。

ふと、視線を感じた。

目を開けて見ると、会長が不適な笑みを浮かべながら俺を見下ろしていた。

「気持ちは良さそうね……」

やつぱり会長はエイリアンだ。

物音立てず、気配も消して、突然現れる。

そして何より醜くて容赦無い。

「私も混ぜてよ」

何を言い出すのかと思えば……。

俺と北乃さんで布団はパンパンだ。

「布団なら押し入れにありますよ

「生憎、家はベッドなのよね」

「ベッドなり保健室にありますよ」

「運んできてくれないかしら?」

「会長の家柄を活かせば楽チンですよ」

「こりか何だ」の会話。

着地点が全く見えない……。

と思つた瞬間、会長が強引に布団の中に入つてきて、俺に抱きつくる。

誰がこんな展開予想しただろ?

会長は完全に寝よつとしている。

す、すかぴ~。

第4話 ウェンズデーナイトファイバー

俺が起きたとき、部屋にある時計を見たら、時刻は午後7時半だつた。

大分寝たみたいだなあ……。そんなには眠くなかったつもりなんだけど。

ふと氣づけば、北乃さんも会長もない。

俺を置いて先に帰ったのか？ ヒドイ奴らだ。

布団から起き上がり、俺は枕研の部屋を出る。

生徒会室はまだ明るく、ソファ回りにはレジスタンスマンバーが勢揃いしていた。あと軽音部の面子も。

しかも全員パジャマ姿だ。

それじゃ、さつきまで無かつた台の上に置かれたテレビを見ながら、談笑している。

栗山さんと広瀬さんだけが俺に気づいて振り向いた。

なんか近づきがたい。全員女子だし……。

「おまよつ」

横から声がした。

振り向くと、そこにはパジャマ姿の、半開きの眠そうな目を擦る北乃さんがいた。

「おせむ」

俺が挨拶を返すのより早く、北乃さんはまた枕研の部屋へ帰つてしまつた。

『帰つてしまつた』つてのも語弊があるかもしけないが……。

「和也くん、起きたんだ」

小泉さんがやつと俺に気づいてくれた。

ପ୍ରକାଶନି

会長も気づいてくれた。

「和やもおこでよ」

会長が手招きする。

「いや、いいです。俺はそろそろ帰ります」

しかし会長はまるで聞いていないかのよひに手招きをやめない。

俺は仕方なく、会長たちのもとへ行く。

神聖な生徒会室がまるでリビングのよつだ。

笑い声が絶えない。

「和也も、今日は泊まつていきなさい」

会長がやらつとそんなことを言い出す。

「もうみんなお風呂入つてきたのよ？ 和也も入つてきいたら？」

俺が駄目だと返事をする前に、会長が話を進める。

それでみんなパジャマだったのか。パジャマパーティーするなら事前に言っておいて貰いたかった。

そうすれば事前に駄目だつて答えられたのに。

「俺はいいです」

「こ」はハッキリ言つてやらないと逃げられないかもしれない。

「そうね……見張りをつけないとね。誰か和也をお風呂まで見張るウォッチガールはいない？ キヨンキヨンどう？」

会長つて人は……。

「私、お笑い観てる時が一番楽しいんだ」

無理つて意味か？ 遠回しな言い方だな。

「私いきますよー！」

率先して手をあげたのは、何故か凹沢さんだった。

「じゃあ頼んだわよ！ 唯一！」

また一つの間に仲良くなつてゐる。この一人。

「つていうか学校にお風呂なんであるんですか？」

かねてからの疑問だ。

「あるわよ。合宿部の部室にね。合宿部には私から連絡入れておいたから、行けば案内してくれると思うわ」

入れておいたつて。仕事が早い奴だ。

「じゃあ行こうー。和也くん」

凹沢さんが馴れ馴れしく手を差し伸べる。

手を繋がず、俺と凹沢さんは大きな扉を開けて廊下に出る。

そして、合宿部の部室へ向かう。

「やついえば、急に何で泊まる」と云ふ。

俺は歩きながら質問する。

「さわちやんが許可してくれたんだ」

さわちやん？ ああ、あのDJ先生か。

あの人にはそんな特権があるように見えないが。

「でもそれって、大人が見張るからとかそういう理由じゃないの？ 肝心の先生が見えないけど……」

「今日はクラブ」

「それって週末じゃなかつたつけ？」

「ううん。週末はスカラ。シムーンなんだって」

とにかく、DJ先生は教え子の身の危険も顧みず、遊びに行つたってことなんだな。

アイツは教師失格だ。

「私もいつかクラブで踊り明かしたいなあ～」

恍惚と夢を語る凹沢さん。

結構、清純そうな印象だったのに……。

まあ、ヒップホップグループって時点でなんか違かったしね。

……それに、何だよMC BYUIって！

第5話 未知との遭遇（前書き）

北乃さんの知られざる能力が發揮されるかも。 。 。

第5話 未知との遭遇

風呂上がり、凹沢さんは行きだけ同行してくれたんだが、帰りは俺一人で生徒会室まで戻ることになった。

酷い奴だ。

この学校はホントに広い。

そして途中、枕研や合宿部に続く奇妙な部活の名前を見つけた。

『角部』^{かど}、『ウサギ部』、『コスプレ同好会』、『フレンチ部』、『集中力ゲーム部』、『生姜部』、『ピヨニ部』。

普通の部活が無い。

『『『』』』って何だよ！

とにかくにも、俺は暗い校舎を若干警戒しながら生徒会室へたどり着いた。

室内は、電気はついていたものの、人の姿は無かった。

枕研の部屋のドアを開けると、やはりそこに軽音部、生徒会、そして北乃さんたちがいた。

布団もぎっしり並べられて、それ、それトランプや談笑で盛り上がりしている。

まるで修学旅行だ。

「あ、和也！ おかえり～。和也も大富豪やる？」

会長が、トランプからは田を逸らさず、恐らくこの時間に戻つてく
ると最初からわかつていたように俺に話しかける。

「悪いけど、先生に言われたんです。女子の部屋には入るな、って。
守らないと廊下に土下座させられます」

「好きな時にお風呂入れて、好きな時にご飯食べれて、好きな時に
外に出れて、女子が男子を部屋に誘う。まさに理想の修学旅行じゃ
ない？」

言いたいことは分かった。

「大富豪のルール知りませんし……」

「じゃあいいわ」

そう言いつと会長はゲーム一筋に絞つた。

酷い奴だ。

俺は、壁に寄り掛かって座つてゐる、珍しく起きてる北乃さんに歩
み寄る。北乃さんは俺の味方だろう。

「今日も眠そうだね」

変な挨拶をして俺は北乃さんの横に座る。

「……」

「ここのが、北乃さんは喋らない。

「やつこさんは、飯、とかまだ食わないの？ みんな

「もう食べた」

「おつぎりやつりー

「もう食べた、つづく。」

「カズつちが寝てる時に

「なるほど……」

俺はひととこ仲間はずれってわけか。作戦もそうだし。

会長は何のために俺を生徒会へプチ込んだんだ！

会長はどうだ。俺に屈辱を貰えたいんだ。

ふと、北乃さんが俺の肩に寄り掛かる。慰めてくれてるみたいだ。

「マイシは会長以上に人の心を読める。良い意味でね。

会長から厄介だと不気味だと奇妙だと悪賢だと傍若無人だと身長と口数と年齢とその他諸々を除いたら北乃さんになるんだろうな。

北乃さんが地球なら、会長はグリーゼだ。

地球には大地や海や森、そして色々な動物がいるように、北乃さんには真心があるんだよね。これが事実。

でもグリーゼは、地球と似ていて、生物がいるであろう、と言われてるけどホントのところはどうだか。

会長には心は無いんだ。だから俺はグリーゼには生物がないと思うんだ。

「ねえ、北乃さん」

俺は不意に思ったことがあって、北乃さんに話しかける。

「なあに?」

「『宇宙語』って、何?」

実にストレートで、端からすれば意味不明な質問だ。北乃さんが答えてくれるかどうかも闇の中。

「宇宙人と話をする部活」

「え?」

「『宇宙語』っていづのは水星語で、『宇宙語』って意味。ちなみ『アーリ語』だと『グーウアッヅィス』」

「み、ミードー語?」

「裏火星語。火星の南半球の言葉。北半球だと表火星語でススイ語」

意味不明だけど何か面白い。

「ウェス ヴィツヴィ グアスツレス ヴィヴォ ヴァスヴェツヴ
オス」

北乃さんが突然何か言い出す。

「それは？」

「ミドリ語で、『これを温めてください』」

「北乃さんて、火星語が話せるんだ」

「……」

北乃さんが黙りこむ。

「ぐ、くうちゃん？」

俺がそう言つと、北乃さんは電源を入れたように喋り始める。

「私が話せるのは、ミドリ語と、水星のイミウル大陸にあるパルメス共和国つて所のパルメス語だけ。でもピョミ部の人たちは、パルメスのディピピュ 地方の方言とか、火星の今は使われてないクロ語とかアオ語とか、難易度が高い言葉を話せるの」

俺は、持ち前の普通脳で考えた。しかし答えが全く出ない！

「ヴィ　ヴォヴィヴ　ヴォツヴォ　ヴィーヴォン　ヴァツヴィグ」

「そ、それは？　何て言つてるの？」

「ミドリ語で『今日、隣で寝てね』」

「別に良いけど……でもその前に、腹減った。それもかなりね」

ホントに死にそうだ……。

第6話 和也が静止する日

俺は一人、学校付近のコンビニで適当にパンなんかを買って公園のベンチで食べた。

そう、この場所は俺が魅惑のセクシーレーザー」と矢口真依さんでフラれた聖地だ。忌々しい。

俺は自分で思う以上に少食で、パン一個だけで吐きそうになつた。

余分に買った飯は明日のために取つておいた。

俺は生徒会室へ戻る。

枕研の部屋のドアを開けるが、さつきまで賑やかっただのが嘘のように誰もいない。

いるのは北乃さんだけだ。

北乃さんは時間が止まっていたかのようにさつき俺と座つていてここに相変わらず座つていた。

「へいちゃん、みんなは？」

「踊つてる」

「お、踊つてる？」

「ヴィツヴァ ヴィヴヴォ ヴァヴィ

「それは？」

「楽しく踊つてる」

話が進みそうにない。

俺は北乃さんの横に腰を掛けた。

「踊つてる、って？」

「軽音部の部室で踊つてるの。茨城さんが口」

なるほど。どうして俺を仲間に入れたくないんだな。

それに、茨城つてのはきっと土井中さんのことか。

「くつかやんは行かないの？」

「私ダンス苦手だもん」

確かに得意ではなさそうな感じだな。

「ヴィヴヴィ　ヴォヴィ　ヴェッヴェグイツ」

「くつかやんつてさ、どうして火星語が話せるの？」

すると北乃さんは顔を上げて天井を見詰めた。

「火星のヴューノヴィーって国に旅行行った時、街がすっごく綺麗だ

つたの。ミドリ人も、少し粗っぽいところがあるけどイイ人たちなんだ。ゴウちゃんっていう女の子と仲良くなつて、次会う時はミドリ語習得しようとからねつて約束したの」

えらい壮大な話だが、北乃さんは未来人か何かなのか？

考えてみれば俺の周りには普通の奴がないな。

先読みの美園会長、不死身のアメリ、そして北乃さん。なんだかなあ。

「そういえばさ、火星の人間つて、なんかタコみたいな奇妙な形つてイメージがあるんだけど、どうなの？」

ふと長年気になつていたことを思い出して聞いてみると

「ううん。そんなことないよ。ミドリ人は、背が低くて身体が黄緑色で頭が大きいのが特徴」

十分奇妙だよそれ。想像しただけでゾッとした。

「……ちょ、ちょっとトイレ行ってくるよ」

俺は逃げ出すように枕研の部屋を出た。

そして俺が向かったのは、会長たちがいるあたりの軽音部の部室だ。

部室に近づくにつれ、だんだん部屋から漏れた音楽と騒ぎ声が聞こえてくる。

「うとうといでるな」これは、

ドアを開けるのが怖い。

「あんたも来たんだ」

ふと背後から小泉さんの声がした。俺はすぐるよつな気持ちで振り向く。

「大分盛り上がってるみたいですね……」

「なあに言つてんの。パーティーはまだ始まつたばかり！ これからどんどん上げてくんだからー。」

『苦労なこつた。

「和也くんも踊つていきなよ」

やつぱり来るんじゃなかつたな。

「いや、俺は良いです」

「軽音部完全復活のパーティーなんだよ？」

軽音部が今まで沈んでたことすら知らないし。

そう思つた矢先、小泉さんが俺の腕を掴んだ。

「ホントに良いですってー！」

振り払おうとするが、小泉さんの手に思いつきり力が入つていてほ
どけない。

「あんたの言い分なんて誰も聞いてないの！　あんたはただ、自分
のおかれてる状況とこれから未来に素直になればいいの！」

「俺は小泉さんも会長も信用しません！」

すると小泉さんは、俺の腕を掴んだまま、たちの悪いイタズラのよ
うに、足の爪先を俺の内股に掛けると、持ち上げるように足払いを
しゃがつた！

当然のようすに俺は崩れ落ち、倒れ込む。

小泉さんは俺を見下ろすと「美園はあんたが部室前の廊下で転ぶこ
とも予言してたんだよ」とにやけむ。

「会長は予言者なんかじゃない、ペテン師だ！　お前と一緒にだ！」

そう叫んだ俺の姿は、第二者から見れば相当あわただう。

「お前？」

やばい。つい……。

小泉さんが俺を睨む。

さうこじゅがみこんで、俺に近づいてくる。すごい怖い！

何をし出すのかと思えば、小泉さんは指を鳴らした。

その頃は廊下中に響き渡る。

すると廊下の電気が奥から一斉に点灯しあじめる。

気づけば部室から聞こえてきた音漏れも途絶えていた。

「な、何ですかこれは？」

俺がそつと開いた途端、部室のドアが音をたてて開く。
そしてそのままと会長を中心、生徒会の連中、軽音部のメンバーや埃どもが出てくる。

「え？　え？」

俺が一生懸命困惑してみせてくるのに、誰も俺に手を差し伸べたりもしない。

逆にみんな笑顔だ。栗山さんを除いてね。

これから、いつたいどんなショーアが始まるんだ？

第7話 マーキュリー・アタック！（前書き）

よくわからない展開になりました。

第7話 マーキュリー・アタック！

小泉さんは、立ち上がるごと、後ろで俺を見下ろす会長の横に並んだ。
みんなが俺を囲む。

「な、何なんですかこれ！」

しかし誰も答えない。

「和也、あんたは今まで、レジスタンスに何か貢献した？」

突然会長がそんなことを言い出す。

「え？」

それしか言葉が思い付かない。

「あなたには、ロリコンって称号ともう一つ、足枷が必要みたいね」

会長がそう言つた途端、背後に何かを感じた。

案の定、何者かが俺の脇に腕を通して、縛り上げるように持ち上げられ、強制的に立たされた。

「おはよー！」

後ろから聞いた陽気な声は土井中さんなのだ。

そう思つていいたら、会長が俺に歩み寄つてくる。

「こいつ何なんですかこれー！」

しかし、俺の叫び声もむなしく、会長は俺の耳元にグツと顔を近づけてくる。

「ショーンはまだこれか？」

それだけ囁いて、会長は一步下がる。

一瞬の出来事だった。俺は腹に強烈な衝撃を感じた。

そして、意識がどんどん遠退く……。

* * *

俺が覚えてる」と言つたら、最後に会長のパンツが見えたことだけだ。

重たいまぶたを開けると、見えたのは頭上を回るフリーボールと、色鮮やかに照らされる室内。そう、軽音部室だ。

俺は軽音部室の真ん中に倒れていたらしい。

立ち上がりつて何が起つたのか確認しようとしたが、足に何か違和感がある。

足が鎖で繋がっていた。

鎖は床の穴の空いた鉄の突起物に繋がっていた。

前来た時はこんなもんなかつたと思つたが、そりは言つてもこら
れない。

どうやら俺は閉じ込められたようだ。しかもダンスフロアー。

「余韻……」

叫んでみるが、やはり返事が無い。

鎖は短く、歩き回れる範囲も厳しく制限される。

ふと、背後に気配を感じた。

振り向いてみると、そこにいたのは、東董の制服を着た……少女?
だった。

この世のものとは思えない水色の身体、そしてそれより少し濃くて
長い髪、赤い瞳。

まるで異星人だ。

異星人が女座りして俺を見つめてる。怖い。

「あ、あのー」

話しかけてみる。俺も案外恐れ知らずなんだな。

「イチュチュムイリイヌ？」

やはり異星人のようだ。俺とは違つて言語を話す。

でも、俺と一緒に困惑してるのはなんとなくわかる。

さて、どうするこの状況。

俺は足を繋がれて動けないけど、この異星人さんは、普通に動き回れそうだ。

助けを呼んでもらひにしても、言葉が通じないし、第一、常識のようになるが、この異星人をみんなは「存じなのか？」

ここに制服着てるけど、異星人がいるなんて聞いてない。

ダメだ。北乃さんか。部員がいれば……。

「シユペチュキュ　トトモピュイス　ペキサ？」

少女が何かしゃべるが、当然理解できない。

今が何時なのかも知りたい！

まさかとは思うが、また俺を仲間にしてくれにして、みんなで寝てるんじゃないだろうな？

そうだとしたら、俺は見知らぬ異星人エイリアンと一夜を共にするのか？

同じ人間でも気まずいってのに。

「チュー二 チエボミスヌイ トキペニユ スドー シュミルヌナ
ニキチエチョ パルメス キュチヨ ニエフイン コレピト ニユ
ク」

また何か言つてる……って、今『パルメス』って言つた？

じゃあこれは北乃さんが言つてたパルメス語なのか？

てことはこの人、水星人？

「に、日本語、しゃべれないん、ですか？」

「ニエフイン？」

二ホンと発音が似てる。つてことは、もしかして『ニエフイン』が
『日本』つて意味なのか？

「イエース！」

つい英語を言つてしまつた。

「コレヲアタタメテクダサイ」

どうやら通じたようだ。

第8話 クウ2

凹沢さんがこんなことを言っていた。

“私の夢は、二二四七年に火星の殖民地で開催される『第五回マーズフェス』に参加すること”と言っていたが、火星にはもともと人が住んでいて、殖民地だなんて図々しい話なんだ。

不意にそんなことを思った。

「他に二二フュン語は喋れないのかな？」

「チイ グキハ // プ ピコ オーユキ チュモウサーハ」

ダメだ。通じてない。

どうじょつか……。

そうだ携帯！

そう思つてポケットに手を突っ込むが、携帯は無かつた。

しかし代わりに紙切れが入つていた。

紙切れには『和也、あなたは今日、生まれ変わる。あなたは、心の理想という叶わぬ願いのもとに平伏すのです』と意味不明なことが書かれている。

いつたいどういう意味だ？

「ニコプラス！」

水星少女が俺の服の袖を引っ張つてきた。

振り向いて見れば、その少女は俺に一枚の紙を見せてきた。
そこに書かれていたのは、恐らくこの地球には存在しない意味不明な文字だった。

恐らくパルメス語、だと思つ。

「読みませんよ」

そつまつて俺はそっぽを向く。

すると、俺の思ひつつたのは、不自然に床におかれたノートだった。

表紙には、『心のノート』と書かれている。

俺が中学生の時までは使つていたが、たしか廃止されたと聞いた。

なぜこんなとこに？

まてよ……。俺は紙切れをもつ一度見る。

『心の理想といつ叶わぬ願い』。

心のノートについて、なんかすごい綺麗なことが書いてあつたな。

挨拶をしましょうとかね。

でも誰もそういうのって受け入れてないよね。

この紙切れに書かれてる『心の理想という叶わぬ願い』って、心のノートのことのように思えてきた……。

俺はどうも繋しが良こようだ。

「あ、あの~」

俺は水星少女に恐る恐る声をかける。

しかし少女は俺に背を向けていて、ビニカ負のオーラを漂わせていた。

もしかして、拗ねてるのか? タフネスっぽ向いたせいですか?

心のノートに何かヒントがあるかもしれないってのに。

まさに八方塞がりだ。

「ハロー、メルシー、おはよー、サランハヨ~」

ありつたけの言語を水星少女の背中にぶつけでみるが、反応がない。

沈黙のまま、数分がたつた。

もちろん何の進展も無い。

今日は散々だ。

いつたい何なんだこの状況。

もしかして、北乃さんが宇宙語を話したこと、会長の作戦つてことになるのか。

でも北乃さんが話したのはミドリ語とかいう火星語で、パルメス語は一切話さなかつたよな？

あれ？ 確か、この部屋の隣はピヨ ハ部だ。

ここから大声を出せば、ピヨ ハ部員を呼べるかも。でも、この時間にまだ学校にいるなんて考えられないよなあ。

なんだかなあ……。

そう思つた途端、部室のドアが開いた。

そして外から一人の女子生徒が入つてきた。

「はじめましてテリバリーピヨ ハ部です！」

女子生徒が笑顔で俺を見る。

まさか。俺の念が通じたのか？ それにテリバリーピヨ ハ部ついてみたい！

俺がピヨ ハ部員に話かけようとした途端、耳をつぶざくよつな強烈な爆音が室内に轟いた。

胸から血を噴き出しながらくしゃくしゃ倒れるペペ // 部員。

いつたい何が起じたんだ？

ペペ // 部員は倒れてからピクリとも動かない。

「シユヌミチユヌ」

後ろで水星少女の声が何か喋った。

振り向くと、水星少女は立ち上がりついて、片腕をまっすぐ前に伸ばして、ペペ // 部員を見据えていた。

伸ばした手には、銃を持つついて、銃口せむペペ // 部員に向けていた。

まさかここは侵略者なのか……？

第九話 ○○○○○（前書き）

むうすぐオトナノ。。

「 チュプリュイ ケツチュア モスリエルノ テチュプス……」

水星少女はそう言つて腕を下ろし、ピョウ部員へ近き、傍らにしゃがむと、何やら身体を調べ始めた。

水星少女の足に、謎の装置がついている。その装置は、ピョウ部員に近づくにつれ点滅が早くなっていた。

ピョウ部員のスカートのポケットから紙切れを取ると、水星少女はドアを閉め、ピョウ部員の足の両足をつかみ、室内へ引きずり込んだ。

そしてそのまま放置し、銃も投げ捨て、再び俺のもとに戻ってきて、座り込んだ。

「 チュキュ ピオニユイウ ケツチュア スクリューニュウ!!」
…

水星少女は紙切れを読み始めた。

ふと水星少女の足についてる装置の点滅が遅くなつてゐる間に気がついた。

あれつてもしかして……爆弾!? 部室を出ると爆発! みたいな?

だとしたら、この水星少女ももしかして、被害者?

とにかくにも、あの心のノートをどうにかして取らないと……。

あれを取れるのは、水星少女しかいなけれど……コイツはいきなり入ってきた人を射つような暴君だ。

俺も殺されるかもしれん……。

「……」
「どうか何で銃なんか……あの紙に書かれていたのか？」

だとしたらもう一枚の紙には何て書かれてるんだ？

『相部屋のマヌケを殺せ』　なんて書かれてたら……。

俺が考え込んでいると、視線を感じた。

水星少女が物欲しそうに俺を見詰めてくる。

「な、何ですか？」

俺がそう言った途端、水星少女はスッと立ち上がった。

ヤバイと思った俺は無様にも後退りする。

水星少女は、俺の横を通り過ぎ、心のノートを拾ってからまた戻ってきた。

俺にそれを手渡すと、また座り込んだ。

水星人は、人の心を読める人種なのか？

ノートを無造作に捲ると、一枚の紙切れが出てきた。

そこには「彼女の胸には触れるな」と書かれている。『彼女の胸には触れるな』。

どういう意味だ？

女子の胸に触るなってわざわざ言つ必要が……？

まさか、触れろってのか？

変わった形の肝試しだな。

この謎の空間を作り出したのは他でもない会長だ。

あの角質糞女は一体何を企んでるんだ？ 後でファックしてやる！

別にこのまま待つてれば、いずれ助けがくるはずだ。会長は敵が多いからな。

さて、寝るか……。

俺は横になり、完全に寝る体勢に入る。

しかし、水星少女が俺の身体を揺さぶる。

「な、何？」

「キューピ リュクスヌイ ケツチュー ソパアズ ノキュヌ！」

「なんつってんだよそれ！ せめて地球語喋れよ！」

ついムキになってしまった。

「ヴィ！」

水星少女もキレた様子で立ち上がり、ピラミッド販賣へ歩み寄った。

そして傍らに落ちていた銃を拾い、その銃口を俺に向けやがった！

「ストップ！」

俺は両手を精一杯挙げる。

水星少女は俺の脇に来ると、銃を俺のこめかみに突き付けてくる。

ヤバイ！ チビつそ、うだ……。

水星少女は、水色だけど綺麗な足を俺の前につきだし、足首に巻かれた恐らく爆弾であるう裝置を指差して「チュイス ケノミコウア ニユクチュケ ニノム！」と叫ぶ。

『これが何に見える？』とも言ひてるのか？

「お、お洒落なアクセサリーですね……」

すると少女は黙り込む。もう一聲必要か？

「ど、どこのブランドのものですか？」

「キュシュヌ

」

キュシユアヌ？ 聞いたことないブランドだな。水星では流行つて
るのか？

「キュ チョスヌイン ツイノモア ケッキュア！」

「俺の好物はマルゲリータだ！」

「キュス ノクニュイノ ミソノ チュピヌー！」

「ああ！ よく意外だって言われるよー。お前はフランス料理の方
が好きなように見えるつてさー。」

「ケノ ニュキュケソ ビュイス テツイッショウ！」

どうじろひでんだ！

こんなに会長が恋しくなったのは初めてだ……。

あ～眠い。

俺はいつまでこんな牢獄に居なきやいけないんだ……。

水星少女は、銃をピヨミ部員の方へ投げ捨てる、俺に背を向けてしまった。

これが映画「ソウ」の粗末なパロディだとしたら、ビビンヒントを辿つていかないと、何も見えてこないはず……。

今俺が持ってるアイテムは、『彼女の胸には触れるな』って書かれた紙だけ。

俺はもう一度、心のノートを開く。

案の定、もう一枚紙切れが出てきた。

そこにはこう書かれていた。『彼女の股間に触れるな』と。

夜の旧校舎を一人で一周する方がマシだな。

会長が憎い。

我ながら何を思ったのか、俺は水星少女の背中を見つめる。

無意識のうちに身体が水星少女に近づく。

願わくば、自由の身……。

気付いたときには、俺は背後から水星少女の胸を驚撃みにしていた！

案外大きくて、そして柔らかい。

「ちゅーっ！　まつー　さやーーー！」

水星少女が声を上げて背筋を伸ばす。

水星の叫び声は、日本とそつくりなんだなあ。

そう思つてゐ間に俺は、胸の柔らかさに紛れて紙のような感覚を見つけた。

これはブラジャーとは違つだろ？！

さあー！

俺は、水星少女のYシャツの裾から手を入れ、再び胸を触る。

見つけた！　紙だ！

ブラジャーにテープか何かで貼り付けてあるようだ。

「ちよいと失礼するよー！」

俺はそれだけ言つて、紙切れを剥がし取る。

そして紙を見る。

そこには、俺には読めない、宇宙語が書かれていた……。

まさか、これは水星少女用のヒント？

そう思った矢先、俺は頭に巨大な衝撃を感じ、前のめりに倒れ込んだ。
何かと思い振り向くと、立ち上がった水星少女が俺を睨み倒していた。

無理もない。

「チュキス ノミコア！」

そう叫んでから水星少女は、教室の隅までいき、じつしり座ると、
相変わらず俺を睨む。

「あ、あの～。これ！」

俺が、水星少女の胸からむしりとった水星語が書かれた紙切れがあ
ることを知らせようとすると、水星少女は、ふんっ！ とそっぽを
向く。

これも会長の作戦つてやつか？

俺は見知らぬ女子生徒の胸を鷙掴みにした男だ。

俺にできないことなんてない！

「忘れ物ですよ」

俺は水星少女に紙切れを投げ付ける。

水星少女は、それを疑つた様子でゆっくり拾つと、黙読する。

「キュペノニュイ……」

水星少女は、若干イライラした様子で紙切れをスカートのポケットにしまつた。

果たして……次のターゲットは水星少女の股間か……。

胸は水星語が書かれてて、俺的にはハズレ。ならパンツにはちゃんと日本語が書かれてる、はずだ！

セヒビツクル……。

「あ、あのー、パンツに何かついてますよー！」

我ながら良い手段だ。

「チヨピシユー！」

水星少女は俺に向かつて中指を立てる。

言つてることはわからないが、恐らく俺を罵つたんだりつ。

不意に、水星少女は自らのスカートの中に手を突っ込んだ！

何をし出すのかと思えば、恐らくパンツに貼り付けてあつた紙切れ

を剥がして、俺に投げ付けた。

俺は困惑しながらも紙を取る。

温かい。

紙にはこう書かれている。

『極限のあなたが頼れる人物はただ一人です』

これは、果たして……。

第11話 クウ ザ ファイナル（前書き）

第五章完結。。

雑過ぎる終わらせ方、申し訳ない。。。。

第11話 クウザファイナル

俺が頼れる人物？ そりやもちろん弁護士しかいない。

それより俺が水星少女の胸から剥がし取った紙には、『パンツに貼つてある紙を剥がして相部屋のマヌケに投げつけろ』とでも書いてあつたのか？

それにしても、あの立ち振舞い、もしかしたら、胸に紙が貼つてあつたのも、股間に紙が貼つてあつたのも、コイツは分かつてたんじやないのか？

なんて思った。

わざと胸を触らせたのか？

といふことはコイツは痴女か。

もう！ わけがわからない！ 会長の『作戦』は！

「かいちょ～～～～～！」

思わず俺は声を漏らす。

すると水星少女がビクンと反応する。

大きな物音がした後、俺は天井を見た。

天井無くなってる！？

そつ思つた途端、部室の壁が花が開くように外側に倒れた！

見えたのは、満点の星空、そして巨大なクレーン車……。これは、校庭？

すると、水星少女が「もつー 美園のバカつー」と部室（？）を出る。

水星少女に銃で射たれて死んだはずのピョコ部員も、「案外、血糊の量多いっすねー！」と立ち上がり、それくわと部室（？）を出る。

「気分はどう?」

会長が俺に微笑みかける。

会長以外にも、小泉さんや栗山さんなどレジスタンスマンバーや、軽音部員、そして北乃さんが俺を囲んでいた。

「和也ー！」会長が突然叫ぶ。

「一体、なんですかこれ？」

「見ての通り、あんたが軽音部室だと思つていたこの場所はハリボテよ。金にモノを言わせて作つたの。校庭のド真ん中にね。良い出来でしょ？ ウン百万掛かつたんだからつ

嬉しそうに話す会長。

「……今回、一体、なんていう下らない作戦なんですか？」

「私がしたことは金を出しただけ。あとは全部くわいちゃんが考えた企画よ?」

北乃さんが？

「くわいちゃんってばす」「くわえてるのよ。あんたとは大違イネ！」

「目的はなんなんですか？」

「あんたがどれだけ普通でバカで、無駄に勘が働くかを調べるテスト、所謂ドッキリよ！」

食い気味に会長が叫ぶ。

とんだ爆弾コントだ！

「！」の意味不明さのどじが冴えてるひといふんですか？

「全部よー。」

即答だった。

「あの水星人も金にモノを言わせて作った特殊メイクですか？」

「水星人？ ああ、シユナちゃんのこと？ 彼女は火星人よ」

会長がそつと言うと、そつきの水星少女が俺に近づいてきた。

「初めまして… セツキは殴ってすみません。私、須藤シユミルヌ

ナと言います「

胸を触つた直後だといふのにこの丁寧な態度……。

「シユナちゃんは我が校唯一の異星人なのよ」

聞いたことない！

異星人が存在するってのも、さつき知つたばっかなのに！

まさかこんな身近に異星人がいるだなんて！

信じがたい。

「」のドッキリは、一体何のために「

「分かつたでしょ？」「会長がまた食い気味にしゃべる。「極限で無力なあなたにとって、私がどれだけ大事な存在か！」

「」、誤解だ！』

このクソみみたいなドッキリの首謀者が会長だと悟つたから、俺は会長に止めさせるように」と念を込めて叫んだだけだ！

「素直になりなさい……」

認めたくないものだな……。

第1話 桐生和也と嵐のプロセス

風ふふふん、今は夏。

昼休み、俺は廊下を我が物顔で歩きながら口ずさむ。

そう、今は夏。七月十日だ。もうすぐ夏休み。

春の騎士団との死闘以来、騎士団は妙に静かで、その姿を見かけることも少なくなった。

嵐の前の静けさ、なんて言葉がぴたり当てはまりそうだ。

だがその前に、困ったことがもう一つあったんだ……。

それは先月から始まつたことなんだ……。

「和也」「和也」「和也」

尊をすれば……。背後からヤツの声が聞こえる！

俺はあえてダルそうにゆっくり振り向く。

すると背後にヤツの姿はなかつた。

「ビームてんの？」

背後、つまり、俺が元々向いてた方から声がする。

振り返ればヤツがいた。

「一曰ぶり！ 和也！ 今日はなんで待つてくれなかつたの？ ちよつと酷くない？ 何で？ 何？ 何を企んでるの？ あの美園つてヤツのせい？」

流暢に喋るツインテール、つり田の女子生徒は、東京都あだ名は「ロンドン」「イングランド」。

いじりキャラの強がりキャラだ。

俺は「ローマ」と呼んでいる。

「ねえ和也！」

「悪い。今日はお前の声が聞こえない日なんだ」

「昨日は私の声があんたには理解できない言語に聞こえる日、一昨日は日本語を使っちゃいけない日……。それってどう思つ？」

腕を組ながら見下した態度で俺に一ロリ叩きつづく。

もちろん答えなど出わさずに俺はその場から立ち去る。

「ど二行ぐ氣？ 生徒会室？ みんながあそこを何て呼んでるか知つてゐ？ 不毛地帯よ。美園、コケ娘、ストーカー女、裏切り者の風紀委員長、あればぜーんぶ偽物の幻なんだからつー」

何か叫んでるが、気にせず俺は突き当たりを曲がる。

アイツと出会ったのはさつきも言つたが六月の初旬。

無理矢理参加させられた町内を清掃するところ名田のボランティアでの話だ。

俺が誰から見てもダルそうな様子で茂みでゴミを漁つていたら、ゴミ袋を持った一人の女子が俺を見つけるやいなや、猛スピードで走り寄ってきた。それがアイツ、都だった。

アイツは「きなり」「アンタ、私ん家の玄関の前にある岩に似てるわね。私あの岩って大嫌いなの。そのダルそうな顔どうにかしてくれない?」と俺の胸に指を押し当てて睨んできた。

入学当初に会長と出会った時以来の衝撃だった。

都と会つ前日、会長がこんなことを言つていた。

“いい? もし明日、変なビッチに会つたりしたら、そいつにこう言つてやりなさい。「そのバカ短いスカートからチラチラ見えてるボーダーパンツが色褪せるぐらい凌辱してやるからさつさとパンツを脱ぎやがれ!」って。きっと恐れをなして逃げ出すわ!”

それを言おつか、考えたが、生憎俺にはそんな勇気が無い。

だから俺は「御晚でござります」と言つてその場を立ち去つた。

だけど、俺は都に足を引っ掛けられて転んだ。

起き上がろうとしたらアイツは立ち去った。

その次の日、彰造が一年A組の転校生がヤバイと騒いでいた。

俺は別に興味は無かつたが、無理矢理連れていかれた。

A組の人ばかりの中にいた退屈そうに腕を組んだ人物、そいつが都だった。

都は俺を見つけるやいなや、「おはよう—ニューヨーク!」とパッと笑顔になつて俺に歩み寄ってきた。

気が付けばアイツが俺の友人リストに勝手に名前を書いたんだ。

何がきつかけかもわからない。

だけど、会長は絶対に何がどうなつてゐるのか分かつてゐはず。

でも、この一ヶ月、ずっと口を閉ざして話そつとしない。

なんだかなあ……。

第2話 火星の女

渚のふふふふ～んで待つてて～。

放課後、俺は歌を口ずさみながら生徒会室へ向かった。

「会長！ ちょっと聞きたいことがあるんですけど」

ソファーで覗ぐ会長に单刀直入に聞く。

「ロンドンのことならハーモメントよ」

相変わらずの即答。

「いいえ、会長のことです」

「何よ

「都とは一体どういう関係なんですか？」

「しつこい奴ね。くつちやんが待ってるわよ。そつそと寝ちゃいやいな
やいこむ」

今日は、俺も引き下がる分けにはいかない。

もうアイツには耐えられない！

「わかったわよ。あの子は私の義妹。あの子が実の子で私は里子。
これで満足？」

さつすが会長。でも疑問が……。

「都は何で転校して来たんですか?」

「お嬢様学校に飽き飽きしたのよ。私とおんなじ」

会長も転校生なんだ……。

それはわざわざ……。

「つまり、都は会長の弱点つてわけですね?」

会長にしては詰めが甘い。弱点をポロリするなんて。

「何でそうなるのよ」

「だって、会長は俺と同じ孤児院出身。どこにいっても、都是あそこ
の実の子なんじゃないですか? 会長も都には頭が上がらなかつた
りして……」

「和也つてホントバカ。あの子が私の顔を殴つたら、私はあの子の
顎を蹴り上げるわ。ただの姉妹喧嘩として処理されるだけよ」

やつらひと会長は立ち上がり、それくこと生徒会室を後にした。

あれは図星と見ていいのか?

俺は一つ溜め息を吐いて、枕研の部屋へ向かつ。

ドアを開けると、くつかやさんがやはり部屋の真ん中に布団を敷いて熟睡していた。

壁にはやはり小泉さんが本を読みながら寄りかかっている。

放課後は」の光景がもう当たり前になった。

「ねえ小泉さん。会長の弱味、知りたくないですか？」

俺が話しかけると、いつもみたく本を読みながら返事するのかと思えば、今日は本を置いて俺に注目した。

「どうやら戻るなりしき。

だから俺は続ける。「あの付け入る隙もない軍艦女にも、とうきやんじょ 東京とうきょう 都みやこ とこうがの弱点があるんです。」

「あんた死にたいの？」

とんだ返事だ。

「それって」

「美園は都のことが大好き。これ常識」

「やつですか？ そんな風には見えないけど……」

「先輩に口答えしないの。先輩がそいつて言つたらそつなの」

予想外の反応だ。

なんかテンション下がる。

「あんたも都とは仲良くしといた方が良いよ。後々良いことがあるかもね」

「それは難しいです」

俺は適当に返事をし、部屋の隅に置んであつた布団をくつちやんの横まで持ってきて、制服のまま広げた布団に横になり寝る体勢に入る。

「あ、そうだ忘れてた。シユナちゃんが呼んでたよ。図書室で待つてるってさ。行つてやんなよ」

「なんで寝よつとした時に言つたですか……」

「聞こえたでしょ？ 忘れてたの」

あの火星少女が俺に一体何の用だ。

俺は起き上がり、図書室へ向かうべく、枕研の部屋を出る。

生徒会室では、ソファード栗山さんと浜田さんと広瀬さんが談笑していた。

この二人は仲が良い。

俺は「どうも」とだけ挨拶して通り過ぎ、生徒会室を出る。

第3話 ミコオンダラー・シスターズ

ふふふ～んの岸辺に咲～いた～ふふふ～んスイートピー。

俺は歌を口ずさみながら図書室のドアを開ける。

室内には生徒の姿はなく。

居たのは部屋の隅で本を立ち読みしている俺がずっと水星人だと誤解していた火星人のシユナこと須藤シユミルヌナさんだ。

「あの～」

恐る恐る声を掛けると、シユナさんは「あ、和也くん」と反応して本を閉じて俺を見る。

「小泉さんに言われて来たんですけど」

「わ～わ～。浜田さんが生徒会室で待ってるわ～よ」

「え？」

「せっせと来て。だって」

何だそれ。

半ば追い出されるようなかたちで、俺は図書室を出た。

少しイライラしながら俺は生徒会室に戻る。

室内のソファーで相変わらず三人が談笑していた。

その内の一人、そう、浜田さんにターゲットを絞り、話しかける。

「あの～浜田さん」

「ああ、桐生くん。美園が呼んでたわよ。新聞部で待ってるって」

おい、嘘だろ。

なんだそれ。

「ど、どいつも……」

悪いのは浜田さんじゃない。きっと会長だ。

そう自分に言い聞かせながら、俺は生徒会室を後にし、怒りを抑えながら部室棟にある新聞部室へ向かう。

部室棟の一階にある、元枕研部室と元生徒会室は先の死闘で崩壊し、立ち入りを禁止されている。

この学校は案外貧乏なのか、『キケン！ 立ち入り禁止！』と書かれた粗末なテープで仕切られていて、修復工事をする気配がまるで無い。

まるで記念にのこしてゐみたいだ。惡々しい。

新聞部室のドアを開けると、会長と小泉さんが香氣にテーブルでお茶を飲んでいた。

テーブルを引っくり返してやろうとしたが、会長のことだ、何か裏があつての三度手間なんだろう……。

「会長！」

俺が叫ぶと会長はお茶を引っくり返しながら大慌てで俺まで駆け寄り、俺の口を抑えて強引に室内に引き込んだ。

これはきっと、騎士団絡み……だな。

「あんたってホント

どうしようもない尻六野郎ね」

「会長がちゃんと説明しないからですよー。今回は何なんですかー。」

「まあ座んなさいよ」

そつと言われて俺が席につくと、会長は向かいの席に座った。

お茶はどうやら小泉さんが拭いてくれてたみたいだ。

「あんたって、二ノマークのこと、好き?」

「二ノマークって」

「都のことよ」

ああ、アイツか。

「――ヨークって、俺が都から呼ばれてるあだ名なんですね。
俺は都をローマって呼んでますが」

「つるさい野郎ね。私の質問聞いてた?」

「はい、大嫌いです」

「何で?」

「何で? 何でって言われてもなあ……」

「まあ答えなくて良いわ。それより、今後何があつても、あの子のこと、好きにならないうち誓つて」

会長はいつも急だ。

「何があつても?」

「だからもう言つたりしない」

会長からの電話は、ワンコールで出ないと、ちょっと不機嫌そうになる、って最近気づいた。

「『何があつても』、の『何』が気になるんですよ。」

「口答えする気?」

会長は立ち上がり、俺を指差す

「そう言つてゐつもりですが？」

「はあ～……」

会長は崩れ落ちるように椅子に座り溜め息をつく。

会長の弱点って、都じゃなくつて、口答えだつたりするのかな。

「和也くん。私がさつき書いたこと、覚えてる?」

俺と会長の不毛な言い合いを見かねたのか小泉さんが割つて入る。

「すみません、覚えてないです……」

「じゃあ、もう一回言つからよく聞くでよ。美園は、都のことが大好きなの」

「つまり……レズつてことですか?」

「そういうことじやないわよ!」

会長がテーブルを叩く。

それにしても、この二人にしては随分回りくどいな……。

第4話 近い夏の匂ひ

キッス イン ブルー ふうんふうん もつと遠くへ。

人目も憚ららず口づさみながら俺は部室棟を後にし渡り廊下を歩く。

実はそんなに乗じ気じゃない。

会長から命じられた今回の任務が原因だ。

なんでも、あの都が俺のことを好きなんだといつ。

そして、都は明日、俺に告白するんだと。

これは都の義姉である会長が本人から得た確りした情報らしい。

それで、告白を断らばず、都と付き合つて欲しいんだと。

俺が何故かと聞くと、会長はこう答えた。

“ あの子、楽しそう ”

会長は人にわかるように説明するのが苦手らしい。

だけど、会長には出来る秘書がいる。

そり、小泉今日歌、通称キヨンキヨン。

俺は小泉さんと呼んでくる。

小泉さんは会長と似て性格はひねくれてるが、言つた通り出来る女だ。

小泉さんの補足によれば、都が前に通つてた聖ソドム女学院つていう学校では、あんなお嬢様がうじやうじや居て、都はその中でも目立たず、いじめられていたらしい。

それでここに転校してきたことで、一転して人気者になった。

その姿を見た会長は泣いて喜んだんだとか。

それで、都は「こんな」とを言い出した。“私、恋がしたい！”と。

婚カツをするようなモチベーションで参加したボランティアで偶然俺に出会い、なんと一目惚れしたらしい。

嬉しいがなんだか複雑だ。

くわいちゃんや矢口さんのが「ともあるし……」。

都のためにも、付き合つて欲しいと。

そして、醜態を晒して欲しいとも言つてた。

それは都が俺を諦めるようにだとこいつ。

理由は教えてくれなかつた。

めんどくさいが断つたらタマを一つ教会に寄付という謎の脅迫を受

け、今俺は平凡を装つてゐる最中だ。

元々平凡なんだけどね。

生徒会室へ行くとあの三人の姿は無かつた。

枕研の部屋をそつと覗くと、あの三人が香氣に布団を並べて寝ていた。

無警戒な奴らだ。

どうなつても知らんで。

俺は一人、ひつそりと学校を抜け出し帰路につく。

そうだ。

もうすぐ夏休みか……。

夏休みはいつも幼馴染みのアイツが泊まりに来るつて決まつてゐる
だよなあ……。

一ヶ月間ずっとだよ。

俺の夏休みは、鎌でギッヂギチに縛られた拷問部屋での日々なんだ。

そんな拷問部屋に、ブチ込んでおいてアイツは“青春を謳歌しよう”
”とハイテンションで俺に言い寄つてくるんだ。

俺はアイツが鬼に見える。

まあ今は、アイツより都だ。

俺はずっとバカだった。会長の言つ通りね。

見落としていたんだ。

会長の名前は、今田美園。

そんでその義妹の東京都。

名字が違う！

何故俺は気づかなかつたんだ。

明日会長に聞いてみよつ……。

アイツより都より、まず最初に俺がやらねばならないことは、妹の
世話をだ。

今日は遠回りして帰るつ。

第5話 はじめて いつでもいいから

ああ～私のふんふふ～ん、南の～風にのってふんふふ～ん。

昼休み俺が歌を口ずさみながら廊下を我が物顔で歩いていると、背後から「和也！」「ラ和也！」と都の声がする。

いつもは無視するが、今日は振り向いてやつた。

「あら、珍しいわね」

都が驚いた顔をする。

「都は知らないだろ？ナビ俺は」「

「それより私は今日、あなたに言いたいことがあって呼び止めたのよ。」

ジョークぐりぐり最後まで言わせてくれよ……。

「言いたいこと？」

「これを読みなさい。」

そう言って都是スカートのポケットから手紙を取り出すと、俺の胸に押し付ける。

そして「いい？ 絶対に読むのよ。じゃないと退学よ。それどころか国外追放よ。」と念をおす。

俺が手紙を受け取るやいなや、都は颯爽とその場を立ち去った。

「アイツは確か、言いたいことがある、と言っていた。」

まさか、この手紙のことか？

なんて滅茶苦茶な女なんだ。

俺がこいつと付き合わなきゃいけない？

会長のために？

なんだかなあ……。

俺はその場で手紙を開けた。

『放かご、体く館うらで待つてまふ』

なんて稚拙な文字なんだ。誤字も酷い。

他人に見せる字じゃない。

記者が手帳に自分だけが分かるような字で書く奴だよこれじゃ。

でも、これはいい素材だ。

これを皮肉つて、会長が言つたように都から嫌われてやう。

放課後、俺は彰造の誘いを振り切つて、俺は体育館裏へ向かった。

どんな用件かはもうろん知つてゐる。めんどくさいことも。

体育館裏をそつと覗いてみると、珍しく緊張してゐるか浮かない顔の都がいた。

「こなは俺もまだ居をしておいた方がいいのかな？」

俺はわざとじりじりおずおずと都の前に出でる。

俺が、何か用？ と尋ねるより前に、俺を見つけるなり都は「来たわね！」と俺を指差す。

会長の奴、決闘と告白を間違えたんじやないだろうな……。

「せっかくの女子からの呼び出しなんで

「よく叫づわー。」

「つるとい女だな。

「あんなバカみたいな字で書いた手紙で俺をこんな所に呼び出したり、一体何の用？」

小泉さんの話だと、体育館裏は学校でも唯一の危険地帯らしい。

理由はいつもの感じで教えてくれなかつたけど。

「私はタイプングは得意でもペンは苦手なのー。」

「それよつ早く用件を書ひてよ」

俺がそつまつと、都は一瞬だけ下を向いた。

顔を上げ、キリッと俺の目を見て、そして指をわす。

「あんた、騎士団に入りなさいー。」

第6話 ミンホ・ピッヂ2

ムーンライト　ふ～ふんつ　私のことを　ふんふんふんふんふん
ふふふ～　三田円の夜～。

気が動転して思わず歌い出しそうになつた。

「ああ～　どうなの～！」

都が叫んだ途端、背後から物音がして振り返ろうとしたが、都の背後の茂みから何者かが飛び出した。

あれは、松田さん！？

松田さんが、物凄い形相で俺に向かつてくる！

「和也くん！」

背後から小泉さんの声がした。

振り返ると、小泉さんも猛スピードで突進してくる。

だけど松田さんも小泉さんも、俺に向かつてきてるわけではないようだ。

路線が合っていない。

と思つた次の瞬間、松田さんが小泉さんを蹴り飛ばした！

小泉さんは当然のよつこ「あやあー」と女々しい声を上げて吹っ飛ぶ。

それを見届ける猶予も『えず、俺は何者かに押さえつけられた！

首を捻つて確認すると、俺を押さえていたのは都だった！

まさか、俺はまた、騙されて生徒会レジスタンスと騎士団の対決に巻き込まれていたのか！？

「気分はどう？」

松田さんが嫌味をタレる。

「ワクワクしますよ……会長が助けに来て、お前らを一蹴するのを想像すると…」

「口だけは達者なんだね。今すぐにでもその戯言で汚れたアルを開けなくしてやってもいいけど、生憎、許可が出てないからね」

「……俺を捕まえて、どうしようつてんだ！」

「もう、簡単な話。あんたが騎士団に入ればいいの…」

松田さんは不適に笑いながら俺を指差す。

俺は昨日のことを思い返す。

あの三度手間は、恐らく騎士団のスパイを遠ざけるための手段だつたらどううけど、いつなつたつてことは、完全にアレは意味無かつ

たよね？

会長は完全に騙されていたんだ。

都は、元々騎士団と手を組んでた。

俺は知つてたのに！ アイツは反生徒会だつてことは。

何故、会長にはその情報が行き渡つてなかつたんだ！

アイツは会長の奥の奥にある良心を利用した最低な奴だ！

「騎士団には入りませんよ」

「入つた方が良いことあるの？……」

都が俺を押さえつけながら叫びつ。

「俺は反騎士団だ！ 無理矢理入れたつて、すぐに反逆して中から壊してやるー！」

俺が叫ぶと、松田さんはしゃがみこんで俺を見下ろす。

「あんた一人の力で何が出来るの？」

「お前を犯して、ダメにする」とぐらにはできない。」

俺は叫ぶと同時に、都を振り払つて立ち上がる。

すると、何を思ったのか、一人とも俺から離れる。

「俺が怖いか！」

調子に乗つて叫んだ直後だつた！

上から大量の水が降つてきた。

水が止んだと思ったら、頭に衝撃を感じる。

頭に何かが落ちてきた。

俺は跪いて、頭をおさえて、落ちてきたものを確認する。

これは……タライ？

「はこひへ

この壺は……会長？

俺が顔を上げると、田の前にはムカつく笑顔の会長がいた。

「和也によくやったわね」

「会長……何なんですかこれ」

「決まつてゐるじゃない。ドッキリよ

ドッキリ？」

その言葉、前にも聞いた。

四月だ。

俺が火星人と一緒に軽音部室風ドッキリハウスに閉じ込められたあの日だ。

「松田さんは、騎士団の人なんじや……」

「全く、彼女の顔、ちゃんとじっくり見た?」

「え?」

俺は松田さんの顔をよーく確認する。

「ひ、広瀬さん!?

「あつた〜」

松田さん風広瀬さんが小さく手を振る。

「特殊メイクよ」

また金を無駄遣いしたのか。このビッチは……。

察しの良いはずの会長なのに、今日ばかりは俺の思いなんて理解せずベラベラと語りだす。

「普通に体育館裏に呼んだんじや、つまらないから、あえて色々手段を踏んだのよ。あんたに無駄な想像をさせるためには。それがどういう意味かわかる? あんたが一回目のドッキリから何も学んで

なにつてことが露になつたのよー」

会長は俺を指差して睨み付ける。

畜生。

会長は一体、俺をじうじしたいんだ！

第1話 52週後 . . . (前書き)

書いてて途中からめんどくせくなつたので、次話からまた書か
りに書きます……。

真夏だと重いのと、ベッドの隅に踞つて布団を巻き付けるように被つているのは、臆病なダックスフンドでも、不細工なマトリョーシカでもない。俺だ。別に寒いわけじゃない。むしろドロドロに溶けてしまいそうなぐらい暑苦しい。汗が滲んで居心地も悪い。長袖のパジャマ上下もびしょ濡れだ。今すぐにでもこの場を飛び出して、隣町の区民プールで翌朝まで泳ぎ明かしたい気分だ。しかしどきない。そんなのハリネズミを「よ～ちよち～」って抱きかかえて舐め回すようなもんだ。つまり、俺は今、そんな雑な無茶振りと罰ゲーム、どちらかしか選べないというものすごいパンチな状況なんだ。

冷房も扇風機もついていない、窓も全閉したサウナのような部屋でガクガクブルブル震えていると、下の階から微かなインターほんの音が耳を掠めた。教師に注意された時みたく、俺の身体が止まる。同時に「はーい」と母さんの声がインターほんよりも小さな声で響く。母さんは予言者だ。誰が来るか完全に知っていた上でモニターを見ることがなく玄関に向かつたらしい。玄関のドアが開く音の後、俺には確かに聞こえた高い声で「こんにちは～」と。ただの「こんにちは」じゃない。これはアイツ(・・・)の「こんにちは」「だ。俺には鬼の唸り声にしか聞こえない。

アイツ(・・・)が階段を上る足音が聞こえる。徐々に近づいてくる足音に、俺の身体はちゃんと押されたように震えを再開する。差し詰め、いや、毎年そうだから、絶対、俺の夏休みはアイツ(・・・)に持つていかかるんだろう……。

ドアの向いから「おっはよ～カズちゃん!」と大きな声が聞こえ

たが、鍵を閉めたドアは開かない。汚ならしい舌打ちを一発鳴らして、ガチャガチャと開かないドアを力ずくで壊してまで開けようとするその精神は、とても女子とは思えない。しかし、すぐにその騒音は鳴り止んだ。これは毎年、もう恒例になつたお約束の、陳腐なワンコーナーみたいなもんだ。名付けるなら「新島歩莉の！ ドアをブツ壊せ！」かな。一度としてドアを壊したことなんてないけどね。俺はその次がどんなコーナーかも、もちろん知っている。また、歩莉の冠付きコーナーだ。名付けるなら、こうだな。「新島歩莉の！ 十円玉でGO！」

ドアが開き、アイツ（・・・）、歩莉がのこのこと室内に入ってきた。首元まで伸びた前下がりの黒い髪、幼さをずっと引きずつてゐるようなあどけない顔立ち、大きな瞳。口元を緩め、見せびらかすよううに十円玉を摘まんで頬に近づけてウイーンクして、俺に星を飛ばす。「だからさあ、鍵閉めたって無駄だつて、いつも言つてるじゃん」。

部屋の電気をパチンとつけ、みつともない俺の姿を数秒間、訝しげに凝視すると、「暑いー！」と部屋の中央にある四角いテーブルの上から慣れたよに冷房のリモコンを取り、電源を入れた。

「何その格好！？ 減量でもしてゐの？」歩莉が鼻を鳴らす。「ねえ死んじゃうよ？」。

歩莉は前屈みになり、前髪を揺らしながら心配そうに俺を見る。俺も頑固な男だ。聞こえない振りを貫くべく、目を閉じる。すると、振動を感じた。どうやら歩莉がベッドに上がり込んできたようだ。布団から間接的に、歩莉が布団をぎゅっと握つたのがわかつた。引つ張り、俺から布団を剥がそうとするが、もちろん俺も力を入れ、布団の引っ張り合いになつた。

「ちゅうとー、いつまで」んな」とこての『』。」

歩莉の馬鹿力で、布団が剥がれた。すると、冷房の風で一気に身体が冷える。「寒い！」と思わず声が漏れた。

「やれば出来るじゃない」

自分を褒めているのか、はたまた俺をバカにしてるのか、曖昧な表現で歩莉が呟く。汗臭い布団を丸めて、俺とは対角の隅に置くと、滑り込むように直ちに俺の横に座る。

「五十一週間ぶりー」歩莉が笑顔で俺の顔を覗き込んでくる。「元気してた？」。

「五十一週間？ 今年は閏年で、去年お前が来たのは八月二二日。そんで今年は七月十九日」

「もひ、細かいなあ、私そういうの大っ嫌いー！」

「俺としては光栄だ」

「そんな」と言つてー。ホントは嬉しいんでしょう？ 歩莉が憎たらしく俺に身体を寄せ、強引に肩を組んでくる。

「嬉しそうに見えた？」

「それでさー、桐乃むちゃん、どう？」

歩莉はいつも急に話を変える。幼い頃からずっとだ。「プーさんつ

「てね～」って話しかけたかと思つと、数秒後には「キリンの角つて何なの？」って急に車線変更する。全く危険極まりない。それに歩莉の「桐乃ちゃん」は、憎しみを込めた呼び方に聞こえて仕方ない。実際、一人は仲悪いし……。

「アイ キヤン ドゥ ベター！」歩莉が突然なんか叫ぶ。「私が好きな言葉だよ」

俺はとつぐに急な話題変更には慣れてるから平然と返事を返してやる。「なんて意味？ 私はベタな人間ですって？」

「違う違う！ 簡単に言つと……まあ、あんたはバカ、私はあんたみたいな結石野郎よりずう～っと出来る子よ！ 分かったんならわざわざその雑菌まみれの布団を干してきなさいマイク。的な？」

「愉快な翻訳だな。お前と英語の授業を受けたら退屈しないよ……」

俺はわざとらしい溜め息をつきながら、窓の上に掛けてある時計に視線を向ける。午前九時五分、まだ起きて一時間も経つてない。まだ飯も食つてないし。

「ねえ、アメリちゃんにはもう会つた？」歩莉が俺のパジャマの裾を引っ張る。

「会つたよ。アメリはお前より可愛くて、優秀だ。アメリがお前に会つたら言つてくれつて。アイ キヤン ドゥ ベターつて」

「私は、アイ キヤン ドゥ ベターよりも、ワット ザ ヘルとかキープ ホールディング オンとかの方が好きかな～」

「何の話？」

「アーチーは何の話？」

頭が混線して爆発しそうだ。歩莉と絡む時は、いつも体力を使う。

第1話　　52週後・・・(後書き)

52部目で「52週後・・・」つてタイトルは偶然です。

第2話 アコリ・ハイジマ

歩莉はキャッチボールをする時、いつも顔を横に振つたり縦に振つたりする。

恐らく野球のピッチャーの真似をしてるんだろう。

キャッチャーもいなればバッターもない、それ以前に野球でもない。

つまり「ひこひ」とだ、歩莉さんはバカなんだ。

「ピッチャー大きく振りかぶつて」

自分でそんなことを言いながら歩莉が振りかぶった。

生憎、投げたボールはコントロールの「の字も無く大きく軌道を逸らし、俺ん家の屋根にすつ飛んだ。

俄然、歩莉が「取つてこい！」と叫ぶ。

自分で投げとこて、凶々しい奴だ。

「取つて來ても良こけど、それじゃお前のためにも、ボールのためにもならない」

俺が無造作にしゃりしゃりと、歩莉はすかさず食い付く。「それってどうこつ意味？」

訝しげな歩莉の顔は実に滑稽で笑える。だから俺はさうに不毛な煙に雑草の種を蒔く。

「あれはボール自ら、お前の元を離れていつたんだ。アイツは反抗期なんだよ。わかるだろ？ その気持ち。夏休みを悪用して家出をするお前には痛いほど」

俺の意味不明な言葉に歩莉は当たり前のように首を傾げる。

「つまり、どうすればいいの？」

「そうだな、ボールが帰ってくるのを待つ……ってのも一つの」

俺が話を終えるのよりも先に、歩莉は家に戻りはじめていた。

今回は歩莉に救われた。

不毛な畑にカラスを放つたってどうにもならないからな。

部屋に戻ると、桐乃が一人、お菓子を食べながらテレビゲームをしながら窓いでのいた。

「お兄ちゃん、風神の唄ってどうやんの？」

俺が入ってきたのを雰囲気で悟った桐乃は、視線をこっちに向けることなく言った。

「上、上、下、右、左、右」

「なるほど」

桐乃は礼も無く無愛想に返事をして、俺の言つたコマンドを入力する。

「やうだ、風の神殿終わった後、トライフォースの欠片探さなきや
いけないのか……。その前にマップ探して、高い金払つて解読……。
本編のシナリオの癖にやけにサブイベント染みてんなあ……」

桐乃がまるでオッサンのように染々と呟く。

歩莉は「平和だね」と言しながらベッドに腰を下ろす。

すると桐乃はすかさず「あなたの頭ほどでは無いけどね」と皮肉る。

俺は「」の一人を同じ空間にいる」の状況が大嫌いなんだ。

二年前は取つ組み合いの喧嘩にまで発展したことがある。

「お兄ちゃん知ってる? 神殿の前のあのタコみたいな岩、ヘビイ
ブーツが無くとも壊せるんだよ。でも結局、神殿内でヘビイブーツ
使つから何の意味もない裏技だよね。歩莉みたい」

「おーおい、」いつはいつの間にか、煽つて血ち喧嘩を催促すること
を覚えてやがったのか。

迷惑な話だ。

「次から悪口とか皮肉一回につき千円頂戴するから。お前らのため
の税金だ。名付けて、アホバカ税」

「お前らつてこののは撤回して欲しいな。だって、私は悪口なんて一回も言つてないし」

歩莉が寝転がりながら手を上げて主張する。

「勝手にしてくれ」

第3話 ダーティミソノ

「私たあ、昨日の今日なんだよねえ」

歩莉が染々と咳いて俺をボケツと見つめてくる。

そのマヌケな顔は若干人をバカにしても見える。

何が？ と聞いて欲しげだから「何が？」と聞いてやる。

「昨日みんなでキャンプしたんだ一泊三日の最終日、帰ってきたの夜中の十一時。だからさあ、疲れてるんだよねえ」

歩莉はわざといじりへ田を擦る。

「なんでそんな遅い時間に」

「それがさあ、道に迷つてさあ。私的には、地図係のアイちゃんが完全に悪い。キャンプ場出たのお昼の十一時ぐらいなのー」

アイちゃんとは、歩莉の引き取られ先の近所に住んでる稻本 愛梨いなもと あいりのことだ。

俺も何回か会つたことがあるが、高二で俺達よりも二歳年上だ。

その割に歩莉は愛梨に敬語を使わない。俺もだが。

中一の冬休み、俺と歩莉と愛梨とかと書き初めの宿題をしてる時、愛梨が突然半紙に「敬語は無用！」、と書いたのが始まりだった。

「朝早くからい」苦労なこつた……。その車、カーナビはついてなかつたの？」

「生憎ね。ケイちゃんはケチだからさあ。『俺は地図さえあれば可哀想な冥王星の所にだつて行ける!』だつて。笑えるよね。ホントはお金持つてないだけ」

ケイ兄とは、後原圭一、二十歳の短大生だ。

歩莉は年上の友達が多い。

「十一時間も車の中つて、俺はたえられない。修学旅行の一、三時間の新幹線でさえ」

「カズちゃんは酔い易いもんね　」

突如、インター ホンが鳴った。

「お?」歩莉が声を洩らす。

桐乃是完全に無視してゲームを続ける。

母さんは外出中なため、俺が出に行かなきゃならない。

ベッドから下りて部屋を出る。

階段を下りると、すぐに玄関だ。

俺はモニターも見ずにドアを開ける。

「！」わざとよひ

俺は田を疑つた。

そこに立っていたのは、会長だった。

たじろぐ俺を差し置いて、「相変わらずのアホ面ね。私の家の前の岩そっくり」と凶々しく押し入り、靴を脱いでわざわざ階段を上がつていいく。

全く、こつはホントに金持ちんとこの子なのか？

ていうかそんな場合じゃない！

会長は一番、歩莉に会わせたくない人物なんだ！

急いで一回に上がらうとした直後だった。

また、インター ホンが鳴った。

オドオドしながらドアを開けると、そこに立っていたのは、ローマこと東京 都だった。

「お、おまゆい」

都は少し緊張した様子で苦笑いして小さく手を振る。

「美園、来なかつた？」

「奇遇だね。俺も今そのことで頭がいっぱいだよ

」

第4話 ネバーホンティングパーティー

「ホント、何度も私オレンジジュースが良いつて言つてゐるのに、オレンジジュースじゃないとダメつて言つてゐるのに、アイちゃんつてば、マスカットジュース買つてくるんだよ？ グレープならまだしもマスカットだよ！ 大体何なの？ マスカットつて」

「何それ。でも愛梨らしくていいじゃない」

俺が都を連れて大急ぎで部屋へ戻ると、会長と歩莉がベッドの上で談笑していた。

まるで親友同士のよいつ。

「会長と歩莉つて、知り合いなの？」

俺は思わず都に訊く。

「え？ だつて、美園と歩莉つて施設時代からの親友なんじょ？ 和也も施設出身じゃないの？ 仲良し三人組だつたつて、よく美園が話してたよ？」

「どうやら俺は記憶喪失をしていたらしい。依然として思い出せないし……。

きっと会長は、相当印象が薄かつたんだ。

歩莉のことはしっかり覚えてるし。

それ以外考えられない。

それについてもひと安心だ。

「なあ都

俺は床に座り、前から聞きたかったことを思いついて聞いてみる」とこした。

「お前と会長は、姉妹なんだよな?」

「義理のね」

やつらつて都は俺の隣に座る。

「何で苗字が違うの?」

都と視線を合わせる。

「偽名

都がしがれつと呟つ。

「東京都つてのはね。本名は、今田薫子」

「やつらつてのつて、あつなの? 学校とかつて偽名を使つて良この

「学校でも今田薫子だけど?」

都の相変わらずの平然さに言葉が詰まつて咳が出やつくなる。

「私を都つて呼んでるのは、和也だけ」

「何じやそりや」

俺が目をパチクリさせる。

「ちよつと… ビー爆撃してんの！ ハートが三つだつてのを忘れないでよねー！」

いつの間にか会長と桐乃が協力プレイをしていた。

後のベッドで歩莉が楽しそうに微笑む。

「ちよつとー 何したの？ ルピーがめっちゃ減つたじゃんー！」

「間違えて変な青い薬買つちゃつたのよ。過ちよ過ち。別に罪じやないわ」

「これからクソチソクルにマップ解読してもらひまつてのー..」

「まだ神殿内じゃない。フックショットも持つてないのこ。マップ解読なんて先の先よ。探し始める頃にはきっとルピーが貯まってるわよ」

「無駄な失費が無ければそれよりもっと貯まるもん」

はて、俺の記憶だと、コイシジロは初対面のはずだ。

妙に息がぴったりで気持ち悪い。

「会長、桐乃とは知り合ったんですか？」

俺は思いきって不適な笑みを浮かべてテレビと携帯ゲーム機、二つの画面を交互に見る会長に声を掛ける。

歩莉の前で敬語を使うのが恥ずかしい。

「今日初めて会った」

会長と桐乃が口を揃えて言ひ。

もしかして、会長と馴染めないのは、俺だけだつたりして……。

「何今の一 アクション映画みたい！ もう一回やつて！」

桐乃が興奮して大声を上げる。

「オーケー、良いわよ」

会長は口元を緩め、絵に描いたような不適な笑みを浮かべがら携帯ゲーム機を操作する。

するとテレビ画面内で爆音が轟き、緑衣を身にまとった金髪の少年が痛ましい声を上げて吹っ飛ぶ。

「ちょっと… 何私に爆撃してんの…? もつひとつと斜めでしょ
うが! ヘタクソ!」

桐乃がキツと会長を睨む。

会長は「じめんじめん」と笑う。

「会長、ゲームとかするんですね」

意外だな。あんな楽しそうにゲームをする会長って。

「家でもよくしているわよ~」

都が俺の質問に答える。

「中学の頃はよく『魔神剣!』とか叫んでた。煩わしかったわあ

ホントに意外だ。

誰の魔神剣なんだろ?……。

第5話 スチューントプレイ

「ねえ、みんなでカラオケいかない？」と歩莉が手を挙げて主張する。

「いいね！ それ！」と桐乃。「会長さんの奢りでね」

「別に良いわよ。早く行きましょ」

やつは会長は立ち上がりビデオを指差した。

今年は去年以上に忙しく夏休みになりそうだ。全く次から次へと…。

会長と都が押し掛けってきたかと思つと、歩莉とも桐乃とも知り合いだし……。

会長がいると、俺はいつも仲間外れにされてる気がしてならない。

* * *

受け付けを済ませ、五人で個室へ向かつ。

カラオケなんて久々だ。

個室について、ソファに座るなり歩莉は「最初誰歌う？」と張り切

つて言ひ。

ぐるりと、ソファに腰を掛ける俺たちを見回して、誰も答えないのを確認すると、「じゃあ私歌うね！」と液晶テレビの脇の装置からタッチ式の端末とマイクを引き抜く。

「まずは定番 cittachaya うね」

そつ言つと、スピーカーから音楽が流れ出す。大音量で。テレビ画面に『やくりんば』と映つた。歩莉はバカみたいにノリノリに熱唱する。

「はい次！」歌い終わつた歩莉が俺にマイクを差し出す。「カズち
ゃん歌つて！」

別に断る理由も無いから、俺はマイクを取り、端末をいじる。

さて、何歌う？

HALCALLI? でも、『スタイルースタイリー』と『嗚呼ハルカリセンセーション』ならラップを嗜まずに歌えると思つけど、イマイチ盛り上がりに欠けるかな……。

ki-ro-ro? 『しゃほん玉』なんて歌つたら、なんだか殴られそうだ。

坂本真綾? 僕の好きな『恋人について』とか『パイロット』はやっぱり何か違う。『トライアングラー』とか『ユニバース』とか『プラチナ』とか人気の歌は、音域が広くないとダメだし……。

よし！ ここは秘密兵器と行くか……。

端末をちゅひょいと操作し、テーブルの上に置く。

「なにこれ？」 桐乃が画面を見て叫ぶ。

画面に映し出されたのは『広瀬香美メドレー』という文字。

「意外」 都が呟く。

「男なら黙つて、広瀬香美メドレーなんだよー」

『ゲレンデがとけるほど恋したい』 『愛があれば大丈夫』 『幸せをつかみたい』 『真冬の帰り道』
『DEAR . . . again』 『ロマンスの神様』。

幸い全部歌える。奇跡的なメドレーだ。

それに、予想以上にみんな盛り上がってくれた！ 特に最後『ロマンスの神様』は。

「次私！」 桐乃が手をあげる。

こいつが歌うのは大体予想できる。

いつも隣の部屋から騒がしく聞こえてくる、あの歌、少女時代の『Gee』に違いない。

案の定、画面に映し出されたのは『Gee』と云々。

おもむろに補助椅子を持ち出し、その上に立つ。

そして、満面の笑みを浮かべて歌い出す。

第6話 スチューデントプレイ2（前書き）

特に何も起ららない話、それが番外編。

番外編もこれで終わり。

次からは恒例の生徒会／＼騎士団の日々に戻ります。。。

第6話 スチュー・ソントフレイ2

その後も、会長が「君たちキウイ・パパイヤ・マンゴーだね」を歌つたりと、カラオケは盛り上がった。

補助椅子を一段重ねにして、その上に立て「ベビーロートーション」を歌つた桐乃がバランスを崩してテーブルに頭をぶつけて出血したり、とにかく色々あった。

カラオケを出た後は会長と別れて、桐乃、歩莉と一緒に家に帰った。夜七時にカラオケを出て、家についたのはその三時間後の十時だった。

理由は単純、道に迷ったんだ。

やつぱり歩莉の言つことは信用できる。

森を通つて帰るのと歩莉が言つ出して、ついでにけば、あつとこう間に迷宮。

インスタントラーメンを作るより簡単だ。

桐乃もしゃがみこんで「椅子なんか一段重ねにすんじゃなかつた！もつと気持ちが楽になつてたかも！」と泣きわめいて、もう大変だつた。

なんとか森から抜け出ると、その後は、腹が減つて身も心もズタボロだった俺たちは、コンビニに駆け込んで、棚に残つてた僅かなお

にぎりを買って食いながら家へ向かつた。

好きでもない梅干もあの時ばかりは旨かつた。

いつもして客観的に二人を見ると、まるで脱北者だ。

歩莉が土に埋もれた地図のかかれた看板を見つけなかつたら、俺たちは今頃ゾンビになつて徘徊してたかもしれない。

生きてるって素晴らしい！

＊＊＊

昨日の疲れからか、夏休みといつ安心からか、時計を見ればもう陽も昇りきった屋下がり。

まだ眠い。

ボーッとしながら天井を見詰める。

歩莉は、俺より疲れていたのか、隣ですやすや寝息を立てながらまだ熟睡中だ。

隣でつてのも変な話だよな。まるで恋人だ。

大きくあいた胸元を横目で見よつとした瞬間。

「おつはよー！」

何の前触れなく、会長がドアをパタンと開け入ってきた。

このタイミングを狙っていたように思える。

「やうだ、和也、これ。郵便受けに入つてたよ」

そう言つて会長は俺に薄っぺらい物体を投げつけた。別にメイドを雇つた覚えはないんだが……。

それより……なんだこれは、クリスマスカード?

俺は起き上がり、明らかに季節外れのそれを開いてみた。そこには、桜の挿し絵と共にこう書かれていた。

『さて』『じゃねえよ。『好きす』って何だよ。

めちゃくちゃだな。

「何? これ?」

俺はマヌケな文章の続きを読むことなく会長の顔を見やつた。

「何つて、クリスマスカードでしょ？」

「真夏にクリスマスカードなんて送り付けてくる奴なんているんですか？」

「それ私に聞いてるの？」

会長が呆れた様子で腰に両手を当てた直後。

「朝からひりひりや」

歩莉が目を覚ました。

「「」やげんよ」

会長がそつ言つと、歩莉は「機嫌良い風に見える?」と会長を睨んだ。

「昨日、森で迷ったんだってね」

「私の話大つ嫌い。誰から聞いたの?」

歩莉は呆れたように目を擦つた。

「誰つて、桐乃ちゃんに決まつてゐじゃない」

会長がそつ言つと歩莉は身を起し、ベッドから降りた。不気味に「今度は肘掛け椅子」と呟き、部屋を出ていった。

「「」の家に肘掛け椅子なんてあった?」会長はいたつて呑氣だ。

まあ、自分の妹が危機だつてのに寝惚けてる俺も呑気だけだね。

第1話 レ・マゼラブル

夏休みあけて早々、俺は掲示板を見て驚いた。

そこには『新たな対生徒会組織・東董自衛隊、始動!』と記してあった。

また厄介なのが増えた、のか……。会長はこれをいつたいどう思つてるんだ?

騎士団にさえ負けそうになつたつてのに、また変な組織が出来るなんて。「楽しそうじやない」とか言つて笑つてるかもな。

「ホント見苦しいよね」

都が俺の横に並び、呆れた様子で記事を見た。

「これじゃ“デュピ セフス パトレ ジュノスエ セキュ”よね

都は片眉を下げて俺に口を合わせた。

「何語? それ

「シユナちゃんから教えてもらつたの。火星のことわざ」

「火星にもことわざがあるんだ……」

「住んではるのと同じ人間だからね、そりや発想にも限界があるわけ。真新しいものつていうと、肌の色ぐらいかな」

「今言つてたことわざつて、どういひ意味？」

「直訳すると、『「キブリが陰毛を搔い潜つて逃げた』なんだつて」

「……は？」

「まあ、つまりは、無様つことなんぢやない？」

なんぢやない？　って言われても……。

「……なになに」

都は新聞の記事に視線を戻した。

「明日行われる、騎士団との一組織会談で、生徒会への制裁を決議する。直後に行われる生徒会との会談で生徒会が自衛隊の要求に応じなければ、制裁を実行する方針”だつて、どうする？　しかも“自衛隊は騎士団と合併し、『新設・生徒会（仮）』を発足する見通し”つて、美園も大変ね」

「その美園会長に振り回される俺たち偽役員も苦労してることをまず訴えた。その一組織会談とやらで」

まあ、会長のことだから、かなり強硬な姿勢で、下手したら話も聞かずに一分で会談を終わらせてしまうかもな。

話し合いですら感じないつてのも有り得る。

「脱退しても、もつ自衛隊に入つちゃえぱいじゃん

「あの会長がそれを許してくれると思つか？」

「火星のことわざにもあるでしょ？ “デュピ ジュキュスコ パチ ュエ ジスーシ” つて」

「あるでしょって言われても……」

「“ソファに寝転んだ開脚女” つて意味よ。つまりは、ヤるなら今しかない！ ってこと」

「衆人環視の前でか？」

「私が交渉してあげてもいいけど？ 美園なんか、家から追い出してやる！ って言えばイチコロよ！」

「そんなことする必要ない」

俺は都に背を向けた。

「会長が負けるわけないからさ」

そう言って俺はわざとらしくカツコつけて、その場から立ち去る。

前回の戦いでは、負けかけたけど、俺たちの味方には、あのアメリカいるんだ。

それに会長だつて。

いきなり現れな名も知れない弱そうな組織に負けるわけがないさ。

ただ気掛かりなのは、都のあの感じ、自衛隊と手を組んでる臭がふんぶんだ。

今回はそれが勝負を大きく分けそうだな。

放課後、会長に知らせるとするか。

第2話 ミスト

「会長！ 知つてます？」

生徒会室のドアを開けるなり、誰がいるのかさえ確認せずに俺は叫んだ。「都は絶対、自衛隊派です！」

室内にいたのは、小泉さんと会長のみ。

偉そうに肘掛け椅子にふんぞり返る会長と、机の上に腰を下ろす小泉さん。

一人して呆れたよつに俺を睨んでくる。

「今なんて言つた？」

小泉さんは肩をすくめた。「都は、自衛隊派？ ……はん！ そんなプチ情報、百万年前から知つてゐつづーの…」

俺を指差し、声を張つて叫ぶ小泉さんの傍らで会長がクスッと悪うな微笑をする。

「私も今朝の記事を読んだわ。心配しなくとも大丈夫よ」

会長がそつ言つと、「そつそつ」と小泉さんにバトンが渡つた。

「私は、アメリカちゃんと対抗するからわ」

「……今度はどの棟を壊すんですか？」

「前回は派手にやらかして、あんたは知らないだろ？けど私ら相当怒鳴られたんだ。今回は棟は壊さないつもりだから大丈夫」

小泉さんはおもむろにスカートのポケットから、何十折りにもされた紙を取り、それを広げて俺に見せた。

「何て書いてある？ 読んで」

小泉さんが自慢げに胸を張つて見せてきた紙には『レジスタンスのラブリー・チャーミングなニューマスコット！ アメリちゃんでちゅ！ よろしくほんつ』と書かれていて、ナース服を着たアメリが聴診器を首にかけ、注射器を持つて笑顔でポーズをとつていた。

なんだこれは。

いつの間にこんな……。

「あなたの名前出したらすぐに了承してくれたわ。ちなみに写真部に頼んだのよ？ よくできてるでしょ？」

会長も胸を張る。

「これを作ったんですか？」

ファンクラブでも作るつもりか？

「どうするって、自衛隊に見せるのよ。あくまで私たちも強気で挑まないと」

「もしかして、あの『制裁』とか『の』に対抗して」

「その通りよ。和也もちゃんとわかつてゐるじゃない。レジスタンスに対する制裁？ 腹に風穴開けられてもそんなマヌケなことが言える？」

汚いやり方だ。

「……でも、そつなつたら俺たちの負けですね」

「だからこのポスターを作ったんじゃない。これは警笛よ。レジスタンスから自衛隊へのね」

「和解とかって」

「和解？！ 無理矢理引き離されて、ドヤ顔決め込まれるのが、和解？」

まあ確かに、この生徒会にとつて和解＝降参みたいなものか。

暴走して、最初の内は「許してください」で済んだんだろうが、もう後戻りできないトコまで來てるもんなあ。

会長たつた一人です。

俺も栗山さんも、小泉さんも浜田さんも、全員被害者だ。広瀬さんは別として。

「それより騎士団はどうするんですか？」

生徒会の永遠のライバルのあいつらも、この隙を狙つてきやうだ。

「大丈夫」

小泉さんが微笑んだ。

小泉さんの「大丈夫」は、なんだか安心できる。

「今回の敵は騎士団じゃなくて、自衛隊だからぞ」

「いやでも、あの連中のことだから」

「同じ」と一度も言わせないで。敵はあくまで、自衛隊だつてー。」

なるほどね。

俺の言い出す話を、小泉さんは百万年前から知ってるんだもんな。

俺は「」の生徒会では完全に無力だ。いつも通り。

俺にできることと言えば、せいぜい猛犬アメリの機嫌とりぐらいか

……。

「そうだ、キヨンキヨン。報告の続き。騎士団のゴニーットがビリの
つて」

会長がそつと、小泉さんは会長の方に体を向けた。

「やうだつたね。『東京バラチノース』ね。どうやら今回、自衛隊
が出てきて、騎士団も黙つてないみたい。でもきっと、自衛隊が放

つておくわけない。明田の一組織会談で、もし「」のコニシトを騎士団が発表するつてなれば、そりや自衛隊と手を組む気なんて更々ないつてトコになるかな

何の話だ？

「そつなつたらチャンスじゃない。騎士団を手玉に取つちやえれば自衛隊なんて敵じゃないわ」

「確かにね。でも、アメリの一件もあって、騎士団もかなり警戒してると思う。あんたのその裏切り体质もそうだし、マスクットがアメリとなると……」

「難しこじるね……」

今回の作戦の話か？

全然ついていけない。

「東京パラチノース、だっけ？ そのメンバーの詳細は？」

「四人だつてのは聞いたけど、メンバーの名前なら、今から調べに行くわ」

小泉さんは「よいしょっ」と机からおりると、俺を素通りして生徒会室をあとにした。

「遅いわね、夏子も伊代ちゃんも……」

今回の作戦は、いつも以上に俺が関係なぞそつだ。

やうやくとくづりをきのじゆうじゆう。

第3話 東董の太陽

「ひひや、今回の大戦に俺の出る幕は無いみたい。こつもの」と
だけどね……」

枕研究室のドアを開けるなり、俺は独り言を呟きながら、壁に寄り掛かって腰を下ろした。

珍しく起きてこらへつけられたのは、上の空で窓の外を見詰めてる。

寝ればいいのに。

「あひだくひちゃん

俺がそいつと、くひちゃんは反射的に俺を見た。

不思議ちやんの不思議そつな顔はなんだか可愛いげがあつてずっと見てられそうだ。

「なにか?」

「都が言つてたんだけど」

「火星のことわざ?」

やつぱりへつけられたのは、俺の隣まできて座つた。

「あ、その通り……」

「薰子ちゃんは、俺の心が読めるのか？」

「薰子ちゃんは、シユナちゃんから教えてもらつたつて言つてたけど、ホントは私がシユナちゃんに教えたの。会長に言われたんだ」

薰子つて、たしか都の本名だつたな。

よくよく聞けば、薰子つて名前がダサくて偽名を使つてるつて言ってたな。

俺はそつは思わないけど。

東京都つて名前の方がどうかと思つし。

「いつか、そんな些細なことにまで会長の手が行き届いていたなんて。

「……さすが会長」

最近、騎士団も大人しくて退屈してたんだろうな。

「デュッペ モウス ペテス マイウェイ ケチュア リコーム」

くつちやんが突如火星語を話し出した。

「何で？」

「どうこつ意味？」

「火星のことわざで、『尿道まで二センチ、子宮まで二光年』」

火星のことわざって、だいたいそんな下ネタ気味なんだな……。

「簡単に言えば、近くて遠い、って意味。ほとんどは、友達以上恋
人未満の意味で使われてるの」

そう言つとへつちやんは、他にも何か言いたげに俺の顔をまじまじ
と見つめた。

なんとなく、言いたいことはわかった。

「そろそろ、部活、始めよ」

くへひやんはそつ言つと、立ち上がり、布団を敷き始めた。

「ねえ」と手招きするへつちやんの姿はなんだか、怖い。

笑顔なんだけどね。

* * *

目が覚めてまず、俺は時計を見た。

午後六時。

よく寝た……。

外はまだ明るいが、部屋は暗い。

隣ではまだくつうちやんがすやすやす眠っている。

俺はそっと立ち上がり、生徒会室へと向かった。

会長を始め、小泉さん、栗山さん、浜田さん、広瀬さんがソファに勢揃いで、何か話し合っている。

恐るべく、また俺を仲間はずれにして作戦会議でもしてくるんだが…

…。

「あつ」と一番最初に俺に気づいたのは、やはり栗山さんだった。

会長も小泉さんも話に夢中で俺に気づかない。

「つまり、名前だけなわけ。本当は実体が無いの。よく聞いてみた
んだけば、くつちやん奪取するみたい」

「自衛隊から？」

「やう。しかも、お金でね」

「騎士団もセツコ使つわねえー」

「でも、騎士団にひとつでは結構な賭けかもよ。一組織会談の直後
なんだもん。まず一組織会談で、どんなことが話されるのかも知れ
ないし」

「それか元々、自衛隊にも、騎士団のスパイがいる。のかもしけな
いわね」

「ありえる」

やつぱり作戦の話か……。

「やつだ、忘れるといふだつたー。これは重要」

なんだかわからぬにやうど、前回、あんな慎重にやつて騎士団に負けかけたくせに、そんな大きな声で「重要！」なんて言つて呟いたのか？

「騎士団、私らと手を組んで自衛隊をやつつけようとしてる。明日、自衛隊に隠れてこいつそり会談を申し込んでくると悪ひ」

「騎士団も切羽詰まつてるのね。ずいぶん突然じゃない」

「受けゐる？」

「それ聞く？」

「当然だね」

今回はどうなるんだい？……。

眠い。

第4話 今田美園と炎のハムネちゃん（前書き）

登場人物みんなキャラ薄いな～ってことで、今回、凄まじいキャラを投入しました。。。

第4話 今田美園と炎のハムネちゃん

-翌日、放課後 -

「騎士団の連中、とつとつ動き出したわ！」

小泉さんはそう言つと、テーブルの上にポスターのようなサイズの大きい紙を出した。

ていうか、ポスターだ。

テーブルのまわりに集まつた俺たち偽役員は「おお」と唸る。

三年のどこかの教室でひつそり行われた騎士団と自衛隊の一組織会談からこゝそり持ち出したというポスターには、“東京パラチノース！”とかかれていて、マントをまとつた仮面で顔を隠した四人の、おそらく女子生徒がポーズをとつていた。

それぞれに、『羽笛子^{バフホコ}』、『エルモ』、『エスペニヨーネ』、『柴犬』と名前がふられていた。

「わかりやすいわね、仮面つて。キヨンキヨンの言つた通り、やっぱりまだメンバーが決まってないのね」

会長が顎に手を当ててポスターに目を落とした。

「ううん、もうメンバーはいるみたいだつたよ」

小泉さんがそつと会長は「マジで?」と小泉さんを見つめた。

昨日から戻りを続き、俺には何の話をしているのかわからない。

「やっぱり懸念してた通りだつた

「じゃあ、メンバーは自衛隊から?」

「そう。買収よ買収

「騎士団もやるよつになつたわね……。これは賭けね

「賭けつて……どうこう」と?

小泉さんが首をかしげた途端、会長はスッと立ち上がり、「そろ会談の時間ね」と出入口に向かって歩き出した。

すると小泉さんと浜田さんがそのあとに続いた。

俺も栗山さんも広瀬さんも、下級生三人はなんだか寂しそうにその背中を見送った。

上級生三人が部屋を出ていった直後。

「尾行する?」

広瀬さんが聞こえなこよつに小さな声で囁つ。

「あの強者たちを?」

俺がそつまつと、広瀬さんは、「チツチツチ」と生意気に指を振つた。

「別に会長さんはそんなチンケなことで怒らないよ絶対！ 別に知られちゃマズイことなんてないでしょ？ だつてどいつせ私たちは今回の大戦に關係無いんだからさ」

「だつたら履行する必要ないじゃん」

「冒険だ冒険！ 行こひー！」

広瀬さんは俺と栗山さんの手を掴むと、強引に廊下へ飛び出した。

* * *

小さく開いたドアに顔を張り付け、俺たち三人は顔を団子重ねにして我が生徒会と自衛隊の会談の様子を覗く。

二つ並んだ長机にそれぞれの組織の代表が向かい合わせに座つて話しあつている。

自衛隊側には、あの都もいるが、やつぱつと言つて走りのいいのか、会長は全く気にしていない様子だ。

会長は手元の紙に目を落とした後、苦い顔で、恐らしく自衛隊のリーダーであらう男子生徒を見た。

ネームプレートには、田原 俊麻^{たはら としま}と書いてある。

「「」れせりゅうとせつす、あじやなこー?」

会長の気持ちを代弁するかのように、小泉さんが立ち上がり、下品に田原さんを指差す。

ビンセラ生徒会が追い詰められてるようだ。

会長のあの表情は始めてみる。

「あんたみたいなバカで無能な死にかけのライスボール集団には、学食利用停止に、なんだっけ？ あとは……忘れたけどこれぐらい当然じゃない！ 死ね！ なんなら退学処分だって考えたんだからね！ あたしらは優しいわ！ これぐらい左手の小指一本でストレート一五〇キロよー ホンドビづかしてるわー 生徒会つて！ フアーネック！」

田原さんの右側に腕を組んで座っていた金髪ツインテールの女子生徒が立ち上がって、小泉さんに向かって乱暴に中指を立てた。

早口で、何よじ言つてゐることが意味不明だ。

貧相な胸につけてあるネームプレートには、『伊達 ラムネ』と書かれている。

「まあまあ、落ち着きなさこよ。レモンちゃん

田原さんの左側に座つてこたネームプレートに『新山 丸子』と書かれた、絵に描いたようなおかっぱの女子生徒が伊達さんを宥める。

都はと言つと、その傍らで腕を組んで、会長にガンをつけている。

覗き込んだ時からずっとだ。

「私たちにも考えがあるの」

会長は立ち上がると、例のアメリカポスターをおもむろに広げて見せた。

俺に見せたのよりも一回つも二回つも三回つも大きいサイズのだ。

「それは？」

田原さんが少し困った様子でそのポスターを見た。

会長はポスターへくるる巻いて、田原さんに投げた。

そして着席する。

伊達さんがそのポスターを田原さんから半ば奪い取ると、広げて、見た。

そして、プツと吹き出した。

「私たちは、アメリを生徒会メンバーに入れるわ！」

会長が叫ぶと、笑っていた伊達さんは赤い瞳を光らせ、キッと会長を睨んだ。

「ホントどうしようもない連中ね！ 生徒会つて！ 寒気がする！ 誰かカイロ持ってきて！ 貼るタイプのね！ あんたなんか、その黄ばんだパンツを脱がして使用済みの割り箸をそのグロテスクな性器にブツ刺して、グーンて開いてやるんだから！ キュウリを挿すと思った？ 違うわ！ あたしならきつたない十年前のテレビのリモコンをブツ挿すわ！」

新聞部の前で、そんな下品ゆきりと言ひちやつて大丈夫なのか？

「盛り上がってきたじゃん！」

広瀬さんが目を光らせながらその光景を見詰める。

「あなたのそのちちちやな胸、別にカイロで温めたつて大きくならないわよ？」

会長も地味に食い下がる。

いつもよりおとなしい。

「田原俊麻呂つちー こんな奴らと議論するだけ無駄の無駄よ！ わざわざと制裁の制裁加えちゃつて！」

伊達さんは会長を指差しながら必死な表情で田原さんをみやつた。

「たしかに、この様子だと、役員を解放する気は全く無むうだな……」

第5話 グループエネミーズ

「あなたの指は何本?」

そう言つて伊達さんは会長を睨んだ。

「やうね……」

会長はバカっぽく両手と両足に皿を落とした。「足と手、あわせて十本ね」

そんなの数えなくたつてわかるだろ。

「果たして明日も数をキープできるかな? あなたが黙つて糞役員共を解放すりや」

「解放はしないわ」

会長の空元氣も図々しい。

役員の意見も聞くべきだ。

俺たちは、いや、せいぜい俺は、解放と自由を求めてるのよ。

恐らく栗山さんもやつ思つてるはず。

「お前らー、何やつてるー!」

背後からの唐突な叫び声に、俺たち三人はビクンと反応し、団子が

崩れる。

声の主は、見知らぬ男子生徒だった。

「こいつたいてここで何してたんだ？」

男子生徒は俺たちを睨みながら距離をつめてくる。

「何つてなんなんだよー。」

広瀬さんが謎の食い下がりを見せる。

この男子生徒は上級生だ。

「ちゅーっ！」

俺は、立ち向かおうとする広瀬さんの背後から抱きつくかたちでそれを阻止する。

「話してカズっちー！」

じたばたする広瀬さんは、意外と力がある。

俺は広瀬さんの首輪を掴む。

すると広瀬さんは「ぐぎー」と苦しそうにして、俺に身を委ねた。

『『諫死の小海』も、ずいぶんと落ちぶれたな。首輪をつかまれて、まるで犬つじろいだ』

男子生徒は勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

「こへり兄貴とは言えど、その口を口止めしとせば語道断ー。」

それは一瞬のことだった。

広瀬さんは、俺の方を振り向くと、踵で思いつめり俺の両足を刈った。

それはまずみで俺は宙で仰向けになる。

それに追い討ちをかけるように、広瀬さんは俺の腹に向かってハンマーを振りおろすよつこ、握り拳を叩き込んだ。

「ぐふっー。」

急な痛みに思わず声がもれる。

そして、意識が遠退く……。

* * *

田が覚めるとい、田の前に広瀬さんの顔があつた。

「あつ、起きたー。」

広瀬さんはいつと笑みを浮かべた。

「じーせ、じーだ？

俺が横たわってこる」のソファ見覚えがある。

生徒会室か……。

「死んだかと思つたよお

涙声で俺に抱きつく広瀬さん。

忘れたわけじゃない。

俺を氣絶させたのは他でもない「イツだ！」

「ちゅうとー」

俺は広瀬さんの両肩を掴み突き放した。

「の性悪暴力女はー、じゅうよしおもないなー

「殴ったのはいつたい誰だー！」

俺は上体を起し、叫ぶと、広瀬さんは一瞬田線を斜め上へ向けたあと、ムスッと微笑んで「じめんじめん」と俺の肩を叩いた。

「おーーっす

生徒会室のドアが開き、会長と小泉さんと浜田さんが戻ってきた。

「あー、美園ちゃんー！」

広瀬さん、いや、もう広瀬でいいや。広瀬は、会長へと走り寄った。

それより、いつの間に会長をちゃんと付けで呼ぶよつこ……。

「じつだつた？ 会談

「うーん……まあまあ、ね 小海ちゃんの方はどうだつた？」

「 もうバツチリ！」

俺と栗山さんはまるで蚊帳の外だ。

いや、まだわからない。

栗山さんも、今回の作戦に関心してゐかも知れない。

疑いの眼差しが顕著過ぎたのか、栗山さんは困った様子で顔を隠した。

第6話 若くとも物語

- 明くる日 -

「れつて。

いつもの掲示板に、見覚えのある張り紙がはってあった。

「騎士団の一コーエイントークン！ 東京パラチノース！」

昨日見たポスターには「騎士団の一コーエイントークン！」なんてのは書かれていたな。

「騎士団もバカな連中ね」

また都か。

よべりで念づな。

つていうか、明らかにタイミングを見計らってるでしょう。

だつて掲示板なんて各階にあるはずだもん。

むしろ一年生の教室前だけにあるつてのはおかしいし、見たし俺。

都の教室がある棟にもちゃんと掲示板があつて、全く同じものが張つてあつたし。

「昨日の会談、全然喋つてなかつた奴が何を

俺がそつと、都はハツと隙をうたれたように振り向いた。

「どうして？！ 見てたの？ あんた、あの場にいた？！」

「席にはまつこでなかつたけど、ずうーっと会長を覗んでたよね。気持ち悪いくらいにさ」

「どうから見てたの！？」

「ドアの隙間から」

「セ「^ヒい奴」

それだけ吐き捨て、都はそそくさとその場を去つた。

何かまずいことでもあつたのか？

別に俺は重要な話を聞いたって自覚も無いし……。

伊達ラムネとかいう変な女子生徒が会長を罵倒してたぐらにしか思い浮かばない。

そういうえば、都って自衛隊の手下のわりには案外普通に接してくれるよな。

「おーい和也ー！」

今度は彰造か……。

「何か用か?」

「用がなかつたら悪戯好きな俺はこのままお前の前を通過してゐるさ」

彰造が俺の前で立ち止まつた。

「せうだな。お前の悪戯はレベルが低いからな」

「バケツをひっくり返した後のタライ、覚えてるか?」

彰造が不適な笑みを浮かべる。

「それつて確かに、俺が都に、といつか会長に騙されて、謎の茶番を見た後に逆ギレみたいにたちの悪い悪戯をくらつた奴だよな?」

「その通り。実はあれつて、俺のアイデアなんだ。水にタライだけな。良いオチだつたらう?」

「納得……」

俺はわざと肩をすくめる。

「納得? 何が納得だつてんだ?」

「あんな偶然な都との出会いとか、お前なんかじゃ演出できないもんな。それにその前のドッキリの方がすごかつた。いや、すごいというよりは、酷かつた。特設セットまであつたんだ。ハリボテなん

かじやない。校庭に一軒家を建てたんだ。会長は

「お前はホントに美園会長が好きだよなあ」

「おい、いつからそんな話になつた」

「俺はその話をしに来たんだ。美園会長は喜んでたぞ？　お前が美園会長のことが好きなんだと話したらな。俺はキュー・ピットさ。なあに好きでやつてるわけじゃない。見返りを見据えてるんだ」

「まるで強盗だ」

「いいや、それは違う。強盗ってのは狂つてる奴のことだ、それにそいつらには言い様の無い霸氣があるんだ。じゃなきゃそんなバ力なことしない」

「まつたくその通りだ。お前とおんなじ」

すると彰造ははあーっと大きな溜め息をついた後、「美園会長はお前を恋人にしたがつてる」と俺を指差した。

なんだそれは。

あの擦れつ枯らし会長が俺を恋人にしたがつてる。

嘘だな。

それが本当なら、あんなバカみたいな性格、すぐに俺に告白してるのでつて。

「ノートに何度も書き直したわりには出来の悪い『冗談だな』

「冗談と思つんなら、美園奈良と会つた時に少しふり見てみるんだな！」

彰造は勝ち誇つたよつた顔して、俺の眉間に指差した。

「好きです！ 付き合つてください。」

第7話 桐生和也とロリータの侵攻

放課後になり、俺はいつも通り、生徒会室へと向かった、のだが……。

ドアには「会談中！ 立ち入り禁止……」といつ張り紙が。そこには立ちはだかっていたのはなにも俺だけじゃない。

栗山さんと、そして、広瀬もいた。

「どうする？..」

広瀬が座り込んだ。かと思えば、

「覗く？」

と俺を見上げた。

「覗くって、どうやって？」

見詰め返すと、今度は栗山さんの方を見て言った。

「やつこえは夏子、商店街の近くのセブンでバイトしたよね？」

すると栗山さんはクンと反応して「どうしてそれを…」といつぱりで広瀬を凝視した。

「やつぱりね、あれは夏子だったんだ。夏子が、しゃーアー、なん

て。もっとハッキリこらしあいまセーティングやつな雰囲気なのに
に

「あ、あの……」

栗山さんが広瀬に近寄って身を屈めた。

「みんなには、内緒……おねがい」

「安心してよ。誰にも言わない。それにあの場所、こここの生徒はそんなに行かないだろうしね」

俺が誰かに言づ可能性とかって、考えないんだな。

俺は栗山をさぶなめられてる。

もじくは眼中にないのか……。

「よしー、覗いてー！」

広瀬は立ち上がりつゝ、腕をグッと伸ばした。

その瞬間、

「やの必要はないよ」

小泉さんが廊下から現れた。

「あれ、キヨンキヨン、なんでここへ。てっきり会談に参加してるのがど」

確かに、会長の優秀な右腕である小泉さん無しでの会長は大丈夫なのか？

「騎士団は私たちより格下だし、あとアメリカちゃんもいるしね」

「え？ アメリがいるんですか？」

思わず声が洩れる。

「ええ。和也くんのお願いだからって。だから和也くんはこいつになきゃダメだよ？」

「分かつてますよ。暴走ですよね暴走」

小泉さんは「その通り！」といつ顔で俺の肩をポンと叩くと、階段を降りてどこかへ行ってしまった。

「どこの行くんですか？」って訊けば「あんたって野暮ね」って言い返されそうな雰囲気が背中からあふれてくる。だから言わない。俺は野暮じゃないから。

入れ替わるように、廊下の奥の方から、今度はよからぬ生徒があらわれた。

子供のよじにスキップでクマのぬいぐるみを引きずりながらじつちに我が物顔で向かってくる低身長で華奢な体。しかし、それとは相反する重たくてただならぬ雰囲気が一気に俺を縄でキツく縛るよう立ちはめる。

たしか、伊達ラムネとか言つたな。

俺は覚えてるだ。

ここつの口からほ汚物しか出ない！

つていうかなぜこいつがここにいる！

まづくないか？　すぐ後ろでは生徒会と騎士団の会談！

伊達ラムネは自衛隊の手先だ！

うん。非常にまづい！

「おい広瀬！」

背後を振り返ると、案の定、広瀬と栗山もんは俺の後ろに隠れて、怯えている。

「おー！　俺を氣絶させたあの勢にはどこへ行つたんだ！」

「そんなのー覚えてない。それに相手はあの伊達ラムネだよ！　ア
イツの通り名知つてる？　『殺地球未遂』だよ？　地球に急接近し
てた超巨大隕石がロリータに天下つた姿！　楯突いた人間は、死ぬ
まで引きずられて、気が付けばぬいぐるみの姿にされてるといつー。
ほり、あのぬいぐるみがそー！」

「なんだそれ！……でも、こつちだつて、『エイリアン・ダイハ
ード』がいるー！」

「無駄だよ。アイツには二大必殺技があるんだ！ 一つは『ぬいごりし』、一瞬のうちにまとめて六人を殺せる。もう一つは『ラムネと一緒に』、やつを言つた、死ぬまでどうたらつて技。そして、『レモネード売りの少女』……この技は、まだ私は見たことがない」

「じゃあなんで知ってるんだよ」

「見たことがない」というより、必死で逃げてきて、見てない……」

「お前の経歴も、言つてる」とも全く理解できん！ とにかく、ここから逃げなきゃ！」

奴はどうぞどうぞお出でござい。

あの笑顔が超怖い。

これは、生徒会にとつても、騎士団にとつても、最大のピンチかもしけん……。

第8話 和也のやぐれ

「ねえ！　お兄たんたちでなにてるの？」

やだ。

生徒会と自衛隊の会談の時に伊達ラムネのあの姿を見せておきながら、

今さらそんな笑顔でお子様を演じられても、怖くて仕方ない！

「おこー！　お前知り合いでないのか？」

広瀬の方を振り向き、小さく叫ぶ。

「殺されかけたら知り合いだなんておかしな理論だ！」

「俺もそつ思つてたところ……」

依然として伊達ラムネの莞爾たる笑顔が俺を締め付ける。

「ど、どうも……」

挨拶をすると、伊達ラムネは床に垂らしたぬいぐるみを両手でつかんで俺に差し出した。

「この子ー。あたちのお友だちなのー。」

「へ、へえー……な、名前は？」

「ピューアちゃんだよー。」

「ひ、ピューアちゃんっていうんだ。か、可愛いね」

一触即発だな。

ここにはアメリ以上に扱いが難しそうだ。

「そうだ！ お兄たんたち、アメリって女の子、知ってる？』

やっぱー。

懸念してたことが……。

「あ、ああ、それ誰？」

「つーん……じゃあ、お兄たん来てよー。」

「や、来て？」

伊達ラムネが俺の手を掴む。

俺の後ろでは、広瀬が小声で「私らを助けるつもりで」と背中を押す。

「いいでしょー？」

俺の手は、伊達ラムネの握力で潰れそうだ。

これはチビッ子の握力じゃない！

「いいでしょー?」って言つてゐるが、実質「来ねえとぶつ殺すー。」だよ!これは。

「どうして行かの？」

「どう」に行くつて、お兄さん、あたちのペツトになるんでしょうー？」

俺か！」そんなヤメケなことなどいひんた！

ウソーを浴びせてやりたい気分だ。

ぬいぐるみのピコークちゃんを俺の顔の前につき出す。

胃液の臭いがする。

「これ以上はまずいって」

廣瀬の、焦りを隠しきれない声が後ろから聞こえる。

「わ、わかつたよ」

わかつたよ、じやねえよ！ なに言つてんだ俺！

「やつたー！」

飛び跳ねながら、伊達ラムネは俺に抱きついてくる。

「ああ神様……」

広瀬が呟く。

手を引かれながら、俺は半ば連れ去られる。

廊下を歩いていると、生徒の驚いた視線が俺たちに向けられる。

「あれって伊達さんの彼氏?」や「四代目ピューケちゃんが決まりた!?」など、怖い発言が耳を過る。

ピューケちゃん、そうか。

さつき広瀬が言つてたな。『ラムネと一緒に』だっけか?

これまで三人もあの技の犠牲になつたのか。

つていうかありえない話だ。

まず、俺はいつたいどこへ連れていかれるんだ!

第9話 ラムネハウス

「イージがあたちの家よー。」

校舎の一角、階段の脇の薄暗い行き止まり、

伊達ラムネが床を指差す。

何の変哲もない、タイルの床だ。

「家つて、何もない……よね？」

俺がそう言つと、伊達ラムネは、「ちつちつちー」と愛嬌たっぷりに指を振つた。

いや違ひ、こいつに愛嬌なんてない！　言い直そう。

伊達ラムネは氣立ての悪さを滲ませながら指を振つた。だな。

そういう想ひついでに、

「イージをねー、こうするんだよー。」

伊達ラムネはしゃがみこみ、床に埋まっていた取っ手を掴み、それを持ち上げた。

すると、何もなかつたはずの床に隠し階段が現れた。

「学校に、こんな場所が……」

愕然としている俺の気持ちを知つてか知らずか、伊達ラムネは「早く行けー」と俺の手を引き、地下室へ足を進めた。

階段は案外すぐ終わり、目の前には、赤に金色の模様が入った中国っぽい扉が現れた。

慣れた手付きで、扉に掛けたロックの番号をそれをと打ち込み、開けた。

普通の民家のような、じく平凡な玄関。

ただ平凡じゃないのは、玄関から、その正面にある扉、床、すべてが赤と金つてことだ。

目がチカチカする。ここはずっとこいたら頭がおかしくなりそうだ。

それに、俺の思つてた伊達ラムネのイメージと違う。

もつと子供っぽい感じだと思つてたのだが……つていうのも一歩先へ進んだ話だ。

俺はその前で立ち止まらなきゃいけない。

なんで学校に家があるんだ！

怖くて疑問を言えないまま、伊達ラムネに言われるがまま、靴を履き替える。

正面にあつた扉が開かれると、その先には、真っピンクの世界が広がつた！

カーペット、ソファ、冷蔵庫、壁、ドア、天井、テーブル、テレビ、棚、タンス、ベッド、

教室よりちよつと広いぐらいの部屋にある、すべてのものがピンクだった。

最初の赤と金はなんだつたんだよー！

「座つて座つて！」

伊達ラムネは、俺をソファに座らすと、引きずついていたぬいぐるみを、ポイっと投げ捨て、

「待つてねー」と言い残して部屋の奥にあるドアを開けて、どこかへいってしまった。

それにしても、不気味だ。

俺の両隣にあるぬいぐるみ……。

デフォルメされたゴジラのような怪獣の背中からコアルなコトリーが飛び出してるようなぬいぐるみ、

両手両足が変な方向に曲がつて正を表してゐる人形のぬいぐるみ、

脳ニンのぬいぐるみ、

他にも色々、訳のわからないぬいぐるみがたくさん……。

テーブルに手を向けると、何やら資料のようなものと、ピンク色のコップに入ったピンク色の液体……。

「おまたせー」

案の定、奥の部屋から笑顔で現れた伊達ラムネが手に持っていたのは、ピンク色のコップだった。しかも、両手に。

「はーどうぞー」

そつまつてテーブルに置いたコップの中身は、やはりピンク色の液体だった。

伊達ラムネは、ソファにパンパンに置いてあったぬいぐるみを雑にどけて、俺の隣に座り、もう片方のコップを自らの前に置いた。

「あれ？ これは？」

俺は元々置いてあったコップを指差す。

「それはあたしのじゃないよ。かいち

「…………かこち？」

「ひひんー なんでもないよー」

焦った様子で、立ち上がり、そのコップをもつて、再び奥の部屋へ姿を消した。

かと思えば、またすぐに戻ってきて、ソファに座り直した。

「お兄たん、お名前は？」

「え、お、俺は、桐生和也、です」

「ふーん……あたちは伊達ラムネ！ レモンちゃんって呼んでね！」

「れ、レモンちゃん？」

「わうわう…じゃあ、和也くんのあだ名も考えないとね、あたちのペットに相応しい名前は……」

あごに人差し指をあてて考え込む伊達ラムネ。

さつきも言つてたけど、ペットってなんだよ。ビックリやうんだ
よ俺！

「ケシャー！」

伊達ラムネポンと手を叩き俺を見る。

「け、けしゃ？」

「そうー ケシャー！ 今日から和也くんのあだ名、ケシャだから
！」

なぜ、ケシャ？

たしか、外国の歌手でそんな名前の人人がいたけど……。

「よろしくね！ ケシャ！」

疑問だらけだけど、逆らえる気がしないから、

「よ、よろしく」

とにかく氣に入られるしかない……。不本意だけどね。

「じゃあ、なにして遊ぶ？」

そう言つて伊達ラムネが指差したのは、奥のドアだ。

「なにして遊ぶ？」って聞いたくせに、ここいつのなかではもう何して遊ぶか完全に決まってるな、これは。

いつたい何をたくさんでるんだ。

いざといつ時は、会長という素敵な味方がいるが……。

彰造が言つたことが本当なら、会長は今度助けに来ててもいい頃なのに。

広瀬が会長にちゃんと話してたらの話だけどね。

いくら行動力があつても、何かに押されないとどうしようもない。

「ねえねえー ケシヤ」

「え?」

「だからー、なにして遊ぶ?」

そして再び、ドアを指差す。

「む、向ひは、何が?」

「ベジテー」

「ベジテー」

「と、お風呂、あとトイレも」

H口こうじが頭を過る。

チャンスかピンチかどつかなんだ!

「あ、あの、やうやく、帰らなこと」

「はあ?」

伊達ラムネの鋭い視線が俺を刺す。

「ケシヤの家はいいでしょー!」

まあこなあ、だひよひ……。

第10話 ラムネハウス2

「やつてるー？」

突如、出入口のドアが開き、見知らぬ女子生徒が入ってきた。

薄い眉毛、くつきした田舎立ち、肩に掛かるぐらこ長さのブロウの髪。

夏にはしゃぎすぎて日焼けしたのか、肌は色黒だ。

「ちよっとー インターホン押ちてよね！ 居酒屋じゃないんだからー。」

伊達ラムネはその少女に指をさして怒鳴りつけた。

「いいじゃん別にー！ だつて、一回床開いたのに、なんでまた床開かなかきやないんないの？ だから卑屈で言わてるんじゃない、レモンちゃんつてさ！」

天下の伊達ラムネにこんな礼儀も糞もない言葉遣いで喋りかけるなんて、こいつナニモソだ！？

「あー 確かこいつ、桐生和也だべ？」

色黒少女は俺を見るなり、指をさしてきやがった。

「こいつ、じやねえよー 「だべ？」 ってなんだよー 指をすんじやねえよー。」

「へ、そりだけど？」

わいてくる怒りを押し殺して、俺は「名乗れー」とばかりに不思議
そうな顔をする。

「やあー、ビームー、ウチは栃木 とちぎ 莓子 いりこ」

「やあ」つい、洋画の吹き替え版ぐらいでしか聞いたことない。

「どうも……桐生和也です」

「知ってるよー。」

知ってるよー。

俺はお前と違つて礼儀を弁えてんだよー。

栃木莓子とかバカみたいな名前しゃがつて。

「気軽に』『どちら止め』って呼んでねつ

そのまんまだな。

栃木は手をつきだし、握手を求めてきた。

当然、俺も手を出し握手を交わす。

「よひしべ」

栃木が俺に微笑みかける。

また変なのが増えた。

こっちは伊達ラムネで精一杯なんだよ。まあ、助かったことには助かつたんだろうけど……。

「もう終わったかちら？ なじきひさと帰つてよ

伊達ラムネは煙たそうに栃木に向かって手を払う。
しかし、栃木は帰るどころか、背を向けながらソファの背もたれに座り、くいっと体を捻り、

「つーか何してんの？」

と、喋りかけてきた。

少し話しただけでわかる。こいつは絡みづらい。

伊達ラムネも引いてやがる。

「もしかして、レモンちゃん、彼氏い？」

一気に頬を緩め「これだべ？」と小指を立てて俺と伊達ラムネ、交互に見せつけ、冷やかしてきた。

伊達ラムネも満更でもない顔をする。

俺は必死で首を横に振るが、

「でも珍しいねー、超スーパー排他的なレモンつかんが、彼氏だなんて」

栃木は話を進める。

「あたちは都会っ子だもん！」

「背、あつちやけいしね」

「関係ないもん！」

とこつか早く帰してくれよーー！

会長はいつたいなにをやつてるんだ！ 察せよー。いつもみたいにー。

「わつわと帰つてよー！ あたちは腰じやないのー！」

「その通りー！」

栃木は立ち上がると、伊達ラムネの腕を掴んだ。

「マロ先輩が呼んでる。行くべ

「行くって、どうして？」

「自衛隊室に決まつてんじゃんー。早くしないとウチが怒られるのー！」

すると伊達ラムネは「うー……」とうつむいた。

その、マロ先輩とかいう人、結構な権力を持つてるらしい。

伊達ラムネは俺の方を見ると、

「ちょっと待つてねケシャ」

と、立ち上がり、部屋を出ていった。

つーか、自衛隊室なんていつの間に……。

栃木莓子はもしかして自衛隊の手先か？

第10話 ラムネハウス2（後書き）

次あたりに「キャラ紹介3」を投稿すると思います。。。。

第1-1話 ファンタスティック5 超濃キャラコニーシト

携帯、県外だつても。どうしようもないな、この状況はさ。

伊達ラムネことレモンちゃんが出ていつて数分。

何やら出入り口が騒がしい。

かと思うと扉が開き、さっき出でていったばっかの伊達ラムネ、栃木
苺子をはじめ、田原俊麻呂さん、新山丸子さん、

そして、見知らぬネコ耳のおそらくカチューシャをつけた女子生徒
と、柴犬二匹が入ってきた。

「隊長たん！」の子があたちのペットのケシヤだよ。ほら、ケシ
ヤあいしゃつは？

伊達ラムネにそう言われて、ムカつきながら俺は立ち上がり敵の
田原さんに「どうも、はじめまして」と挨拶をする。

「人間なんて飼つてるの？ レモンちゃんはー なんて悪趣味な！」

ネコミミ少女が俺を指差して言つ。俺もそう思つ。

柴犬二匹も一齊に、ワンツー！ と吠える。

山口さんから暴力を抜き取つたような新山さんは、冷静に「私は新
山丸子。ほら、あんたも挨拶しなさい」とネコミミ少女の頭を軽く
叩いた。

「…………」少女はめんべくしゃべった。

「私は、猫好 飛々（ねこよし ぴょんぴょん）」

と、挨拶し、床を駆け回る一匹の柴犬を指差した。

「赤い首輪の子がジョン。青の子がマッケンロー。よろしく

飼い主もさうだが犬まで変わった名前で……。

自衛隊員五人はソファに座ると、生徒会役員である俺の前で、平然と会議をはじめた。

「さつき、騎士団と生徒会が会談をしていたが、何を話してたかは大体わかる」

田原俊麻呂もといマロ先輩が神妙な顔で呟くよつて言つ。

「あ、あのー……」

俺は恐る恐るマロ先輩に声をかける。

「なんだ？」

「一応、俺、生徒会の役員なんですけど……」

「なんの話だ？」

すると伊達ラムネが「そりゃー」と割り入ってきた。

「ケシヤはあたちのペシトなんだから、もつ自衛隊のメンバーだよ？」

一步譲つて、いや百歩譲つてペシトになると云つたとしても、自衛隊員にはなるなんて一言も……。

「ケシヤって、和也のあだ名? 変なー」

とちおとめが足をふくらむしながら云つ。

栃木莓子が言ひじやねえ!

「とにかく君は自衛隊員だ。さあ、こゝに座れ。知つてることを全て話してもらひう」

マロ先輩がそう言つた途端、耳元でスコソソと云ふ音とともに風を感じた。

俺の背後は壁で、横目でなにが起つたのか確認した。

壁には、矢のようなものが刺さつていて、壁にはビビが入っている。しかも矢は、ロープのようないもんに繋がれていて、それを辿つていくと……

伊達ラムネに行き着いた。

性格には伊達ラムネが持つているクマのぬいぐるみだ。

ぬごぐるみの背中がパックりあいていて、その中から矢とロープが。

「座つて、ケシャ」

伊達ラムネは微笑しながら囁く。

俺は殺氣を感じ、ロボットのような動きでソファにつく。

伊達ラムネは、矢とロープを抜き取ると、掃除機のコンセントみたいにしめるしめるつと、ぬごぐるみの中に納めた。

そして俺の隣まできて身を寄せて座つた。

なんだこの状況は……。

とちおとめがクスッと笑う。

「さあ、和也くん。話すんだ。知つてることを」

「は、はい……」

俺は死にたくない……。

「生徒会は何を企んでるんだ?」

「えーっと……騎士団と、手を組むとかなんとか

「本当か?」

伊達ラムネの前で「実はね、嘘なんです」なんて言つたら殺される。

マロ先輩は俺の顔色を悟ったのか、「騎士団の野郎……」と呟く。

「騎士団なんてさ、レモンちゃんがいれば楽勝だべ…… 生徒会が動
き出す前にやつつかれておつよー。暗殺暗殺ー。」

とちおとめがテーブルに両足をのせながら囁く。

だらしない女だ。

「落ち着きなさい！ そんな手荒なマネしたら、騎士団みたいな嫌
われ者になるじゃない。騎士団が消えてまた同じのが出てきて。た
だの交代ばんこになるじゃない！」

丸子さんがとちおとめをなだめる。

それより、交代ばんこ？ なんだそれ。

言つてることが全体的にバカみたいだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4913w/>

用意周到な美少女生徒会長と平凡な俺

2011年11月30日09時11分発行